

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第240集

西洞遺跡 I

第二東名No.8 地点

弥生時代以降編

第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

沼津市 - 7

2011

中日本高速道路株式会社東京支社
財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第240集

西洞遺跡 I

第二東名No.8 地点

弥生時代以降編

第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

沼津市 - 7

2011

中日本高速道路株式会社東京支社
財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所

序

第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査は、平成8年度から確認調査が開始され、本年度で15年目を迎えます。その調査は、静岡県の文化財保護行政の歴史の中において、これまで経験したことがない大きな規模・長い期間で実施されています。

発掘調査では、県内の各所において、旧石器時代から中・近世にわたる各時代の多種多様な遺構・遺物が発見され、これまでにない多くの成果もあげています。

財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所では本書で報告する西洞遺跡が位置する沼津市域において、第二東名建設工事範囲内にある12地点において本発掘調査を実施しています。

これらの発掘調査によって、愛鷹山麓には、古く旧石器時代から人々の営みが地中に刻まれてきたことを、改めて確認することができました。

本書で報告する第二東名No.8地点に該当する西洞遺跡では、旧石器～古墳時代を中心とした遺構・遺物が発掘調査されています。本書ではその内、弥生時代以降の遺構・遺物について報告を行います。

西洞遺跡では弥生時代後半から古墳時代初頭にかけての、竪穴住居や方形周溝墓と呼ばれる周囲を四角に巡る溝を持つ墓、畝状遺構と呼ばれる等間隔に数条にわたって掘られた溝などが検出されました。住居と墓、畝状遺構では出土土器や主軸方向の検討から明らかに異なるグループを抽出できることから、集落の変遷過程を想定できました。

これらの発掘成果が、多くの研究者の方々のみならず、広く一般の方々の目に触れることにより、地域の歴史を考える材料のひとつとなれば幸いです。

最後になりましたが、現地調査及び資料整理、並びに本書の作成にあたり、中日本高速道路株式会社東京支社、静岡県教育委員会ほか、各関係機関のご理解とご協力をいただいたことに心から感謝申し上げます。また、調査にご理解いただいた地元の皆様、現地での発掘作業、地道な資料整理作業にあたられた方々に厚くお礼を申し上げます。

平成23年3月

財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所

所長 石田 彰

例　　言

- 1 本書は静岡県沼津市足高犀上116-2他に所在する第二東名No.8地点（西洞遺跡）の発掘調査報告書
1・弥生時代以降編である。
- 2 調査は第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査業務として、中日本高速道路株式会社（旧日本道路公団静岡建設局）の委託を受け、静岡県教育委員会文化財保護課（平成22年静岡県教育委員会文化課から改組）の指導のもと、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が実施した。
- 3 No.8地点の確認調査・本調査及び資料整理の期間は以下のとおりである。

確認調査

平成10年2月～3月

本調査

本調査Ⅰ期 平成10年4月～平成11年1月

本調査Ⅱ期 平成10年12月～平成11年2月

本調査Ⅲ期 平成11年1月～平成11年3月

本調査Ⅳ期 平成19年4月～平成19年8月

資料整理

平成22年2月～平成23年3月

- 4 調査体制は以下のとおりである。

平成9年度

所長	斎藤 忠	副所長	池谷 和三	常務理事兼総務部長	三田村昌昭
調査研究部長	石垣 英夫	調査研究四課長	橋本 敬之	主任調査研究員	中嶋 郁夫
調査研究員	後藤 正人	小林 靖彦			

平成10年度

所長	斎藤 忠	常務理事兼総務部長	伊藤 友雄	調査研究部長	石垣 英夫
調査研究部次長	心得兼調査研究一課長	佐野五十三		主任調査研究員	中嶋 郁夫
調査研究員	岩崎しのぶ	殿岡 崇浩	小林 靖彦		

平成19年度

所長	斎藤 忠	常務理事兼事務局長	清水 哲	総務課長兼事務局次長	大場 正夫
調査研究部次長	及川 司	調査課係長	中鉢 寛治	調査研究員	木崎 道昭
調査研究員	岩本 貴	次長兼事業係長	稻葉 保幸	次長兼総務課長	松村 享

平成21年度（資料整理）

所長兼常務理事	天野 忍	次長兼事業係長	稻葉 保幸	次長兼総務課長	松村 享
次長兼調査課長	及川 司	次長兼東部統括係長	中鉢 寛治	東部調査係長	笹原千賀子
調査研究員	岩本 貴				

平成22年度（資料整理）

所長兼常務理事	石田 彰	次長兼総務課長	松村 享	専門監兼事業係長	稻葉 保幸
調査課長	中鉢 寛治	調査第二係長	岩本 貴		
調査研究員	岩名健太郎	三好 元樹			

- 5 本書の執筆は岩本 貴が行った。

- 6 本書の編集は財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が行った。

- 7 整理作業では以下の方々に御指導、御助言を賜った。厚く御礼申し上げる。

- 池谷信之 小崎 晋 佐藤祐樹 山本恵一 渡井英誉（五十音順・敬称略）。
- 8 発掘調査の資料は、すべて静岡県教育委員会が保管している。

凡　例

本書の記載については、以下の基準に従い統一を図った。

- 1 本書で用いた遺構・遺物などの位置を表す座標は、すべて平面直角座標第VII系を用いた国土座標、日本測地系（改正前）を基準とした。
- 2 調査区の方眼設定は、上記の国土座標を基準に設定した。
(X = -94400.0, Y = 31950.0) = (0, A)
- 3 出土遺物は4桁の通し番号（=遺物番号）を付して取り上げた。報告書中の挿図番号とは同一でない。
- 4 遺構図、遺物実測図の縮尺は、遺構1/60、土器1/3を原則とし、それぞれにスケールを付した。
- 5 色彩に関する用語・記号は、新版『標準土色模』（農林水産省技術会議事務局監修 1992）を使用した。
- 6 土層名は第III章第4節の基本土層柱状図（第11図）に表示した名称を用いる。
- 7 第III章第2節の周辺遺跡地図（第6図）は国土地理院発行1:25,000地形図「沼津」を複写し加工・加筆した。

目　次

第I章　調査に至る経緯	1
第II章　沼津市内の確認調査	2
第III章　遺跡の概要	
第1節　地理的環境	10
第2節　歴史的環境	12
第3節　調査の方法と経過	14
第4節　基本層序	19
第IV章　弥生時代以降の遺構と遺物	
第1節　第2層（新期スコリア層）上面検出の遺構・遺物	20
1　遺構と遺物の概要	20
2　溝	20
3　土坑・小穴 等	39
第2節　第3層（栗色土層）上面検出の遺構・遺物	47
1　遺構と遺物の概要	47
2　堅穴住居	47

3	掘立柱建物	70
4	小穴・土坑	72
5	方形周溝墓	82
6	溝	92
第3節	遺構外の出土遺物	97

第V章 調査の成果とまとめ

第1節	遺 構	103
第2節	遺 物	109

写真図版

報告書抄録

挿 図 目 次

第Ⅰ章

第1図	第二東名（沼津市内）確認調査地点 位置図	2
第2図	第二東名（沼津市内）の調査対象 箇所（№3～15地点）	6
第3図	第二東名（沼津市内）の調査対象 箇所（№16～25地点）	7
第4図	第二東名（沼津市内）の調査対象 箇所（№25～28地点）	8
第5図	第二東名（沼津市内）の調査対象 箇所（№29～38地点）	9

第Ⅲ章

第6図	沼津周辺主要遺跡地図	11
第7図	確認調査試掘坑配置図	14
第8図	本調査対象範囲	16
第9図	本調査区分図	16
第10図	グリッド配置図	18
第11図	基本層序（弥生時代以降）	19
第Ⅳ章		
第12図	第2層上面遺構全体図	21
第13図	東SD01～東SD03	22
第14図	東SD04～東SD09	24
第15図	東SD10・東SD11・東SD14	25
第16図	東SD16～東SD19・東SD47	26
第17図	東SD48～東SD51	29

第18図	西SD01～西SD06	31
第19図	西SD07～西SD14	33
第20図	西SD15～西SD19	35
第21図	西SD20～西SD22・ 西SD29～西SD31	37
第22図	東SP01～東SP16・東SP57・ 東SP97～東SP99	42
第23図	西SP01～西SP21	44
第24図	西SP22～西SP31	45
第25図	第3層上面遺構全体図	48
第26図	1号住居（SB01）	49
第27図	1号住居 出土土器分布図	50
第28図	1号住居 出土土器	50
第29図	2号住居（SB02）	51
第30図	2号住居 出土土器分布図	52
第31図	2号住居 出土土器	52
第32図	2号住居 出土土器	53
第33図	3号住居（SB03）	55
第34図	3号住居 出土土器分布図	56
第35図	3号住居 出土土器	56
第36図	4号住居（SB04）	57
第37図	4号住居 出土土器分布図	59
第38図	4号住居 出土土器	60
第39図	5号住居（SB05）	62
第40図	5号住居 出土土器分布図	63

第41図	5号住居 出土土器	63
第42図	5号住居 出土土器	64
第43図	遺構間土器接合図 (4・5号住居)	64
第44図	遺構間接合土器 (4・5号住居)	64
第45図	6号・7号住居 (SB06・SB07)	66
第46図	10号住居 (SB10)	67
第47図	11号住居 (SB11)	68
第48図	12号・13号住居 (SB12・SB13)	68
第49図	12号・13号住居 出土土器分布図	68
第50図	12号・13号住居 出土土器	69
第51図	1号掘立柱建物 (SH01)	70
第52図	2号掘立柱建物 (SH02)	71
第53図	2号掘立柱建物 出土土器	71
第54図	3号掘立柱建物 (SH03)	72
第55図	小穴・土坑1	74
第56図	小穴・土坑2	77
第57図	小穴・土坑3	78
第58図	1号方形周溝墓	79
第59図	1号方形周溝墓 出土土器分布図 出土土器	83
第60図	2号 (SD35)・3号 (SD45) 方形周溝墓	84
第61図	2号方形周溝墓	85
第62図	2号方形周溝墓 出土土器分布図	86
第63図	2号方形周溝墓 出土土器	87
第64図	3号方形周溝墓	89
第65図	3号方形周溝墓 出土土器分布図	90
第66図	3号方形周溝墓 出土土器	90
第67図	3号方形周溝墓上面 出土土器	91
第68図	烟状遺構	94
第69図	東SD20・東SD21・東SD33・ 東SD34・東SD40～東SD42・ 西SD27・西SD28・西SD32	95
第70図	遺構外 出土土器	99
第V章		
第71図	主要遺構の共伴土器の時期	104
第72図	主要遺構の主軸方向と切り合い 関係	105
第73図	遺構方位比較と変遷図	106
第74図	西洞遺跡周辺の弥生後期～ 古墳前期の調査成果	108
第75図	出土土器の器種組成比率	109
第76図	第3層上面遺構内出土土器実測図 1	111
第77図	第3層上面遺構内出土土器実測図 2	112
第78図	壺底部資料1 (4・5号住居間接合土器)	114
第79図	壺底部資料2 (3号方形周溝墓上面土器)	115

挿表目次

第II章

第1表	第二東名 沼津市内の確認調査	3
-----	----------------	---

第III章

第2表	周辺遺跡地名表	11
-----	---------	----

第IV章

第3表	第2層 溝 (SD) 計測表	39
第4表	第2層 土坑・小穴 (SP) 計測表	46

第5表	豎穴住居 (SB) 計測表	69
-----	---------------	----

第6表	掘立柱建物 (SH) 計測表	72
-----	----------------	----

第7表	第3層 小穴・土坑 (SP) 計測表	81
-----	--------------------	----

第8表	第3層 方形周溝墓計測表	92
-----	--------------	----

第9表	第3層 溝 (SD) 計測表	96
-----	----------------	----

第10表	土器観察表	100
------	-------	-----

図版目次

図版1	調査区全景1（南西から）	図版14	3号住居 完掘状況（南から）
	調査区全景2（東から）		3号住居 炉半截（東から）
図版2	第2層上面 東区全景（南西から）	図版15	4号住居 遺物出土状況1（南から）
	第2層上面 西区全景（南から）		4号住居 遺物出土状況2（南から）
図版3	第2層上面 東区拡張区全景 (南東から)		4号住居 遺物出土状況拡大（南から）
	第2層上面 東道路区全景（南から）	図版16	4号住居 完掘状況（南から）
図版4	第2層上面 西道路区遺構検出状況 (南東から)		4号住居 遺物出土状況1（南から）
	第2層上面 東SP57完掘状況 (北東から)	図版17	5号住居 遺物出土状況2（南から）
図版5	第3層上面 全景（上空から）	図版18	5号住居 完掘状況（南から）
	合成写真		5号住居 炉半截（西から）
図版6	第3層上面 東区全景（南から）	図版19	6号住居 遺物出土状況1（南から）
	第3層上面 西区全景（南東から）		6号住居 遺物出土状況2（南から）
図版7	第3層上面 東道路区全景（南から）	図版20	6号住居 完掘状況（南から）
	第3層上面 西道路区全景（南から）		6号住居 炉半截（西から）
図版8	第3層上面 東区柱状遺構全景 (南東から)	図版21	7号住居 遺物出土状況（南東から）
	第3層上面 東区拡張区全景 (南東から)		7号住居 完掘状況（南東から）
図版9	第3層上面 東道路区1号方形周溝墓 西溝完掘状況（東から）	図版22	10号住居 遺物出土状況1（南から）
図版10	1号住居 遺物出土状況1（北西から）		10号住居 遺物出土状況2（南から）
	1号住居 遺物出土状況2（北西から）		10号住居 完掘状況（南から）
	1号住居 完掘状況（北西から）	図版23	12号・13号住居 遺物出土状況 (西から)
図版11	1号住居 炉半截（北東から）		12号・13号住居 完掘状況（西から）
	2号住居 遺物出土状況1（南東から）	図版24	1号掘立柱建物 完掘状況（南から）
	2号住居 遺物出土状況2（南東から）		2号・3号掘立柱建物 完掘状況（南東から）
図版12	2号住居 遺物出土状況拡大1 (東から)		2号・3号方形周溝墓 遺物出土状況 (北西から)
	2号住居 遺物出土状況拡大2 (北東から)	図版25	2号・3号方形周溝墓 遺景（北から）
	2号住居 完掘状況（南東から）		2号・3号方形周溝墓 完掘状況 (南西から)
図版13	2号住居 炉半截（東から）	図版26	2号方形周溝墓 遺物出土状況1 (東から)
	3号住居 遺物出土状況1（南から）		
	3号住居 遺物出土状況2（南から）		

- 図版25 2号方形周溝墓 西溝遺物出土状況2
(北から)
2号方形周溝墓 西溝遺物出土状況3
(南西から)
3号方形周溝墓 全景(南西から)
- 図版26 3号方形周溝墓 遺物出土状況
(北西から)
第3層上面 東SD20完掘状況
(南から)
- 図版27 第2層上面 土器
(東SD49 西SD29 東SP03)
第3層上面 土器1 (SB01)
- 図版28 第3層上面 土器2 (SB01 SB02)
- 図版29 第3層上面 土器3 (SB02 SB03)
- 図版30 第3層上面 土器4 (SB03 SB04)
- 図版31 第3層上面 土器5 (SB04)
- 図版32 第3層上面 土器6 (SB05)
- 図版33 第3層上面 土器7
(SB04 SB05 SB12)
- 図版34 第3層上面 土器8 (SB12 SB13
SH02 1号方形周溝墓)
- 図版35 第3層上面 土器9 (1号方形周溝墓)
- 図版36 第3層上面 土器10
(1号方形周溝墓 2号方形周溝墓)
- 図版37 第3層上面 土器11 (2号方形周溝墓)
- 図版38 第3層上面 土器12
(2号方形周溝墓 3号方形周溝墓)
- 図版39 第3層上面 土器13 (3号方形周溝墓)
- 図版40 第3層上面 土器14 (3号方形周溝墓)
- 図版41 第3層上面 土器15
(東SD24 遺構外出土)
- 図版42 遺構外出土土器1
- 図版43 遺構外出土土器2
- 図版44 遺構外出土土器3

第Ⅰ章 調査に至る経緯

第二東名建設に先立ち、日本道路公団東京建設第一建設局静岡調査事務所長は、静岡県教育委員会教育長に対し「第二東海自動車道の埋蔵文化財包蔵地の所在の有無について」照会を行った（平成4年8月）。

県教育委員会は、関係市町村教育委員会を集めて、第二東名路線内の埋蔵文化財踏査連絡会を開催するとともに、第二東名路線内における埋蔵文化財の所在についての照会を行った（平成4年9月）。

静岡県教育委員会教育長は、日本道路公団東京第一建設局静岡調査事務所長に対し、現地踏査結果に基づき、事業地内の埋蔵文化財の所在の有無について回答した（平成5年3月）。

平成6年度には、県教育委員会文化課職員が上記の調査対象箇所について、具体的な調査を進めるための状況調査を行うとともに、前年示されたパーキングエリア・サービスエリア予定地についての踏査を当該市町村教育委員会に依頼、年度末にはその報告・とりまとめがなされた。

日本道路公団静岡建設所（平成6年2月設置）と県教育委員会文化課は、「第二東名関連埋蔵文化財連絡調整会議」を設置し、第二東名建設に伴う埋蔵文化財の取り扱いを協議する場とした（平成7年12月）。

日本道路公団静岡建設局（平成8年7月、日本道路公団静岡建設所から改組）と県教育委員会は、第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財の取り扱いについての確認書を締結した（平成8年9月）。さらに、同月、調査実施機関である財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所を入れた三者は、第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査実施方法等について定めた協定書を締結し、平成8年度内に一部埋蔵文化財の調査に着手していくこととなった。

なお、第二東名に係る埋蔵文化財の調査は、関係者協議の結果、基本的には本線及び、サービスエリア・パーキングエリア、排水処理場について財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が調査を実施、工事用道路及び取付道路部分については、当該市町村教育委員会が対応することとしたが、調査の進展に伴う調査量の増大に財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所の体制が追いつかず、本線部分の一部について、沼津市や静岡市、浜北市、富士宮市、裾野市、富士市の各教育委員会に対応を依頼するとともに、特に東部地域を中心に民間の発掘調査支援機関の導入を図った。

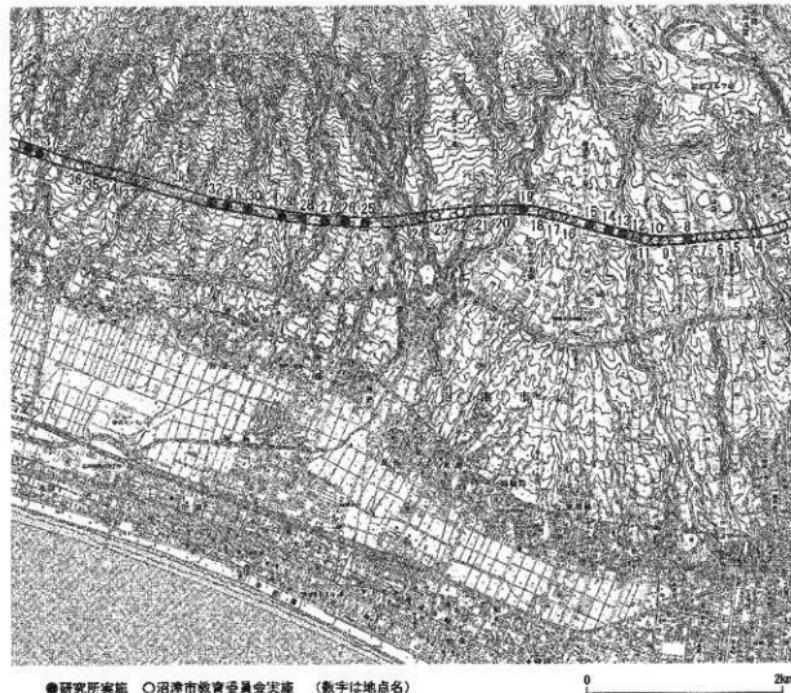
このような経緯の中、第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査として平成10～19年度にかけて、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所がNo.8地点（西洞造跡）の現地調査を実施した。

第Ⅱ章 沼津市内の確認調査

第二東名に係る埋蔵文化財の調査対象地点の呼称は、現東名との接続部を起点として西に向かって通し番号を付しNo.1地点、No.2地点、No.3地点…としている。また、各地点の発掘調査は、用地買収の進捗状況や本体工事の工程、調査体制等様々な理由から対象地、時期を分けて実施しているものが多い。調査が複数次にわたる場合は、確認調査その1、その2、その3…、と呼称している。

沼津市の調査地点はNo.3地点（尾上第1遺跡）からNo.38地点（笄ヶ沢遺跡）までの36地点で、このうち当研究所が埋蔵文化財の確認調査を実施した地点はNo.8・13～15・19・25～32・37・38地点の15地点である（第1図、第1表）。その他の地点については沼津市教育委員会の協力を得て実施されている。

ここでは当研究所が実施した沼津市内における第二東名に係る確認調査の概要を述べることとする。なお、当研究所が実施した沼津市内の確認調査のほとんどが本調査対応となっており、既刊の報告書で触れられている他、今後刊行予定の報告書によっても掲載される計画のため、調査の詳細については当該報告書を参照されたい（研究所 2008、2009-1、2009-2、2010-1、2010-2）。



第1図 第二東名（沼津市内）確認調査地点位置図
(国土地理院発刊1:50,000地形図「沼津」「愛鷹」に加筆)

第1表 第二東名 沼津市内の確認調査

地点名	遺跡名	所在地	調査期間	調査対象面積
No.3～7地点	沼津市教育委員会により実施			
No.8地点	西洞遺跡	沼津市足高尾上116-2他	確認調査その1 平成10年2～3月	1,450m ²
No.9～12地点	沼津市教育委員会により実施			
No.13地点	イタドリA遺跡	沼津市足高字尾上51-44他	確認調査その1 平成10年4～5月	1,725m ²
No.14地点	イタドリB遺跡	沼津市足高字尾上43-25他	確認調査その2 平成10年2～3月	10,147m ²
No.16地点	イタドリC遺跡	沼津市宮本173-1他	確認調査その1 平成9年7～8月 確認調査その2 平成10年1～2月 確認調査その3 平成10年1～2月	19,408m ²
No.17～18地点	沼津市教育委員会により実施			
No.19地点	元野遺跡	沼津市宮本字元野266-18他	確認調査その1 平成9年4～6月 確認調査その2 平成10年5月 確認調査その3 平成10年7～8月	6,875m ² 1,028m ² 6,624m ²
No.20～24地点	沼津市教育委員会により実施			
No.25地点	秋葉林遺跡	沼津市吉野字秋葉林831他	確認調査その1 平成11年1～3月 確認調査その2 平成11年3月 確認調査その3 平成11年11～12月 確認調査その4 平成22年8～10月	63,246m ²
No.25地点	的場古墳群・的場遺跡	沼津市根古屋939他	確認調査その1 平成11年2～3月 確認調査その2 平成15年4～5月	23,206m ² 2,875m ²
No.27地点	西ヶ沢遺跡	沼津市根古屋字西ヶ沢西野他	確認調査その1 平成11年9～11月 確認調査その2 平成12年8～9月	11,079m ² 30,410m ²
No.28地点	舞沢遺跡	沼津市街古屋字舞沢998-19他	確認調査その1 平成14年9～10月	11,323m ²
No.29地点	越神遺跡	沼津市井出字越神1591-3他	確認調査その1 平成12年12月 確認調査その2 平成13年9～10月 確認調査その3 平成15年6～6月 確認調査その3 平成22年5～6月	6,777m ² 11,731m ² 1,127m ² 2,000m ²
No.30地点	落荷遺跡	沼津市井出字落荷1362-3他	確認調査その1 平成11年4～6月 確認調査その2 平成11年4～6月 確認調査その3 平成11年4～7月	6,251m ² 6,251m ² 3,128m ²
No.31地点	跡ガサ遺跡a区	沼津市井出字跡ガサ1328-20他	確認調査その1 平成11年4～6月 確認調査その2 平成11年7～9月	4,966m ² 7,121m ²
No.32地点	跡ガサ遺跡b区	沼津市井出字跡ガサ1337-22他	確認調査その1 平成10年12～11年2月 確認調査その2 平成11年3月 確認調査その3 平成11年8～10月	5,430m ² 179m ² 7,071m ²
No.33～36地点	沼津市教育委員会により実施			
No.37地点	神ヶ沢原山遺跡a区	沼津市石川神ヶ沢1008-10他	確認調査その1 平成10年6～11月	8,880m ²
No.38地点	神ヶ沢原山遺跡b区	沼津市石川神ヶ沢1017-1他	確認調査その1 平成10年8～11月	1,120m ²

1 No.8地点（西洞遺跡）

沼津市足高尾上116-2他に所在する。平成10年2～3月まで確認調査を実施した。調査の過程で、数箇所のテストピットから表土直下において遺構が検出されたため、テストピットの数を増やし調査を進めた。調査の結果、中世・弥生時代末～古墳時代前期、縄文時代の大きく3つの時期の遺構・遺物が確認された。なお、弥生時代以降の遺構が試掘坑の各所で確認されたため、縄文時代の一部及び旧石器時代の遺構・遺物については、本調査が完了後改めて把握する必要が考えられた。(詳細は第III章第3節を参照のこと。) 本地点は平成10年度及び平成19年度に本調査が実施されている。

2 No.13地点（イタドリA遺跡）

沼津市足高字尾上51-44他に所在する。平成10年4～5月まで確認調査を実施した。尾根に沿ってテス

3 No.14地点（イタドリB遺跡）

沼津市足高字尾上43-25他に所在する。平成9年7～8月(その1)及び平成10年2～3月(その2)の2回に分けて確認調査を実施した。テストピット2箇所とトレンチ2本(その1)、テストピット14箇所、トレンチ9本(その2)により調査した。調査の結果、縄文時代の土坑、焼土、土器、石器、礫、旧石器時代の石器、礫等が検出された。本地点は平成10年4～6月に本調査が実施されている(研究所 2009-2)。

4 №15地点（イタドリC遺跡）

沼津市宮本173-1他に所在する。平成9年7～8月（その1）、平成10年1～2月（その2）、平成10年9～12月（その3）の3回に分けて確認調査を実施した。なお、確認調査その3は本調査結果を受けて範囲を拡張して調査を実施したものである。テストピット1箇所とトレンチ（その1）、テストピット21箇所（その2）、テストピット・トレンチ（その3）により調査した。調査の結果、縄文時代の土坑、焼土、土器、石器、礫、旧石器時代の石器、礫等が検出された。本地点は平成10年6～9月に本調査が実施されている（研究所 2009-2）。

5 №19地点（元野遺跡）

沼津市宮本字元野266-18他に所在する。平成9年4～6月（その1）、平成10年5月（その2）、平成10年7～8月（その3）の3回に分けて確認調査を実施した。テストピット4箇所とトレンチ4本（その1）、テストピット2箇所（その2）、テストピット13箇所（その3）により調査した。調査の結果、縄文時代及び旧石器時代の遺構・遺物等が検出された。本地点は平成9年8月～平成13年3月にかけて4回に分けて本調査が実施されている（研究所 2008）。

6 №25地点（秋葉林遺跡）

沼津市青野字秋葉林631他に所在する。平成11年1～3月（その1）、平成11年3月（その2）、平成11年11～12月（その3）、の3回に分けて確認調査を実施した。調査の結果、旧石器～古代にわたる遺構・遺物等が検出された。本地点は平成9年8月～平成13年3月にかけて4回に分けて本調査が実施されている（研究所 2009-1）。なお、本体工事に係る設計変更に伴い、平成22年8～10月に追加の確認調査を行い（その4）、一部から遺構が検出されたため、本調査を実施した（未報告）。

7 №26地点（的場古墳群・的場遺跡）

沼津市根古屋939他に所在する。平成11年2～3月（その1）、平成15年4～5月（その2）に確認調査を実施した。調査の結果、縄文土器、弥生土器、古墳時代の横穴式石室等が検出された。本地点は平成11～19年度にかけて5回に分けて本調査が実施されている（研究所 2010-2）。

8 №27地点（測ヶ沢遺跡）

沼津市根古屋字鎌ヶ沢西野他に所在する。平成11年9～11月（その1）、平成12年8～9月（その2）、平成14年8～10月（その3）に確認調査を実施した。トレンチ6本、テストピット3箇所（その1）、トレンチ10本、テストピット29箇所（その2）、テストピット23箇所（その3）により調査した。調査の結果、旧石器～縄文時代の遺構・遺物等が検出された。本地点は平成11～20年度にかけて断続的に本調査が実施されている。なお、本調査の一部は沼津市教育委員会の協力を得て実施されている（未報告）。

9 №28地点（鎌沢遺跡）

沼津市根古屋字鎌ヶ沢998-19他に所在する。平成12年12月に確認調査を実施した（その1）。トレンチ4本、テストピット5箇所により調査した。調査の結果、縄文時代の土器、石器、礫、旧石器時代の礫群、石器集中が認められた。本地点は平成13年11月～平成14年3月、平成14年8月～平成15年3月に本調査が実施されている（未報告）。

10 №29地点（鎌神遺跡）

沼津市井出字鎌神1391-3他に所在する。平成12年9～10月（その1）、平成15年5～6月（その2）、平成22年5～6月（その3）に確認調査を実施した。調査の結果、旧石器時代の礫群、石器、縄文時代の石器、礫、古墳～平安時代と考えられる構等が検出された。本地点は平成14年4～8月に本調査が実施されている（未報告）。

11 №30地点（若荷沢遺跡）

沼津市井出字若荷沢1362-3他に所在する。平成11年3月（その1）、平成11年4～6月（その2）、平成11年4～7月（その3）に確認調査を実施した。トレンチ6本、テストピット3箇所（その1）、トレンチ9本、テストピット21箇所（その2）、トレンチ7本、テストピット7箇所（その3）により調査した。調査の結果、旧石器時代の礫群、石器、縄文時代の集石、土器、石器が検出された。本地点は平成11年4～7月に対象範囲の一部について本調査が実施されている（研究所 2010-1）。

12 №31地点（藤ボサ遺跡a区）

沼津市井出字藤ボサ1328-20他に所在する。平成11年4～6月（その1）、平成11年7～9月（その2）に確認調査を実施した。トレンチ9本、テストピット11箇所（その1）、トレンチ11本、テストピット23箇所（その2）により調査した。調査の結果、旧石器時代の礫群、石器、縄文時代の土器、石器、古墳時代以降と考えられる土坑・溝が検出された。遺構・遺物検出範囲については、必要に応じて調査範囲を拡張し記録保存を行った（研究所 2010-1）。

13 №32地点（藤ボサ遺跡b区）

沼津市井出字藤ボサ1337-22他に所在する。平成10年12月～平成11年2月（その1）、平成11年2月（その2）、平成11年8～10月（その3）に確認調査を実施した。トレンチ13本、テストピット22箇所（その1）、トレンチ1本（その2）、トレンチ4本、テストピット6箇所（その3）により調査した。調査の結果、旧石器時代の石器、縄文時代の土器、石器、古墳1基が検出された。本地点は古墳検出範囲について本調査を実施した（研究所 2010-1）。

14 №37地点（神ヶ沢第II遺跡a区）

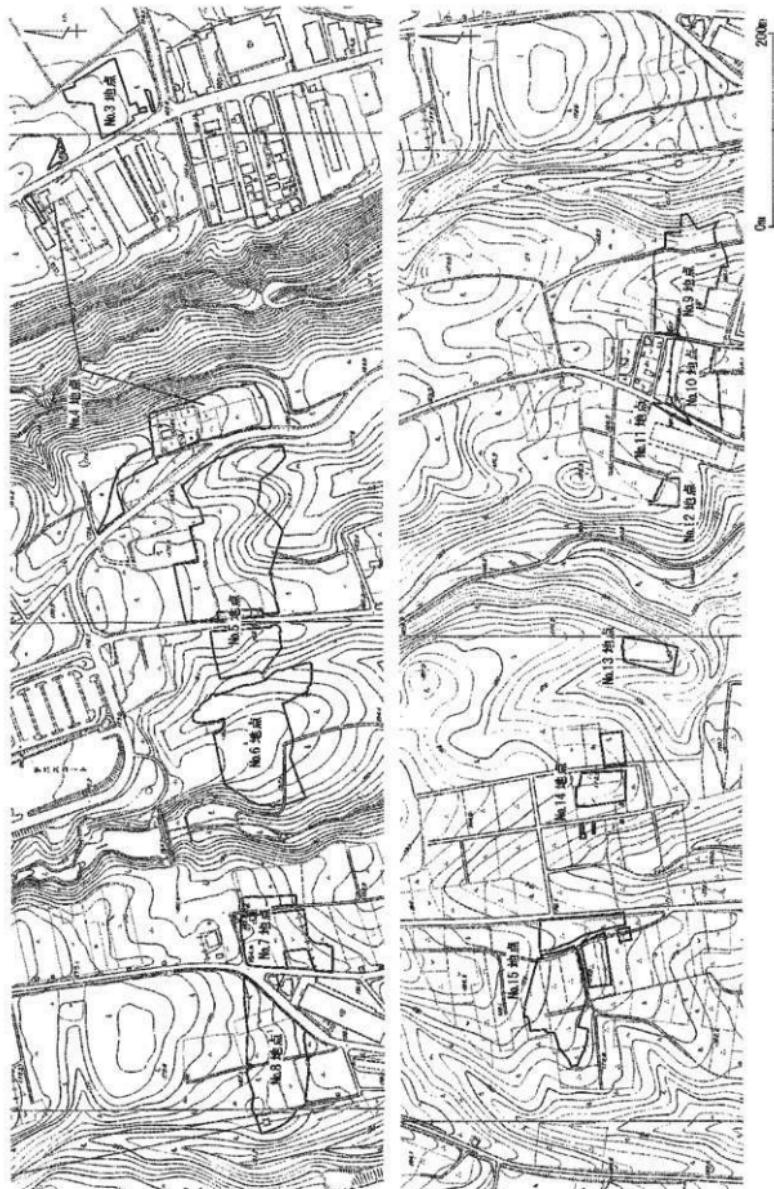
沼津市石川神ヶ沢1008-10他に所在する。平成10年8～11月（その1）に確認調査を実施した。調査の結果、縄文時代の小穴、土器、石器、礫、時期不明の溝等が検出された。遺構・遺物の出土が散漫であったため、同検出箇所を範囲拡張して記録保存を行い調査は終了した（研究所 2010-1）。

15 №38地点（神ヶ沢第II遺跡b区）

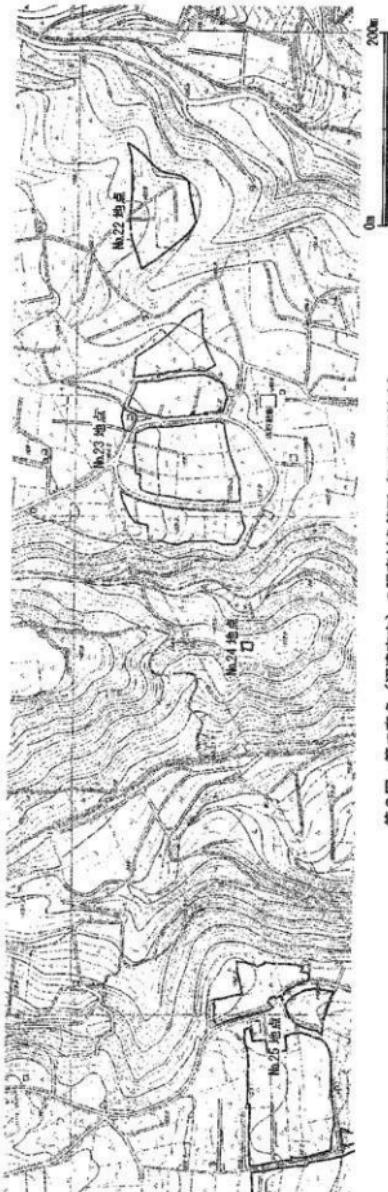
沼津市石川神ヶ沢1017-1他に所在する。平成10年8～11月（その1）に確認調査を実施した。トレンチ3本、テストピット4箇所により調査した。調査の結果、縄文時代の小穴、土坑、溝、土器、石器等が検出された。遺構・遺物の出土が散漫であったため、遺構・遺物検出箇所について記録保存を行い調査は終了した（研究所 2010-1）。

参考文献

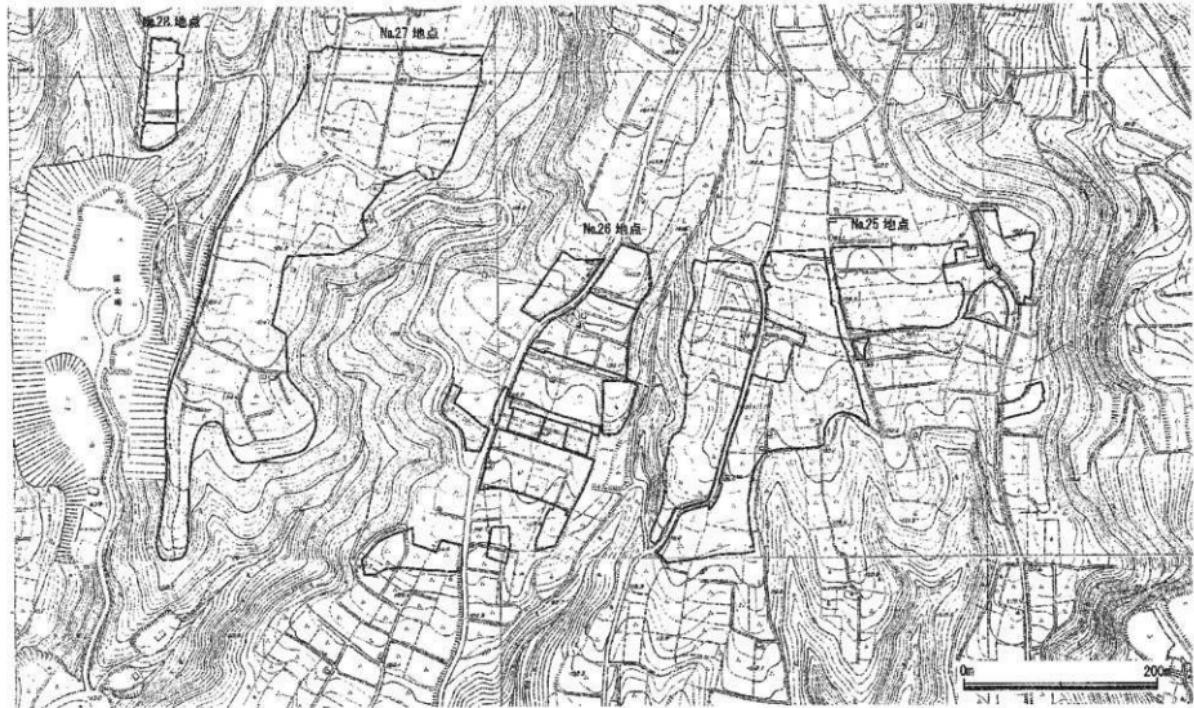
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2008 元野遺跡
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2009-1 秋葉林遺跡 I
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2009-2 イタドリA遺跡・イタドリB遺跡・イタドリC遺跡
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2010-1 沼津市井出・石川神ヶ沢の遺跡
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2010-2 的場古墳群・的場遺跡



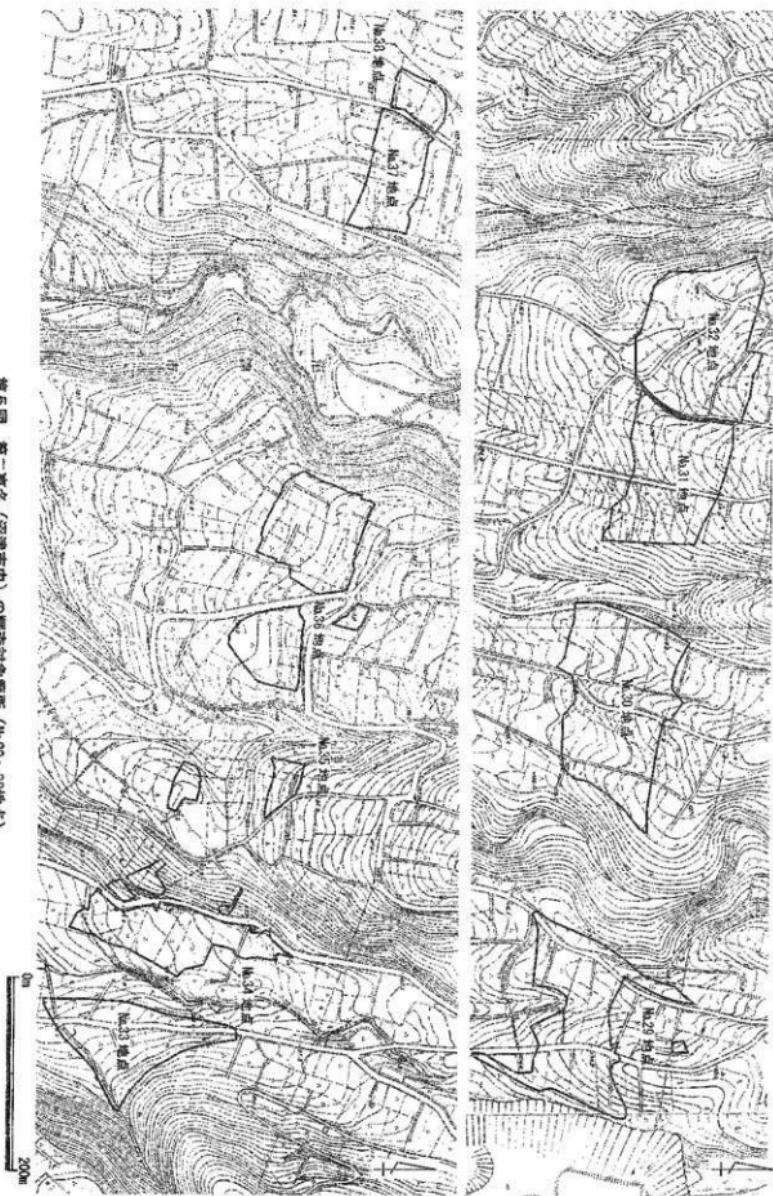
第二図 第二東名（沼津市内）の調査対象箇所（No.3～15地点）



第3図 第二敷名(沼津市内)の照査対象箇所 (No.16~25地点)



第4図 第二東名（沼津市内）の調査対象箇所（No.25～28地点）



第5図 第二實名（横須賀市内）の測量対象箇所（No.29～34地点）

第三章 遺跡の概要

第1節 地理的環境

西洞遺跡（No.8地点）は、JR沼津駅の北約6kmの愛鷹山南麓、標高160m付近の緩斜面、静岡県沼津市足高尾上116-2他に位置する（第6図）。遺跡の北東約200mには愛鷹広域公園が、南約300mには東名高速道路が走っている。

遺跡が位置する沼津市は、面積187.12km²、人口207,835人（平成22年4月1日現在）をかかえた県東部の都市である。市南部は旧戸田村に該当するが、いわゆる平成の大合併により平成17年4月に沼津市と合併している。首都100km圏にあって、恵まれた自然環境と、伊豆方面への交通拠点あるいは広域的な商業・文化拠点として、古くからこの地域の政治、経済、文化の中心的役割を担っている。

駿河湾沿岸を緑色に縁取る千本松原、市街地のすぐそこまで裾をのばす香貫山、街の中心部を悠々と流れる狩野川、泰然とそびえる愛鷹山とその奥に頭をのぞかせる富士山などの豊かな自然とその変化に富んだ景観は、文人墨客所縁の地になると同時に、新鮮で豊富な魚介類を提供する水産業、お茶やミカンをはじめとした農業、自然条件を生かした観光業、商業、先端技術を誇る工業など多様な産業をバランスよく発展させてきた背景ともなっている。

沼津市の現在の地形は、愛鷹山麓、海岸砂礫州とその背後に形成された湿地帯、いわゆる黄瀬川扇状地堆積物に覆われた扇状地帯、狩野川以南の山体が海岸部付近にまでせまる山間地域の5つに大別できる。

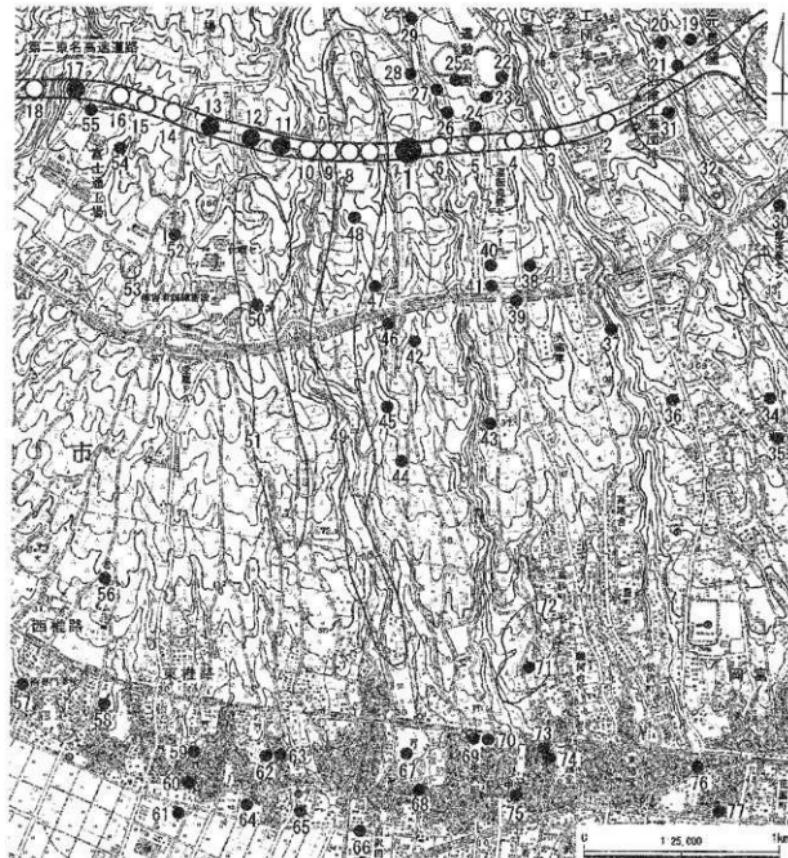
沼津市の北に位置する愛鷹遠峰（通称：愛鷹山）は、最高峰の越前岳、黒岳、呼子岳、姫岳、位牌岳、前岳、袴腰岳、大岳、愛鷹岳の9つの峰からなる成層火山である。愛鷹山は、約48～38万年前に火山活動を開始し、当初は、玄武岩質の溶岩や凝灰角礫岩を生成させた噴出物を降下させた。その後、約17万年前からは、安山岩質の噴出物がみられ、その溶岩流は、南側に扇状の緩斜面を形成し、約10万年前に火山活動を停止したと推定されている。その後、長年の侵食作用により山体の開析が進み、特に頂部は失われ現在の形状となっている。遮蔽物が少ない南麓は、成層火山特有の緩やかな斜面を形成し、古富士・新富士から噴出した大量のスコリア、火山灰が厚く堆積している。特に標高300m以下には旧石器時代から古墳時代にかけて多くの遺跡が立地しており、そのひとつに西洞遺跡があげられる。

また、狩野川河口から富士川河口までの海岸沿いには、両河川により運ばれた砂礫により弧状の砂礫洲が形成され、千本砂丘・田子の浦砂丘などと呼ばれている。現在でも近世東海道整備の名残である秀麗な松林が砂礫洲に沿って連続し、街道独特の雰囲気を残している。

この砂礫洲と愛鷹山麓の間の低湿地は、浮島沼または浮島ヶ原と呼ばれる。これは、愛鷹山裾部付近にまで及んでいた駿河湾の一部が狩野川・富士川が運ぶ砂礫により形成された砂礫洲により海と隔離され、更に愛鷹山から供給される土砂が堆積して湿地化したものである。鎌倉時代の紀行文「東閣紀行」には「此の原、昔は海上にうかび、蘿菜の三つの島の如くありけるによりて浮島と名付けたり」と記され当時の様子がうかがえる。埋め立て等により往時の姿は失われつつあるが、現在でも全国的に見ても貴重な動植物が確認できる数少ない場所として認識されている。

現在の沼津市の中心街付近は、黄瀬川扇状地堆積物に覆われた扇状地が形成される。この扇状地は、富士山の山体崩壊を起源とする泥砂が黄瀬川によって流下、堆積したもので、堆積物中の炭化物などの放射性炭素年代測定により約2,100～2,600年前に形成されたものと考えられている。

狩野川以南の海岸部は山体が海岸部付近にまで迫り、平野部は少ないが、入り組んだ海岸線から、内浦、西浦、戸田といった良港が古くから形成されている。特に南部では伊豆石と呼ばれる凝灰岩が産出され、古代から近代に至る長期間、石材採掘の場としても利用されている。



第6図 沼津周辺主要遺跡地図

第2表 周辺遺跡地名表

※1~18は藤二京名遺跡に伴う埋蔵文化発掘調査

No.	遺跡名	No.	遺跡名	No.	遺跡名	No.	遺跡名	No.	遺跡名
1.	御浜遺跡	16	土師器自立跡	31	東水堀北遺跡	46	尾上七佛道跡	61	寺ノ木道跡
2.	尾上七佛道跡	17	元舟遺跡	32	清水柳北古墳群	47	尾上七佛道跡	62	小屋敷遺跡
3.	二ツ浜遺跡	18	井戸川遺跡	23	清水柳古墳群	48	八糸橋古墳群	63	東和殿押明塚古墳
4.	船出北遺跡	19	イラリキ遺跡	34	寺井遺跡	49	八兵衛源敷古墳群	64	東荒遺跡
5.	中見代原ノ遺跡	20	阿台遺跡	35	寺谷遺跡	50	四大曲道跡	65	川崎道跡
6.	西御遺跡	21	中尾遺跡	36	上松浜北遺跡	51	高見志志原遺跡	66	子ノ神道跡
7.	八兵衛源B古墳	22	二ツ浜遺跡	37	尾上馬引土手遺跡	52	元舟西古墳群	67	高津道跡
8.	八兵衛源A古墳	23	尾上北古墳群	38	蟹出遺跡	53	四ツ橋古墳群	68	野治新街遺跡
9.	八兵衛源C遺跡	24	丘台遺跡	39	二本松遺跡	54	元野舟山遺跡	69	田畠遺跡
10.	八兵衛源D遺跡	25	丘合遺跡	40	北沖馬手北遺跡	55	元野舟山土手遺跡	70	伊勢佐吉塚
11.	イタドリA遺跡	26	中見代原丁遺跡	41	北神馬手山遺跡	56	中尾ノ芝跡	71	丹波古墳
12.	イタドリB遺跡	27	中見代原乙遺跡	42	大曲道跡	57	西施浜ノ神吉塚	72	東荒田古墳群
13.	イタドリC遺跡	28	西御遺跡	43	木戸上古塚	58	中尾仲宿官道跡	73	近田明神塚古墳
14.	土頭幕I遺跡	29	瓦原中見代IV遺跡	44	筋ぬき建跡	59	芝切遺跡	74	歌留多遺跡
15.	土頭幕II遺跡	30	中差遺跡	45	筋ぬき南北跡	60	久保塚	75	道鬼塚古墳

第2節 歴史的環境

沼津市内では、変化に富んだ地形に対応して様々な種類の遺跡が確認されている。国指定史跡である休場遺跡をはじめとして、旧石器時代の遺跡が多数発見され全国的に見ても注目される質・量を誇る愛鷹山麓、律令期の集落跡である東畠毛遺跡、前方後円墳である神明塚古墳など、交通の要衝、地形的な優位性を示す遺跡が立地する千本砂丘。低湿地に浮かぶ小さな砂丘上に鷺塚塚遺跡、雄鹿塚遺跡といった弥生時代を主体とした集落が点在していた状況が明らかになり、豊富な木製品が出土している浮島沼。弥生時代以降、比較的安定した低台地状の地形が保たれ、下石田原田遺跡など奈良時代の大集落も認められる芦源川扇状地帯。海岸部に迫る山体を利用して築城された長浜城のように伊豆・駿河攻防の舞台となった遺跡が立地する狩野川以南の海岸部など多岐にわたっている。

旧石器時代

沼津市域では特に愛鷹山麓の愛鷹ローム層中から多くの旧石器時代の遺跡が発見されている。人類の活動痕跡の最も古いものは、37,000年ほど前の第VII黒色帯から出土している石器で、元野遺跡や秋葉林遺跡、的場遺跡、瀬ヶ沢遺跡に認められる。34,500年ほど前の第V黒色帯では、環状ブロックが土手上遺跡と中見代第I遺跡で検出されている。30,000~29,000年前には、間氷期から氷期へと転換し、気候はより寒冷になる。ほぼ時を同じくして降灰したAT火山灰は、愛鷹ローム層中のニセローム中に認められる。休場層中で主な狩猟具は、ナイフ形石器、尖頭器、細石刃と変遷する。ただし、尖頭器についてはまとまった出土に乏しく、石器群の実態がよく分かっていない。細石刃が用いられる時期には温暖化が始まっていたと考えられている。

縄文時代

約10,500年前以降、気候は温暖な状態で安定する。人々の生活は定住傾向が強まり、土器などの使用も行われるようになる。沼津市域における最古の土器は葛原沢第IV遺跡、中見代第I遺跡、尾上イラウネ遺跡、拓南東遺跡で発見された縄文土器で、今のところこの土器は静岡県東部に出土が限定される。縄文時代早期には、条纹文系土器と東海条痕文系土器が併存し、多数の遺跡が残されている。中期は縄文土器や把手といった装飾が過度になされた土器が認められ、勝坂式土器はその最たるものである。ただし、この時期のまとまった資料は多くなく、広合遺跡やニッコ洞遺跡で見つかっているのみである。後・晚期には気候が寒冷化したこともあり、遺跡数は減少する。

弥生時代

東名高速沼津インターチェンジから同愛鷹パークインエリア付近における愛鷹山麓の北から南に延びる舌状丘陵は、弥生時代後期~古墳時代初期の大集落域を形成している。東部連絡免許センター建設に伴い調査された植生遺跡では堅穴住居300軒以上、掘立柱建物50棟以上、方形周溝墓3基の大規模集落が検出されている他、八兵衛洞遺跡、中見代第I遺跡、そして本書で報告する西洞遺跡等において、当該期の集落が確認されている。低地部に浮島沼が展開する地形的制約も影響していると考えられるが、可耕地が限定される丘陵上において大集落が展開していることについては依然として不明な点も多い。

雄鹿塚遺跡、雄鹿塚遺跡は浮島沼に形成された微高地に立地している。弥生後期以降を主体とするものの、一部弥生中期の遺物も確認されている。鷺塚塚遺跡では、最大幅が30m程度の幅が狭い微高地上に堅穴住居が40軒程度確認され、微高地からやや下がった位置に杭列がいくつか確認されている。

浮島沼の隣辺に立地する西洞北遺跡では中期中葉以前に削除された可能性を持つ環濠が検出されている。断面台形を呈し、幅2.5~4m、深さ1m、長さ約120mの規模で確認されている。調査範囲の制約により同時期の集落域の確認はできていないが、県内最古級の環濠として評価することができる。

古墳時代

愛鷹山麓末端部に立地する辻畠古墳は全長約62mの前方後方墳である。主体部は木棺直葬で、銅鏡1～2面、槍1点、鉄鏃10点以上等が出土している。また、周濠からは3世紀前半に比定される土器が出土しており、国内でも最古級の前方後方墳である可能性が指摘されている。

神明塚古墳は、市内最大級の前方後円墳で、全長が54mある。市内でも古く、5世紀後半のものである。

長冢古墳は全長約54mの前方後円墳である。昭和31年の発掘調査から、埋葬施設は盜掘により破壊されていたため不明確であるが、板石片がかなり検出されたため、組み合わせ式箱型石棺が埋納されていたものと推定される。また、後円部墳頂に埴輪列が発見されるとともに、周溝南中央部からは、古墳の構築とほぼ同時期のものと推定される祭祀跡が検出された。供獻された土器の年代頃から古墳造営は6世紀前半と推定されている。

子ノ神古墳は全長約48mの前方後円墳である。第二次大戦中に防空壕が掘られた際、副葬品と石室の一部が発見されたと伝えられる。

古代

日吉庵寺は白鳳期に創建された寺院で山田寺式瓦や川原守式瓦が出土している。

清水柳北1号墳は全国的に見ても珍しい上円下方形の墳形を持つ墳墓である。上円部頭頂に凝灰岩製の石燈籠が納められており、ほぼ同時期と考えられる日吉庵寺跡における白鳳期の寺院跡とともに、中央政権と当地域の有力者との関連を考える上で興味深いといえる。

中世

沼津市周辺は今川氏、後北条氏、武田氏の攻防戦が繰り広げられ、これに連なる城館が残されている。奥国寺城は浮島沼をのぞむ愛鷹山麓末端部を利用した平山城である。北条早雲旗揚げの城として広く知られており、伊勢新九郎（北条早雲）が、駿河館の小鹿衛門を急襲し龍王丸（今川氏親）を今川家当主の座につけた恩讐として富士下方12陣を与えられた際、奥国寺城主になったと伝えられる。平成7年に国史跡に指定されている。史跡整備に伴う発掘調査では武田氏の改修と考えられる三日月堀等が確認されている。

永禄3年（1560）、今川義元の桶狭間での敗北による今川氏の衰退は、諸国の諸大名による今川領への進入を招いた。三枚橋城は、武田氏が駿河進出の足掛かりとした城のひとつで、後北条氏に対抗して狩野川沿いに築かれたものと考えられている。これに対し後北条氏は伊豆の水軍を組織しその脅威に備えた。その伊豆における北条水軍根拠地の一つが長浜城である。天正8年（1580）には武田・北条両氏水軍による駿河湾海戦が行われたことが北条五代記にみられる。長浜城は昭和63年に国の史跡に指定され、平成7年度から保存整備に着手している。

近世

沼津市街地中心部、及びJR原駅周辺は東海道五十三次の宿場町（沼津宿、原宿）として栄えた。沼津宿は本陣3、脇本陣1、旅館屋55を抱える宿場で現在は市街化によりその面影は失われているが、市街地中心部から東に向かうと賀瀬川付近に当時を偲ばせる松並木が認められる。原宿は慶長年間に起きた高潮の被害により、現在の県道富士清水線（旧国道1号線）付近から移動したといわれている。西町の本陣、東町の脇本陣に加え、25軒ほどの旅館屋があったとされる。

第3節 調査の方法と経過

1 現地調査

(1) 記録方法

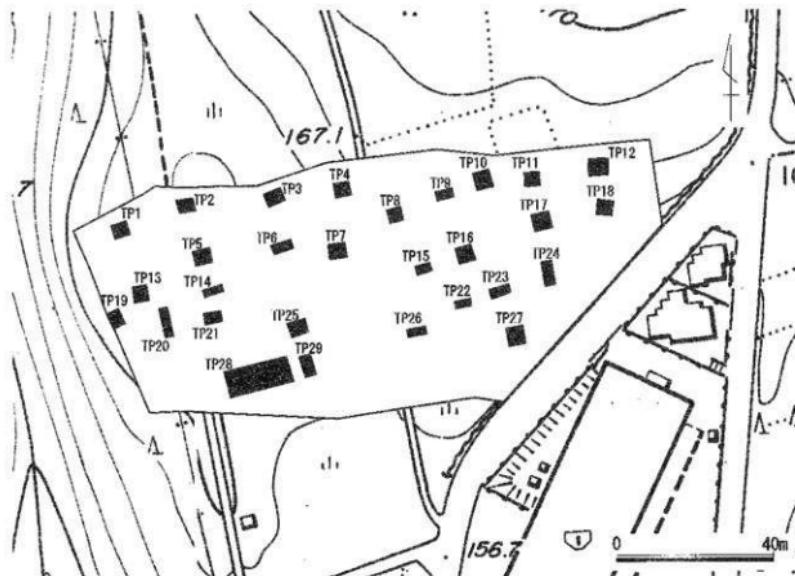
遺跡の全体を把握するため、国家座標（日本測地系 平面直角座標第Ⅲ区）を用い、光波測定器を使用して試掘箇所・遺構・遺物検出箇所を記録した。遺物については、原則として1点ごとに土器=P、石器=S、礫=Rの略号と遺物番号をつけ、出土層位も合わせ、X、Y座標と標高値（Z）を記録して取り上げている。現地の記録図面は、全体図は縮尺1/100、遺構図、土層断面図などは縮尺1/20を基本として保管している。現地記録写真は、作業工程撮影用と併行して35mm判のカラーを用いて行い、必要に応じて35mm判のリバーサルやモノクロ、プローニー6×7判のモノクロを使用した。

(2) 調査の経過

ア 確認調査（第7図）

No.8地点の確認調査対象面積は6,700m²とされた。この対象地の埋蔵文化財の状況を把握するため、平成10年2月16日から平成10年3月20日まで確認調査を実施した。

確認調査は、対象地に3m四方の試掘坑を当初15箇所設定し、表土をバックホウで除去した後、人力により掘削を行い、遺構・遺物の確認を行った。調査の過程で、数箇所のテストピットから表土直下において遺構が検出されたため、テストピットの数を増やし、最終的に29箇所のテストピットにより埋蔵文化財の状況を確認した。また、第IIIスコリア帯についてはバックホウによる中間層除去を行い、第IV黒色帯から再び人力掘削により調査を行った。



第7図 確認調査試掘坑配図

掘削終了後、土層堆積を記録・写真撮影を行った。また、遺物はトータルステーションとコンピューターを使用して出土位置を記録、遺構及び土層断面の記録は人力で行った。

調査の結果、中世、弥生時代末～古墳時代前期、縄文時代の大きく3つの時期の遺構ないし遺物が確認された。すなわち、中世と考えられる溝や土坑、弥生時代末～古墳時代前期の堅穴住居、土坑、溝が新期スコリア層及び栗色土層から検出された。また、縄文時代の土坑、土器・石器が栗色土層及び富士黒土層から検出されている。ただし、試掘坑の各所で遺構・遺物が確認されたため、縄文時代の一部及び旧石器時代の遺構・遺物については、本調査が完了後改めて把握する必要が考えられた。

イ 本 調 査

確認調査結果を踏まえ、本調査対象範囲を決定した（第8図）。本調査は、平成10年4月から開始し、一時中断をはさんで平成19年8月まで実施した。なお、平成10年4月～平成11年1月に実施した調査を本調査Ⅰ期、平成10年12月～平成11年2月に実施した調査を本調査Ⅱ期、平成11年1～3月に実施した調査を本調査Ⅲ期、平成19年4～8月に実施した調査を本調査Ⅳ期とした。調査対象面積は、本調査Ⅰ期が6,202m²、本調査Ⅱ期が745m²、本調査Ⅲ期が3,500m²、本調査Ⅳ期が197.8m²である。

(イ) 本調査Ⅰ期

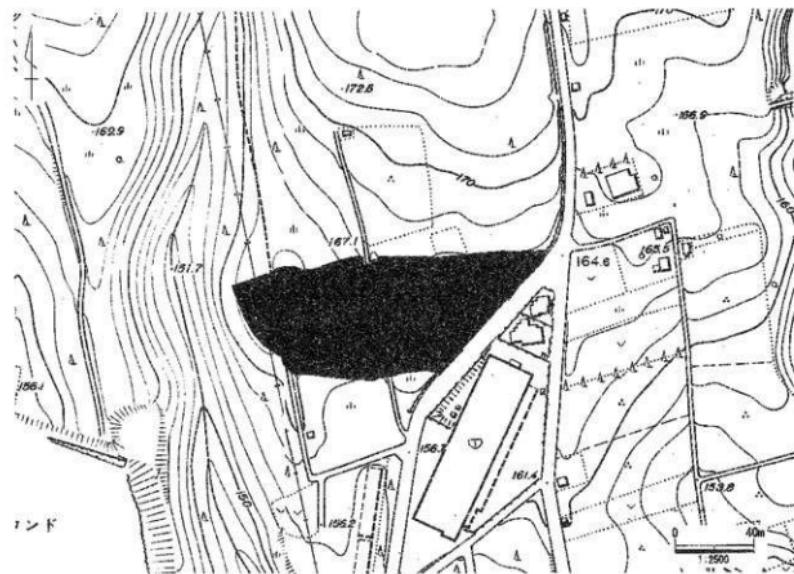
調査は、平成10年4月～平成11年1月まで実施した。調査対象地の中央の農道部分（東道路区）を境に東区、西区に区分して調査した。本調査対象面積は6,202m²である。新期スコリア層上面で中世の溝、土坑が、栗色土層上面で弥生時代末～古墳時代前期初頭の堅穴住居、掘立柱建物、方形周溝墓、溝、土坑、柱穴、及び縄文時代の集石遺構などが検出された。遺物は弥生時代末～古墳時代前期初頭の土器、縄文土器、石器、礫等が出土している。

作業は以下のとおり進められた。

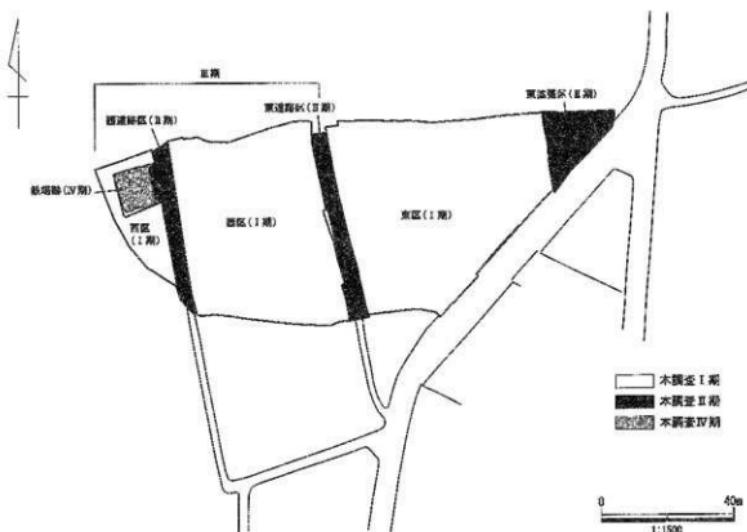
- 4月 調査準備
- 5月 調査準備及び表土除去及び拔根作業
- 6月 表土除去及び拔根作業、新期スコリア層上面濃縮掘削、実測作業、同層掘削
- 7月 新期スコリア層上面全体写真撮影、新期スコリア層掘削及び栗色土層上面精査、遺構掘削実測作業
- 8月 栗色土層上面精査、遺構掘削、実測作業、全体写真撮影、同層掘削
- 9月 栗色土層掘削、実測作業
- 富士黒土層上面精査
- 10月 栗色土層掘削、実測作業
- 富士黒土層上面精査、実測作業
- 11月 富士黒土層上面精査、実測作業、同層掘削
休場層上面精査、実測作業、
土坑228(SP228) 休場層～中部ローム層テストピット掘削
- 12月 休場層～中部ローム層テストピット掘削、実測作業
- 1月 休場層～中部ローム層テストピット掘削、実測作業（調査終了）

(カ) 本調査Ⅱ期

調査は、平成10年12月～平成11年2月まで実施した。調査対象地内を南北に走る2本の農道部分（東道路区、西道路区）及び東端の残地（東拡張区）の調査で、本調査対象面積は745m²である。新期スコリア層上面で中世の溝、土坑が、栗色土層上面で弥生時代末～古墳時代前期初頭の堅穴住居、方形周溝墓、溝、土坑及び縄文時代中期の埋葬、集石遺構などが検出された。遺物は弥生時代末～古墳時代前期の土



第8図 本調査対象範囲



第9図 本調査区分図

器、縄文中期の土器、石器、礫等が出土している。作業は以下のとおり進められた。

12月 調査準備

東拡張区 重機表土除去

新期スコリア層上面精査、遠構掘削、実測作業、同層掘削

栗色土層上面精査、遠構掘削、実測作業、同層掘削

富士黒土層上面精査、遠構掘削、実測作業、同層掘削

休場層以下テスビット、トレンチ掘削、実測作業（調査終了）

西道路区 人力表土除去

新期スコリア層上面精査、遠構掘削、実測作業、同層掘削

栗色土層上面精査、遠構掘削、実測作業、同層掘削

富士黒土層上面精査、遠構掘削、実測作業

1月 東道路区 重機表土除去

新期スコリア層上面精査、遠構掘削、実測作業、同層掘削

栗色土層上面精査、遠構掘削、実測作業、同層掘削

富士黒土層上面精査、遠構掘削

西道路区 富士黒土層上面精査、遠構掘削、実測作業、同層掘削

休場層表面精査、実測作業

ラジコンヘリによる空中写真撮影

2月 東道路区 富士黒土層上面精査、遠構掘削、実測作業、同層掘削

休場層上面精査、実測作業

西道路区 休場層表面精査、実測作業

ラジコンヘリによる空中写真撮影（全調査終了）

(a) 本調査Ⅲ期

調査は、平成11年1～3月まで実施した。本調査Ⅰ・Ⅱ期におけるテスビット調査により遺物包含層が確認された西区及び東西道路区における休場層以下の調査で、本調査対象面積は745m²である。

休場層を全面掘削・精査をした上で、休場層直下黒色帶以下についてテスビットにより調査を進めた。休場層下位で砾群及び石器ブロックとともに石器、礫が、第Ⅱ黒色帶で石器剥片と砾が、第Ⅴ黒色帶で石器剥片と砾が確認された。作業は以下のとおり進められた。

1月 調査準備

休場層掘削、

休場層直下黒色帶上面精査、実測作業

2月 休場層掘削、

休場層直下黒色帶上面精査、実測作業

休場層直下黒色帶～第Ⅳ黒色帶テスビット掘削

3月 休場層直下黒色帶～第Ⅳ黒色帶テスビット掘削

重機による中間層除去

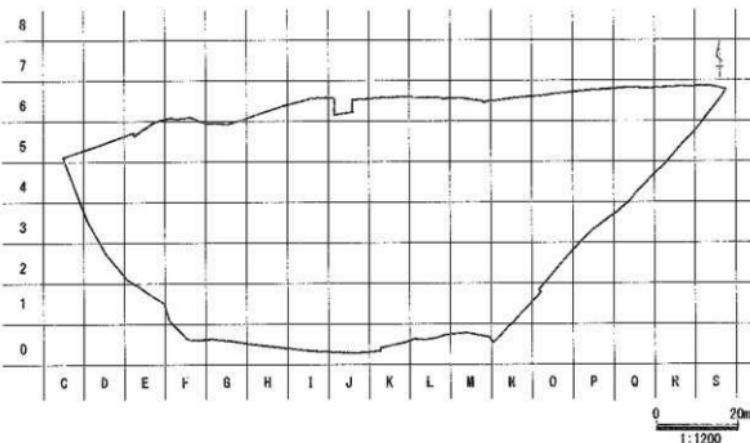
第Ⅴ黒色帶掘削、実測作業

全体写真撮影、現地撤収

(x) 本調査IV期

調査は、平成19年4～8月まで実施した。調査対象地内に残されていた鉄塔部分の調査で、本調査対象面積は197.8m²である。栗色土層から縄文時代の遺物が、第V黒色帯からは1,800点以上の石器が出土した。作業は以下のとおり実施した。

- 4月 調査準備、人力による表土除去作業
- 5月 新規スコリア層、栗色土層、富士黒土層掘削、遺構掘削、実測作業、休場層上面精査
- 6月 休場層掘削、休場層直下黒色帯上面精査、実測作業、鉄塔基礎掘方の掘削、鉄塔基礎除去
テストピット掘削、重機による中間層除去、第Ⅱスコリア層（SCⅢs5）～第IV黒色帯掘削、排水処理
- 7月 第IV黒色帯下スコリア層～第V黒色帯掘削
- 8月 第V黒色帯下スコリア層掘削、テストピット掘削、撤収作業、現地引き渡し、完了事務



第10図 グリッド配置図

ウ 資料整理

資料整理は、平成22年2月1日から平成23年3月25日まで実施した。土器、石器、礫は、洗浄の後、遺物番号の記入作業を行った。次に遺物の分類や層位ごとの分類を行い、縦合作業を行った。土器は、時代を特定できる特徴的なもの、残存状況が良好なものを中心に、また、石器は、調整・加工が施されているものを中心に実測図を作成した。報告書作成に先立ち、調査区全体図や試掘坑配置図、遺構図等の図版作成、出土状況の記録と台帳に基づく遺構・遺物一覧表の作成、拓本・実測図の図版作成、遺物写真撮影と遺構写真を含む写真図版の作成を行い、現地調査における所見、資料整理の成果を踏まえて報告書本文を執筆した。

第4節 基本層序

西側遺跡は、愛鷹山南麓の標高160m付近の北から南にのびる幅約250m、斜度約6度の緩やかな舌状尾根上に立地している。西側は急斜面を持つ谷にあたり、谷底には西久保川が流れている。遺跡が立地する尾根は調査区西区中央部と東区中央部の2ヶ所でさらに南北に開析を受け、調査区の西側は痩せ尾根、中央・東側はやや幅広い尾根を形成している（便宜的に調査区西側より西谷部、西尾根部、中央谷部、中央尾根部、東谷部、東尾根部と呼称することにする）。

本遺跡の基本層序のうち、本書に係る弥生時代以降の土層は以下の通りである。

基本層序（第11図）

第1層 塗土

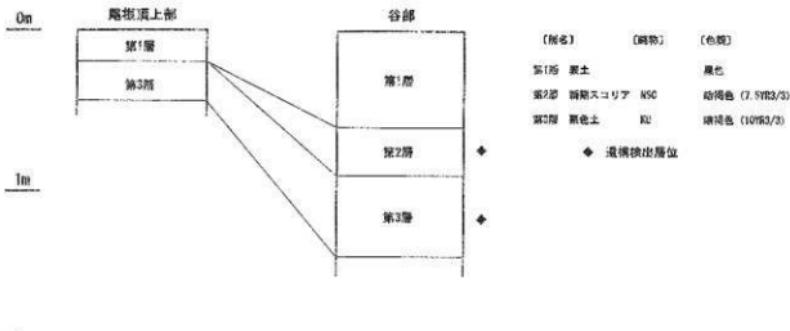
黒色の腐植土

第2層 新期スコリア層（NSC）

上面で古墳時代I期遺構面を検出し、古墳時代初頭の遺物を包含する層である。東尾根から東谷部の堀部にかけてと中央谷部で特に厚く堆積するが、他の区域では削平されている。硬質で、φ2~3mmの橙色スコリアを含む。白色のカワゴ平パミス粒を多く含む。暗褐色（7.5YR3/3）を呈する。

第3層 栗色土層（KU）

上面で古墳時代II期遺構面を検出し、縄文時代中期を中心とする遺物を包含する層である。調査区全域に堆積するが、中央尾根の頂上部では削平されている。下層の休場層に比して粒径は粗く、粘性も少ない。φ2~3mmの橙色スコリア粒をごく少量含む。白色のカワゴ平パミス粒を少量含む。暗褐色（10YR3/3）を呈する。



第11図 基本層序（弥生時代以降）

第IV章 弥生時代以降の遺構と遺物

第1節 第2層（新期スコリア層）上面検出の遺構・遺物

1 遺構と遺物の概要

第2層（新期スコリア層）上面では、溝状遺構46基、土坑・小穴が50基検出された（第12図）。遺構に伴出する遺物が皆無であるため遺構の時期決定は困難であるが、下層の栗色土層（第3層）上面で確認した弥生時代～古墳時代前期の遺構群との関係から、それよりも新しい時期と推定される（現地調査担当者の調査記録では中世と判断されている）。一部の遺構からは土器片が出土している。弥生時代後期後半から古墳時代初頭に比定されるが、小片であり、下層（第3層）の遺物が混入したものと考えられる。

溝状遺構は、後世の削平により残存状況は必ずしも良好でないが、尾根・谷部の両方で検出され、尾根部では尾根筋と平行または直行する直線的なもの、谷部では等高線に沿って弧状を呈するものが主体となる。遺構の横断面形は逆台形からU字状並びに浅いU字状を呈し、残存幅0.5m前後のものと1.0m前後の二者が認められる。覆土は黒褐色土を主体としている。土坑は、直径1.0m前後の円形の土坑を主体としており、愛鷹山麓で本層から多く検出されるいわゆる円形土坑と同様のものと判断される。

なお、溝、土坑・小穴の表記は、東区と西区で同じ名称を用いているものがあるため、東区のものは東SD01、西区のものは西SD01といったように遺構名の先頭に東・西を追加して表記する。

2 溝（第13～21図）

東SD01（第13図）

N-2グリッドで検出された最大幅0.90m、深さ0.15mの断面形が浅いU字形を呈する溝である。全長は12.4m確認できるが、本来は東SD01の西側で検出された東SD02と一緒にしたものであったと推測される。中央尾根から東側谷部に向かって谷側にわずかに湾曲する。東SD14を切り、東SD05に切られる。土器片が2点出土している。

東SD02（第13図）

M-2グリッドで検出された最大幅0.40m、深さ0.10mの断面形が浅いU字形を呈する溝である。全長は3.0mを確認できるが、前述のとおり、東SD01と一緒にすることから、本来は東SD01と一緒にしたものであったと推測される。出土遺物はない。

東SD03（第13図）

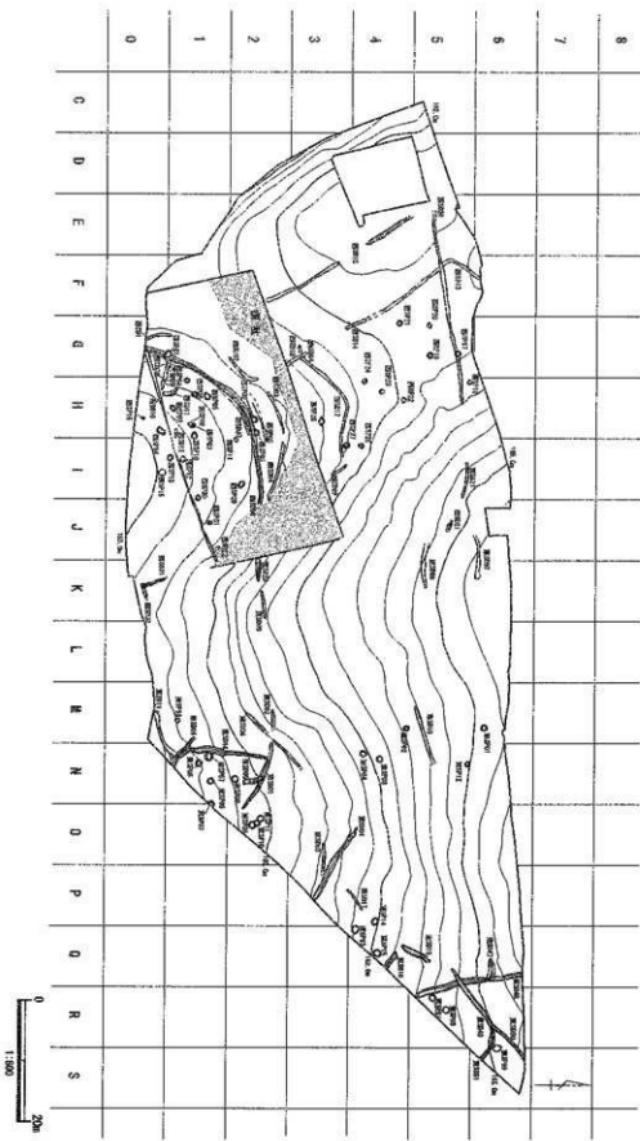
O-3～P-3グリッドで検出された最大幅0.40m、深さ0.10mの断面形が浅いU字形を呈する溝である。東谷部の谷頭付近に等高線に沿って掘削されており、全長は4.6mを確認できるが、東端は東SD04に切られるため全形は不明である。出土遺物はない。

東SD04（第14図）

O-3～P-3グリッドで検出された最大幅0.90m、深さ0.25mの断面形が浅いU字形（部分的に逆台形）を呈する溝である。東谷部の谷頭付近から等高線に対し斜行して掘削されている。全長は14.0mを確認できるが、東端は調査区外に延びるために全形は不明である。東SD03を切る。土器片が2点出土している。

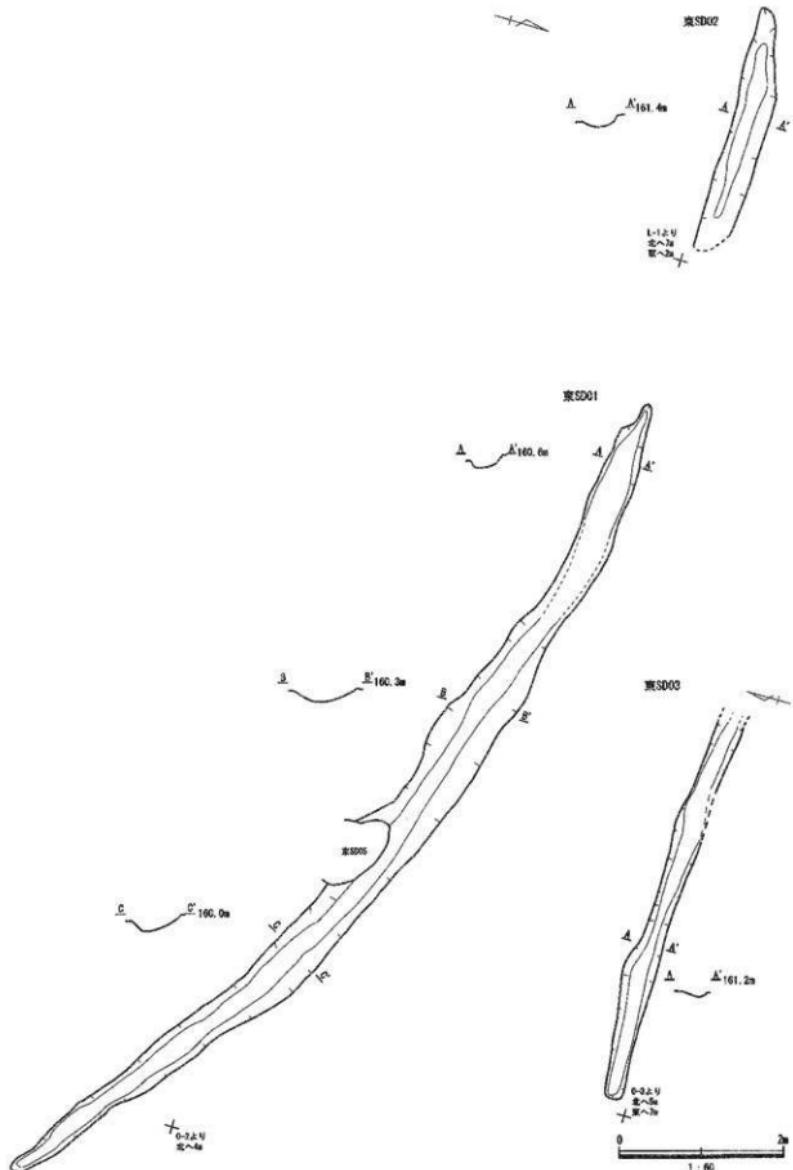
東SD05（第14図）

N-2グリッドで検出された最大幅0.80m、深さ0.40mの断面V字形を呈する溝である。東谷部付近で等高線に直交して掘削されており、全長は3.3mを確認できる。溝底部は谷側がやや浅くなっている。東SD01を切る。土器片が1点出土している。



第12圖 第2層上面連續全體圖

第11圖 第2層(範圍大約97米)上面突出的連續·連續



第13図 東SD01～東SD03

東SD06（第14図）

M-2、N-2、N-3グリッドで検出された最大幅0.40m、深さ0.15mの断面形が浅いU字形を呈する溝である。中央尾根から東側谷部付近において等高線に沿って直線的に掘削され、全長は10.9mを確認できるが、溝中央やや南寄りが削平により一部失われている。出土遺物はない。

東SD07（第14図）

J-6～K-6グリッドで検出された最大幅0.80m、深さ0.25mの断面形がU字形を呈する溝である。中央尾根部で等高線とほぼ平行して掘削され、全長は6.8mを確認できる。なお、西端は東道路区として分割調査されており、その際には溝の延長を確認することができなかった。土器片が2点出土している。

東SD08（第14図）

J-5～K-5グリッドで検出された最大幅0.70m、深さ0.25mの断面形が逆台形を呈する溝である。中央尾根部で等高線とほぼ平行して掘削され、全長は6.1mを確認できる。なお、西端は東道路区として分割調査されており、その際には溝の延長を確認することができなかった。土器片が2点出土している。

東SD09（第14図）

K-2グリッドで検出された最大幅0.40m、深さ0.10mの断面形が浅いU字形を呈する溝である。中央尾根部で等高線とほぼ平行して掘削され、全長は4.6mを確認できる。出土遺物はない。

東SD10（第15図）

M-5～N-5グリッドで検出された最大幅0.50m、深さ0.10mの断面形が浅いU字形を呈する溝である。中央尾根部で等高線とほぼ平行して直線的に掘削され、全長は3.2mを確認できる。土器片が3点出土している。

東SD11（第15図）

M-0、N-0、N-1グリッドで検出された最大幅0.90m、深さ0.15mの断面形が浅いU字形を呈する溝である。東谷部で等高線とほぼ平行して弧状に掘削され、全長は8.0mを確認できるが、東端は東SD16に切られるため全形は不明である。出土遺物はない。

東SD14（第15図）

N-1～N-2グリッドで検出された最大幅1.00m、深さ0.30mの断面形が浅いU字形（一部逆台形）を呈する溝である。東谷部で等高線と直交して谷側に開いた弧状に掘削され、全長は16.6mを確認できるが、南端は調査区外に延びるため全形は不明である。南側は東SD16に切られる。土器片が2点出土している。

東SD16（第16図）

N-1グリッドで検出された最大幅0.60m、深さ0.50mの断面形がU字形を呈する溝である。東谷部で等高線と直交して掘削され、全長は5.4mを確認できるが、南端は調査区外に延びるため全形は不明である。東SD14を切る。土器片が4点出土している。

東SD17（第16図）

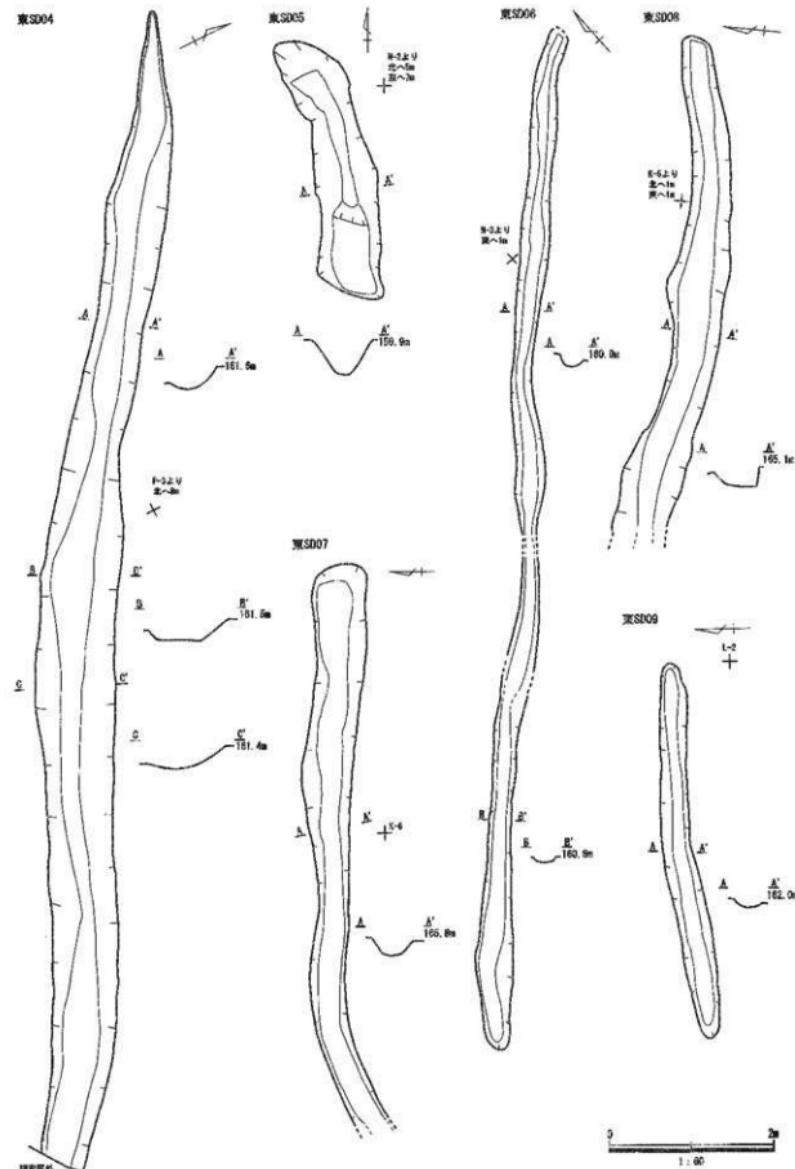
P-4グリッドで検出された最大幅0.40m、深さ0.05mの断面形が浅いU字形を呈する溝である。東谷部で等高線と斜交して掘削され、全長は4.0mを確認できる。出土遺物はない。

東SD18（第16図）

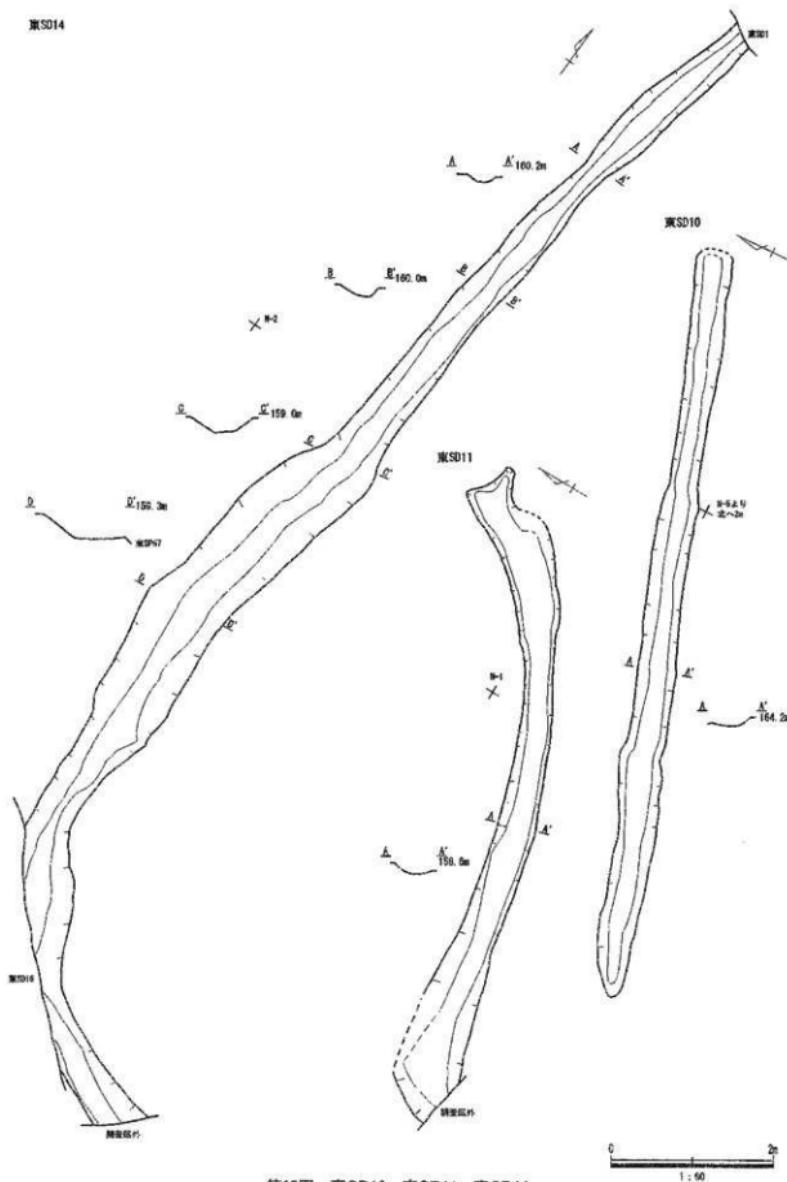
Q-4グリッドで検出された最大幅0.90m、深さ0.30mの断面形が浅いU字形を呈する溝である。東尾根部で等高線と平行して掘削され、全長は2.8mを確認できるが、東端は調査区外に延びるため全形は不明である。出土遺物はない。

東SD19（第16図）

Q-4～Q-5グリッドで検出された最大幅0.80m、深さ0.10mの断面形が浅いU字形を呈する溝で



第14図 東SD04～東SD09



第15図 東SD10・東SD11・東SD14

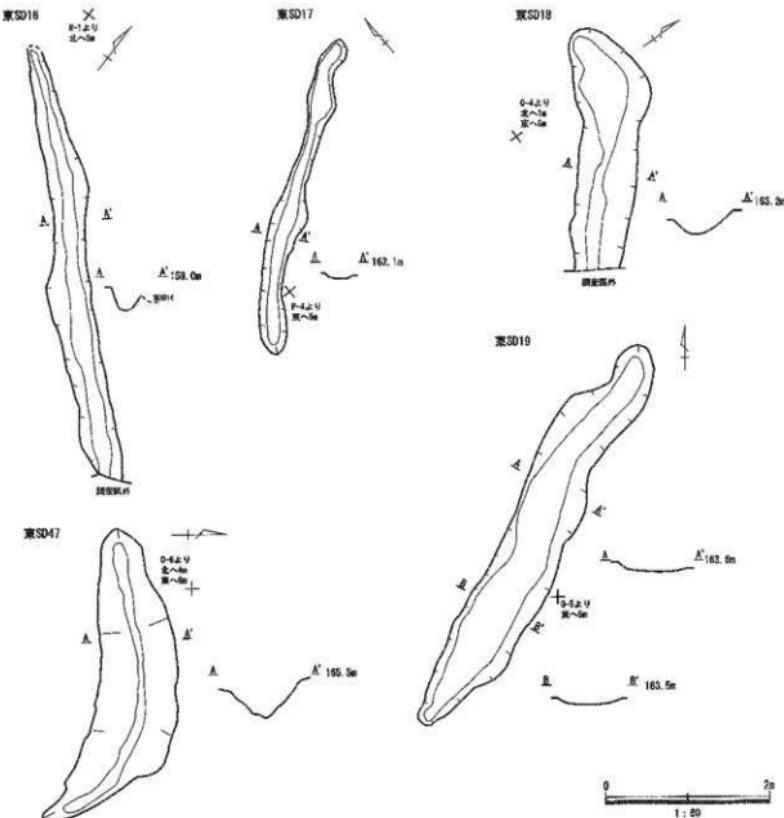
ある。東尾根部で等高線と直交して掘削され、全長は5.4mを確認できる。出土遺物はない。

東SD47（第16図）

Q-6グリッドで検出された最大幅1.00m、深さ0.40mの断面形がV字形を呈する溝である。東尾根部で等高線とほぼ平行して掘削され、谷側に向かって弧状を呈した平面形となる。東SD48を切る。出土遺物はない。

東SD48（第17図）

O-5～O-6グリッドで検出された最大幅1.00m、深さ0.30mの断面形が逆台形を呈する溝である。東尾根部で等高線とほぼ直交して直線的に掘削され、17.5mを確認できるが、北端は調査区外に延びるため全形は不明である。東SD47と東SD49に切られる。土器片が13点出土している。



第16図 東SD16～東SD19・東SD47

東SD49（第17図）

Q-5、R-5、R-6グリッドで検出された最大幅0.50m、深さ0.20mの断面形が浅いU字形を呈する溝である。東尾根部で等高線に対し斜行して直線的に掘削される。東SD50、東SD51とは本来一連の遺構あるいは、切り合い関係を持つと考えられるが、互いの関連は不明である。覆土から土器が出土している。

出土遺物（第17図）

1は台付壺の口縁部破片である。頸部から緩やかに外反するもので、口唇部には明確な面を持つが、キザミは認められない。外面は磨滅のため調整方法は不明だが、内面にヨコハケが確認できる。弥生後期後半～古墳前期前半に比定されよう。このほか同時期と考えられる土器片が27点出土している。

東SD50（第17図）

R-6～S-6グリッドで検出された最大幅0.50m、深さ0.20mの断面形がU字形を呈する溝である。東尾根部で等高線に対し斜行して直線的に掘削され、北端は調査区外に延びるため全形は不明である。東SD49、東SD51とは本来一連の遺構あるいは、切り合い関係を持つと考えられるが、互いの関連は不明である。土器片が1点出土している。

東SD51（第17図）

R-6～S-6グリッドで検出された最大幅0.40m、深さ0.20mの断面形がU字形を呈する溝である。東尾根部で等高線に対し斜行して谷側に開いた弧状に掘削される。南端は調査区外に延びるため全形は不明である。東SD49、東SD50とは本来一連の遺構、あるいは切り合い関係を持つと考えられるが、互いの関連は不明である。出土遺物はない。

西SD01（第18図）

G-0グリッドで検出された最大幅0.5m、深さ0.15mの断面形が箱形を呈する溝である。中央谷部で等高線とほぼ平行して掘削される。全長は4.3mを確認できるが、南端は調査区外に延びるため全形は不明である。出土遺物はない。

西SD02（第18図）

G-2～H-2グリッドで検出された最大幅0.6m、深さ0.15mの断面形がU字形（一部逆台形）を呈する溝である。中央谷部で等高線とほぼ平行して掘削され、全長は6.4mを確認できる。出土遺物はない。

西SD03（第18図）

H-2グリッドで検出された最大幅0.5m、深さ0.10mの断面形が浅いU字形を呈する溝である。中央谷部で等高線とほぼ平行して掘削され、全長は7.3mを確認できる。出土遺物はない。

西SD04（第18図）

I-2グリッドで検出された最大幅0.5m、深さ0.15mの断面形が浅いU字形を呈する溝である。中央谷部で等高線とほぼ平行して掘削され、全長は9.7m確認できる。出土遺物はない。

西SD05（第18図）

I-2グリッドで検出された最大幅0.50m、深さ0.15mの断面形が逆台形を呈する溝である。中央谷部で等高線とほぼ平行して掘削される。溝の北西部分は削平により一部失われている。出土遺物はない。

西SD06（第18図）

G-0、G-1、H-1、H-2、I-2グリッドで検出された最大幅1.00m、深さ0.40mの断面形が浅いU字形を呈する溝である。中央谷部で等高線と平行して弧状に掘削され、南西端は調査区外に延びるため全形は不明である。西SP01に切られ、西SP02、西SP03、西SD08を切る。土器片が2点出土している。

西SD07（第19図）

H-2グリッドで検出された最大幅0.5m、深さ0.10mの断面形が逆台形を呈する溝である。中央谷部で等高線と平行して弧状に掘削される。西SD06と近接して並行する。出土遺物はない。

西SD08（第19図）

G-0～G-1グリッドで検出された最大幅0.6m、深さ0.05mの断面形が浅いU字形を呈する溝である。中央谷部で等高線とほぼ直交して掘削される。西SD06、西SD09に切られる。出土遺物はない。

西SD09（第19図）

H-1グリッドで検出された最大幅0.6m、深さ0.05mの断面形が浅いU字形を呈する溝である。中央谷部で等高線とほぼ直交して掘削され、全長3.1mを確認できる。西SD08を切る。出土遺物はない。

西SD10（第19図）

H-0～H-1グリッドで検出された最大幅0.6m、深さ0.10mの断面形がU字形～逆台形を呈する溝である。中央谷部で等高線とほぼ斜交して掘削され、全長2.6mを確認できる。西SD11を切る。出土遺物はない。

西SD11（第19図）

H-1グリッドで検出された最大幅0.40m、深さ0.10mの断面形が浅いU字形～逆台形を呈する溝である。中央谷部で等高線に斜交して掘削される。西SD10に切られる。出土遺物はない。

西SD12（第19図）

H-1グリッドで検出された最大幅0.40m、深さ0.10mの断面形が逆台形を呈する溝である。中央谷部で等高線にやや斜交して掘削され、全長1.5mが確認できる。出土遺物はない。

西SD13（第19図）

F-4～F-5グリッドから検出された最大幅0.60m、深さ0.10mの断面形が浅いU字形を呈する溝である。西尾根部において尾根筋に平行し、北側で東折する平面L字形に掘削される。北端は調査区外に延びるため全形は不明である。西SD20に切られる。出土遺物はない。

西SD14（第19図）

G-3～G-4グリッドで検出された最大幅0.50m、深さ0.10mの断面形が浅い逆台形を呈する溝である。西尾根部で尾根筋に平行して掘削される。前述の西SD13の南側に位置し、本来はこれと一連の溝であった可能性が高い。出土遺物はない。

西SD15（第20図）

E-4、F-2、F-3グリッドで検出された最大幅0.7m、深さ0.20mの断面形が浅いU字形～逆台形を呈する溝である。西尾根部で尾根筋に沿って掘削される。中間が削平により失われていると考えられるが、西区で調査された東半の溝と西半分は西道路区として分割調査されている溝は一連のものであつたと判断した。なお、西端は削平により失われており全長は不明である。土器片が1点出土している。

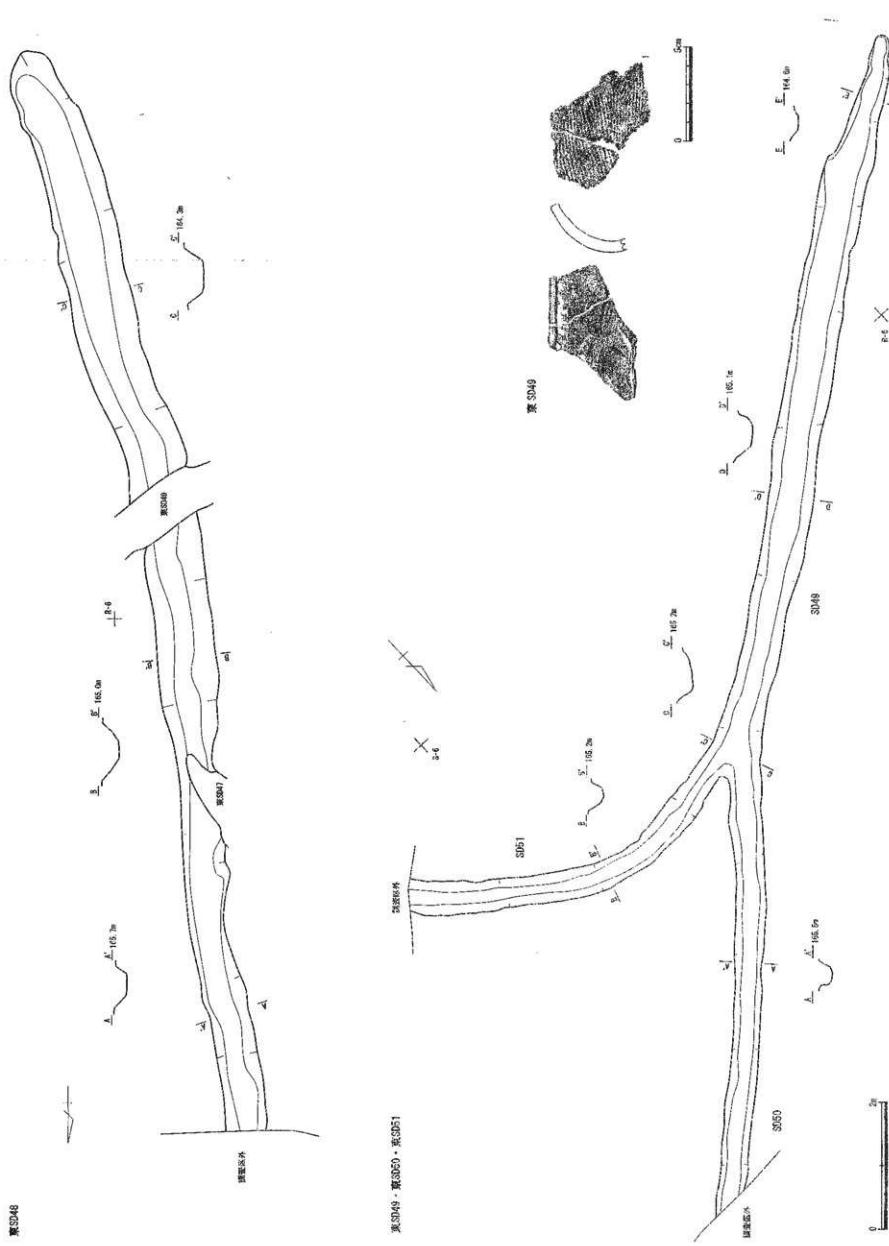
西SD16（第20図）

G-3グリッドで検出された最大幅0.5m、深さ0.15mの断面形が浅いU字形を呈する溝である。中央谷部で等高線とほぼ直交して掘削される。南端は攪乱により失われている。西SD17に切られる。土器片が1点出土している。

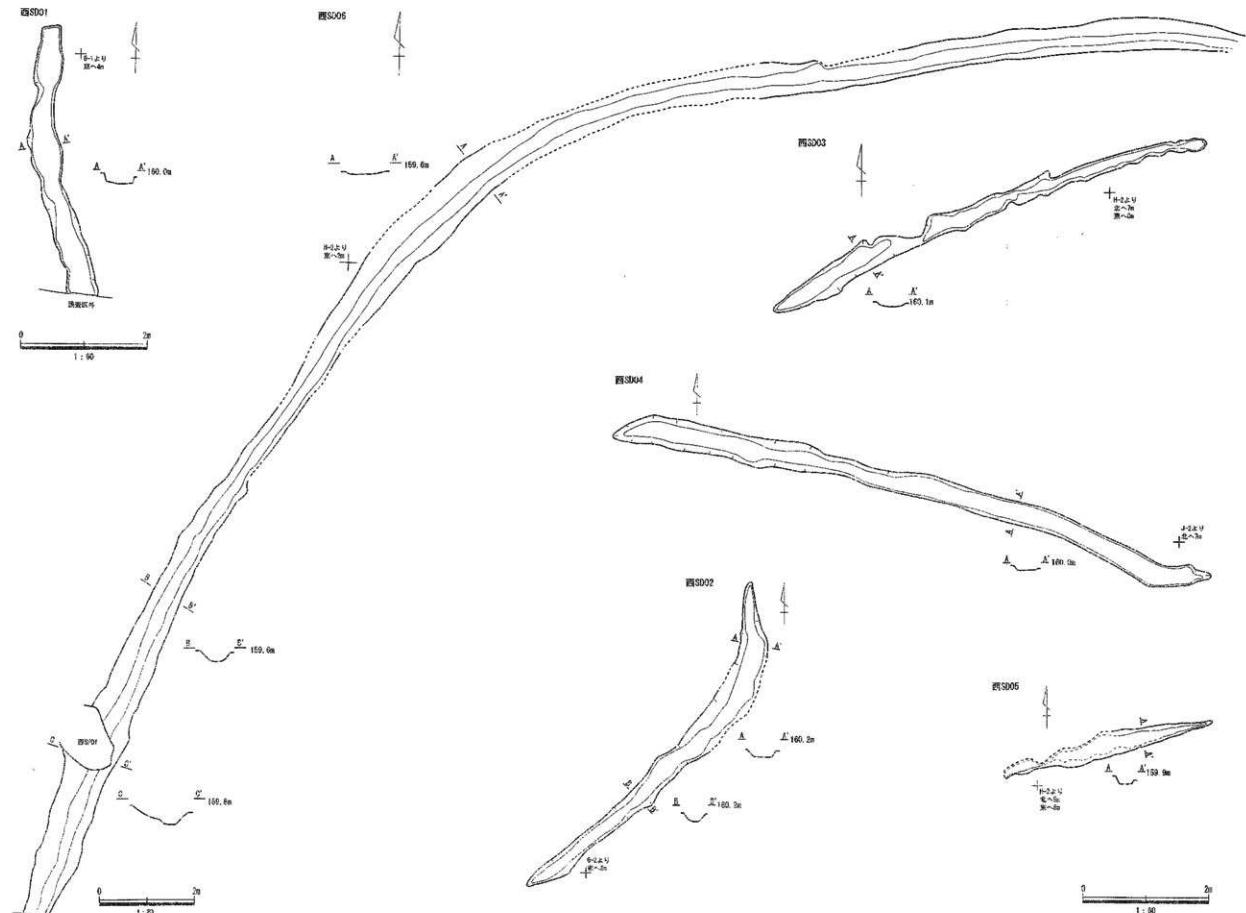
西SD17（第20図）

G-3、H-3、I-3グリッドで検出された最大幅0.5m、深さ0.25mの断面形が浅いU字形を呈する溝である。中央谷部で等高線とほぼ平行して弧状に掘削され、南側で西SD16を切る。土器片が2点出土している。

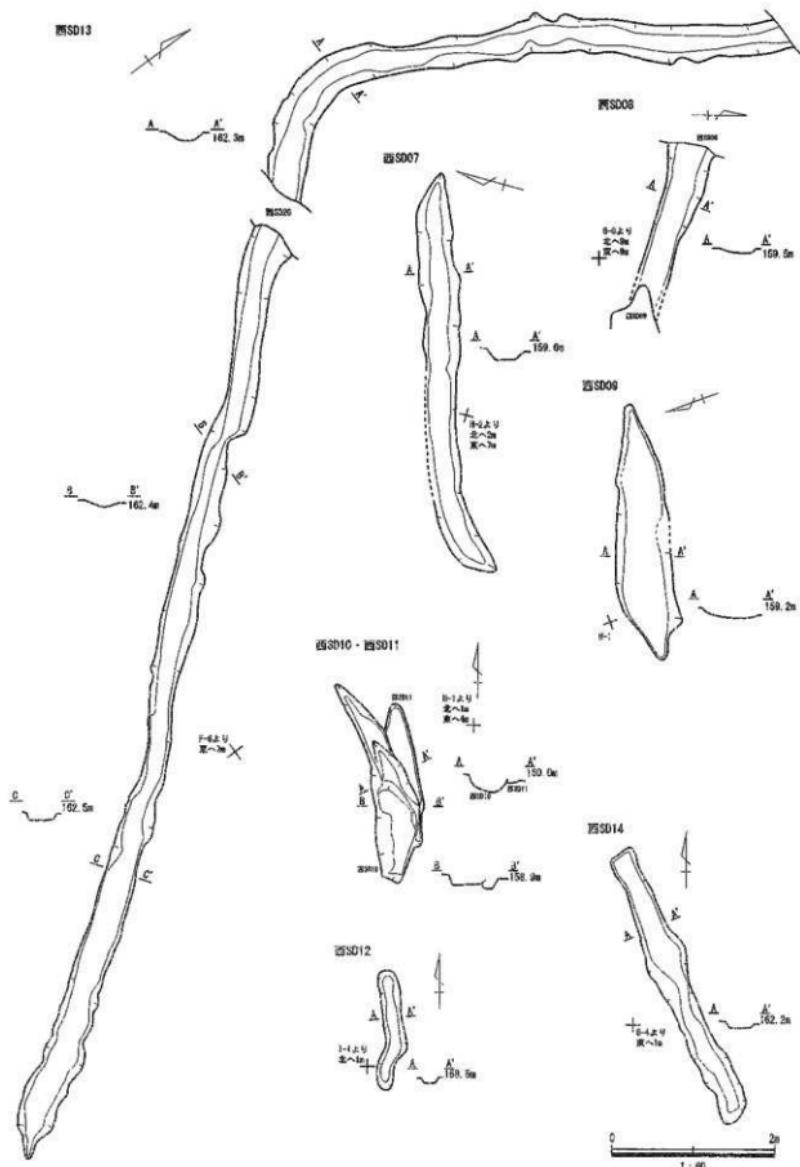
第16図 第2層(新開コリニア層)上面突出の連続・遺物



第17図 東SD48~東SD51



第18図 西SD01～西SD06



第19図 西SD07～西SD14

西SD18（第20図）

G-3グリッドで検出された最大幅0.5m、深さ0.05mの断面形が浅い皿状を呈する溝である。中央谷部で等高線とはほぼ平行して掘削され、全長1.6mを確認できる。出土遺物はない。

西SD19（第20図）

I-3グリッドで検出された最大幅0.3m、深さ0.10mの断面形が浅いU字形を呈する溝である。中央尾根部で等高線とほぼ斜行して掘削され、全長3.0mを確認できる。出土遺物はない。

西SD20（第21図）

E-5、F-5、G-5、H-5グリッドで検出された最大幅0.7m、深さ0.20mの断面形が浅いU字形を呈する溝である。西尾根部で尾根筋にはば直交して掘削される。残存長は26.5mを確認できるが、西端は搅乱を受けて失われているため、全長は不明である。土器片が2点出土している。

西SD21（第21図）

I-5、J-5グリッドで検出された最大幅0.4m、深さ0.10mの断面形が逆台形を呈する溝である。中央尾根部で等高線にやや斜交して掘削される。西端は削平により失われているが、西SD20の延長であった可能性もある。出土遺物はない。

西SD22（第21図）

J-1グリッドで検出された最大幅0.4m、深さ0.10mの断面形が浅いU字形を呈する溝である。中央谷部で等高線とはほぼ平行して掘削され、全長1.3mを確認できるが、南端は削平のため全長は不明である。出土遺物はない。

西SD29（第21図）

K-2グリッドで検出された最大幅0.7m、深さ0.20mの断面形が浅いU字形を呈する溝である。中央尾根部で等高線に斜交して掘削され、全長3.8mを確認できるが、西端は搅乱により全形は不明である。土器片が1点出土している。弥生後期後半～古墳前期前半に比定されよう。

出土遺物（第21図）

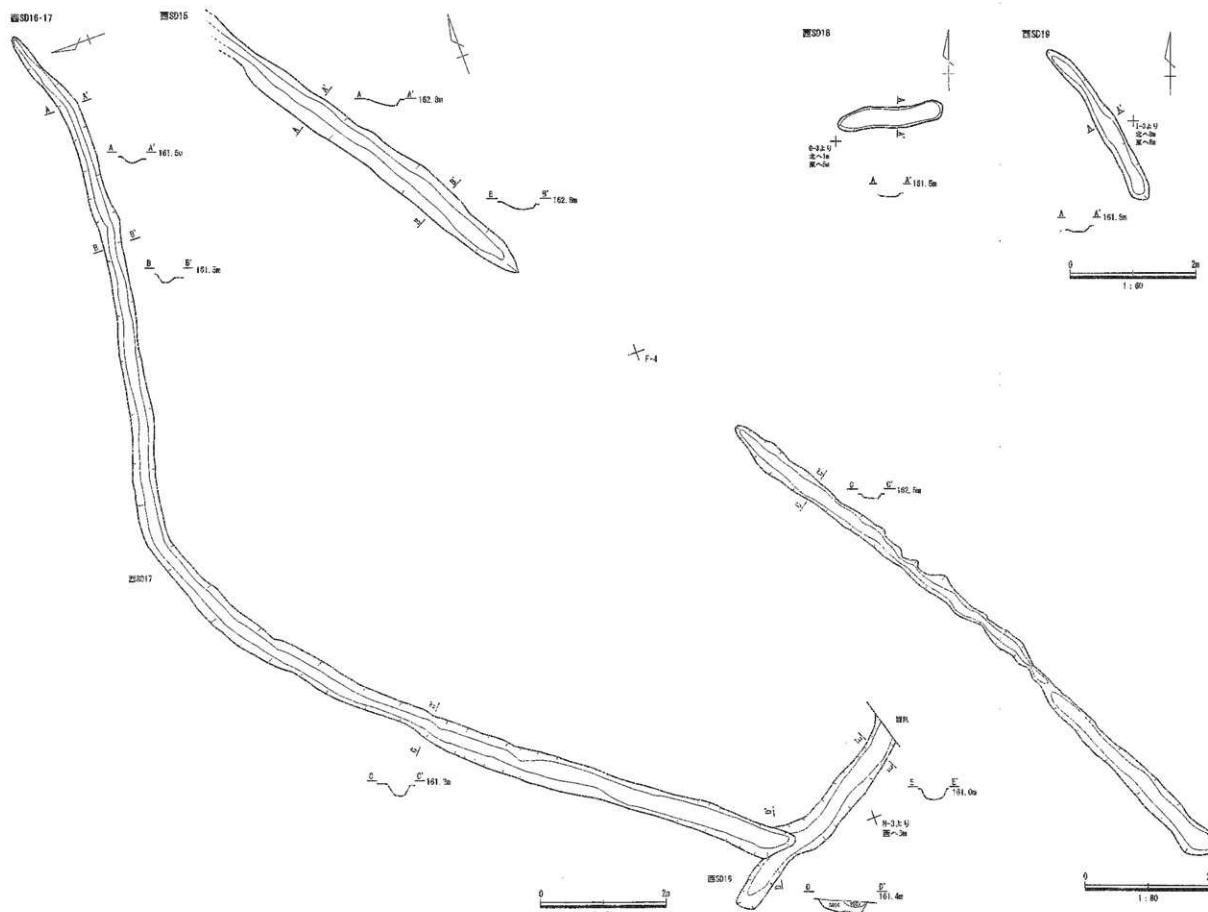
2は折り返し口縁壺の口縁部破片である。やや幅広厚めの折り返し部を持つ。内外面ともに磨耗が著しく調整・施文の状況は不明である。

西SD30（第21図）

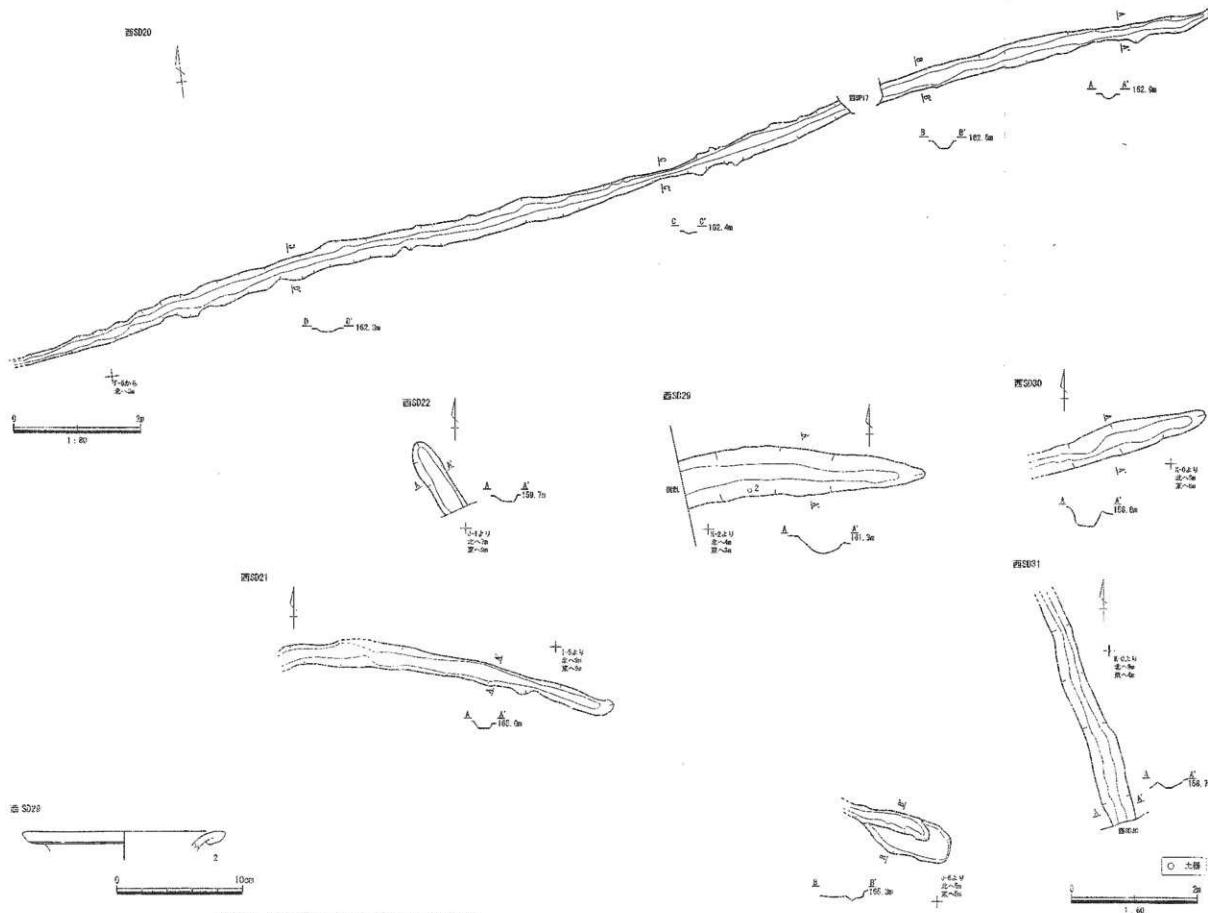
K-0グリッドで検出された最大幅0.5m、深さ0.25mの断面形が逆台形を呈する溝である。中央谷部で等高線に斜交して掘削され、全長2.5mを確認できるが、西端が削平されたため全形は不明である。西SD31を切る。出土遺物はない。

西SD31（第21図）

K-0グリッドで検出された最大幅0.4m、深さ0.10mの断面形が浅いU字形を呈する溝である。中央谷部で等高線に斜交して掘削され、全長3.4mを確認できるが、北端は削平により失われ、南端は西SD30に切られるため全形は不明である。出土遺物はない。



第20図 西SD15～西SD19



第21図 西SD20～西SD22・西SD29～西SD31

第3表 第2層 溝（SD）計測表

() は残存値

No.	深縫名	地区	グリッド	全长 (m)	最大幅 (m)	最大深 (m)	平面形態	切り合ひ關係	発見 時期	備考
1	東SD01	東	N-2	12.4	0.9	0.15	弧状	東SD14を切る 東SD05に切られる	中世	
2	東SD02	東	M-2	(9)	0.4	0.10	弧状		中世	
3	東SD03	東	O-3・P-3	(4.6)	0.4	0.10	直線状	東SD04に切られる	中世	
4	東SD04	東	O-3・P-3	(14)	0.9	0.25	直線状	東SD03を切る?	中世	
5	東SD05	東	N-2	3.5	0.8	0.40	直線状	東SD01を切る	中世	
6	東SD06	東	M-2・N-2・N-3	(10.9)	0.4	0.15	直線状		中世	
7	東SD07	東	J-5・K-6	(6.8)	0.8	0.25	直線状		中世	
8	東SD08	東	J-5・K-6	(6.1)	0.7	0.25	直線状		中世	
9	東SD09	東	K-2	4.6	0.4	0.10	直線状		中世	
10	東SD10	東	M-5・N-6	(9.2)	0.5	0.10	直線状		中世	
11	東SD11	東	M-0・N-0・N-1	(8)	0.9	0.15	弧状	東SD15に切られる	中世	
12	東SD14	東	N-1・N-2	(16.6)	1	0.50	直線状～弧状	東SD15を切る 東SD16に切られる	中世	
13	東SD15	東	N-1	(5.4)	0.6	0.50	直線状	東SD11・東SD13・ 東SD14を切る	中世	
14	東SD17	東	P-4	4	0.4	0.50	直線状		中世	
15	京SD18	東	Q-4	(2.8)	0.9	0.30	直線状		中世	
16	東SD19	東	Q-4・Q-5	5.4	0.8	0.10	直線状		中世	
17	東SD47 東延張	東	Q-6	3.5	1	0.40	直線状	東SD48を切る	中世	
18	東SD48 東延張	東	O-5・O-6	(17.5)	1	0.80	直線状	東SD47・東SD48に切られる	中世	
19	東SD49 東延張	東	Q-5・R-5・R-6	12	0.8	0.50	直線状	東SD43を切る	中世	東SD50・東SD51に分岐
20	東SD50 東延張	東	R-6・S-6	(7)	0.6	0.20	直線状		中世	東SD49・東SD51に分岐
21	西SD01 水路渠	西	R-6・S-6	(5.6)	0.4	0.20	弧状		中世	東SD49・東SD50に分岐
22	西SD01 西	西	G-0	(4.3)	0.5	0.15	弧状		中世	
23	西SD02 西	西	G-2・H-2	6.4	0.6	0.15	弧状		中世	
24	西SD03 西	西	H-2	7.3	0.5	0.10	弧状		中世	
25	西SD04 西	西	I-2	9.7	0.5	0.15	弧状		中世	
26	西SD05 西	西	H-2	(7.7)	0.5	0.15	弧状		中世	
27	西SD06 西	西	G-0・G-1・ H-1・H-2・I-2	(35.2)	1	0.40	弧状	西SD08・西SD2 - 西SP33を切る 西SP01に切られる	中世	
28	西SD07 西	西	H-2	5	0.5	0.10	弧状		中世	
29	西SD08 西	西	G-0・G-1	1.8	0.6	0.50	直線状	西SD06・西SD08に切られる	中世	
30	西SD09 西	西	H-1	3.1	0.6	0.50	不定形	西SD08を切る	小世	
31	西SD10 西	西	H-0・H-1	2.6	0.6	0.15	不定形	西SD11を切る	中世	
32	西SD11 西	西	H-1	1.4	0.4	0.50	不定形	西SD10に切られる	中世	
33	西SD12 西	西	H-1	1.6	0.4	0.10	不定形		中世	
34	西SD13 西	西	P-4・Y-6	(18.3)	0.6	0.10	鉤状	西SD20に切られる	中世	西SD14・西SD16と つながる?
35	西SD14 西	西	G-3・G-4	3.6	0.5	0.15	直線状		中世	西SD13・西SD16と つながる?
36	西SD15 西	西	E-4・F-2・P-3	(27.5)	0.7	0.20	直線状		中世	
37	西SD16 西	西	G-3	0.9	0.5	0.15	直線状	西SD17に切られる	中世	西SD13・西SD14と つながる?
38	西SD17 西	西	G-3・H-3・I-3	(22.1)	0.5	0.25	弧状	西SD16に切る	中世	
39	西SD18 西	西	G-3	1.6	0.5	0.50	直線状		中世	
40	西SD19 西	西	I-3	8	0.3	0.10	直線状		中世	
41	西SD20 西	西	E-5・F-5 G-5・H-5	(26.5)	0.7	0.20	直線状	西SD13を切る 西SP17に切られる	中世	
42	西SD21 西	西	I-5・J-5	(11.0)	0.4	0.10	直線状		中世	
43	西SD22 西	西	J-1	(1.3)	0.4	0.10	直線状		中世	
44	西SD23 東道路	東	K-2	(3.8)	0.7	0.20	直線状		中世	
45	西SD30 東道路	東	K-0	(2.5)	0.5	0.25	直線状	西SD31を切る	中世	
46	西SD31 東道路	東	K-0	(3.4)	0.4	0.10	直線状	西SD30に切られる	中世	

3 土坑・小穴等（第22～24図）

東SP01（第22図）

M-6グリッドで検出された長径0.9m、短径0.9mの隅丸方形で、深さ0.10mの断面形が浅い皿状を呈する土坑である。中央尾根部東側で検出される。出土遺物はない。

東SP02（第22図）

M-4グリッドで検出された長径0.9m、短径0.9mの隅丸方形に近い形態で、深さ0.10mの断面形が浅い皿状を呈する土坑である。中央尾根部東側で検出される。出土遺物はない。

東SP03（第22図）

N-4グリッドで検出された長径1.0m、短径1.0mの円形で、深さ0.20mの断面形が浅い皿状を呈す

る土坑である。中央尾根部東側で検出される。土器が1点出土している。

出土遺物（第24図）

3は壺口類部の破片である。短い頸部から上外方に直線的に開く短い単純口縁を有し、口唇部には面を持つ。口縁部外面はタテハケ後、頸部にヨコナデを加え、内面はヨコハケにより調整される。外面にハケを残し、頸部にヨコナデを加える特徴は、県西部の菊川式の新しい段階以降にみられることから、弥生後期後半～古墳前期初頭に比定される。

東SP04（第22図）

N-4グリッドで検出された長径1.0m、短径1.0mの円形で、深さ0.15mの断面が浅い皿状を呈する土坑である。東谷部で検出される。出土遺物はない。

東SP05（第22図）

N-1グリッドで検出された長径1.0m、短径1.0mの円形で、深さ0.15mの断面が浅い皿状を呈する土坑である。東谷部で検出される。出土遺物はない。

東SP06（第22図）

N-1グリッドで検出された長径1.0m、短径0.9mの円形で、深さ0.15mの断面が浅い皿状を呈する土坑である。東谷部で検出される。土器片が17点出土している。

東SP07（第22図）

N-1、O-1グリッドで検出された長径1.2m、短径0.8m、深さ0.25mの断面が浅い皿状を呈する土坑である。南東部調査区外のため全形は不明であるが、円形を呈すると推測される。東谷部で検出される。出土遺物はない。

東SP08（第22図）

N-2グリッドで検出された長径1.1m、短径1.0mの円形で、深さ0.20mの断面が逆台形を呈する土坑である。東谷部で検出される。出土遺物はない。

東SP09（第22図）

O-2グリッドで検出された長径1.1m、短径1.1mの円形で、深さ0.20mの断面が逆台形を呈する土坑である。東谷部で検出される。東SP10を切る。出土遺物はない。

東SP10（第22図）

O-2グリッドで検出された長径1.0m、短径0.7mの円形で、深さ0.30mの断面が逆台形を呈する土坑である。東谷部で検出される。東SP09に切られ、東SP11を切る。出土遺物はない。

東SP11（第22図）

O-2グリッドで検出された長径1.0m、短径1.0mの円形で、深さ0.25mの断面が逆台形を呈する土坑である。東谷部で検出される。東SP10に切られる。出土遺物はない。

東SP12（第22図）

N-5グリッドで検出された長径0.9m、短径0.8mの円形で、深さ0.10mの断面が浅い皿状を呈する土坑である。中央尾根部東側で検出される。出土遺物はない。

東SP13（第22図）

P-4、Q-4グリッドで検出された長径1.3m、短径1.1mの円形で、深さ0.30mの断面が逆台形を呈する土坑である。東谷部で検出される。土器片が1点出土している。

東SP14（第22図）

P-4グリッドで検出された長径1.2m、短径1.2mの円形で、深さ0.15mの断面が逆台形を呈する土坑である。東谷部で検出される。出土遺物はない。

東SP15（第22図）

Q-4グリッドで検出された長径1.3m、短径1.3mの円形で、深さ0.28mの断面が逆台形を呈する土坑である。東尾根部で検出される。出土遺物はない。

東SP16（第22図）

M-1グリッドで検出された長径0.8m、短径0.7mの円形で、深さ0.25mの断面が逆台形を呈する土坑である。東谷部で検出される。土器片が1点出土している。

東SP57（第22図）

N-1グリッドで検出された長径1.6m、短径1.4mの不定形を呈し、深さ1.90mの断面が逆台形の土坑である。新期スコリア層上面検出の遺構の中では深度があり、他の遺構とは性質も異なることが考えられる。西半が削平により失われているが、土坑底面から直立気味に開き、土坑中位で変換点をもって聞く形状を持つ。東谷部で検出される。土器片が1点出土している。

東SP97（第22図）

R-5グリッドで検出された長径1.1m、短径1.0mの円形で、深さ0.15mの断面が浅い皿状を呈する土坑である。東尾根部で検出される。土器片が1点出土している。

東SP98（第22図）

R-5グリッドで検出された長径1.1m、短径1.1mの円形で、深さ0.20mの断面が浅い皿状を呈する土坑である。東尾根部で検出される。出土遺物はない。

東SP99（第22図）

R-6、S-6グリッドで検出された長径1.4m、短径1.1mの橈円形で、深さ0.10mの断面が浅い皿状を呈する土坑である。東尾根部で検出される。出土遺物はない。

西SP01（第23図）

G-0グリッドで検出された長径1.3m、短径0.8mの不定形を呈し、深さ0.10mの断面が浅い皿状を呈する土坑である。中央谷部で検出される。出土遺物はない。

西SP02（第23図）

H-2グリッドで検出された長径1.0m、短径0.7mの橈円形で、深さ0.10mの断面が浅い皿状を呈する土坑である。中央谷部で検出される。西SD06に切られる。出土遺物はない。

西SP03（第23図）

H-2グリッドで検出された長径1.0m、短径0.6mの不定形を呈し、深さ0.20mの断面が浅い皿状を呈する土坑である。中央谷部で検出される。西SD06に切られる。出土遺物はない。

西SP04（第23図）

H-1グリッドで検出された長径0.8m、短径0.8mの円形で、深さ0.25mの断面が浅いU字状を呈する土坑である。中央谷部で検出される。出土遺物はない。

西SP05（第23図）

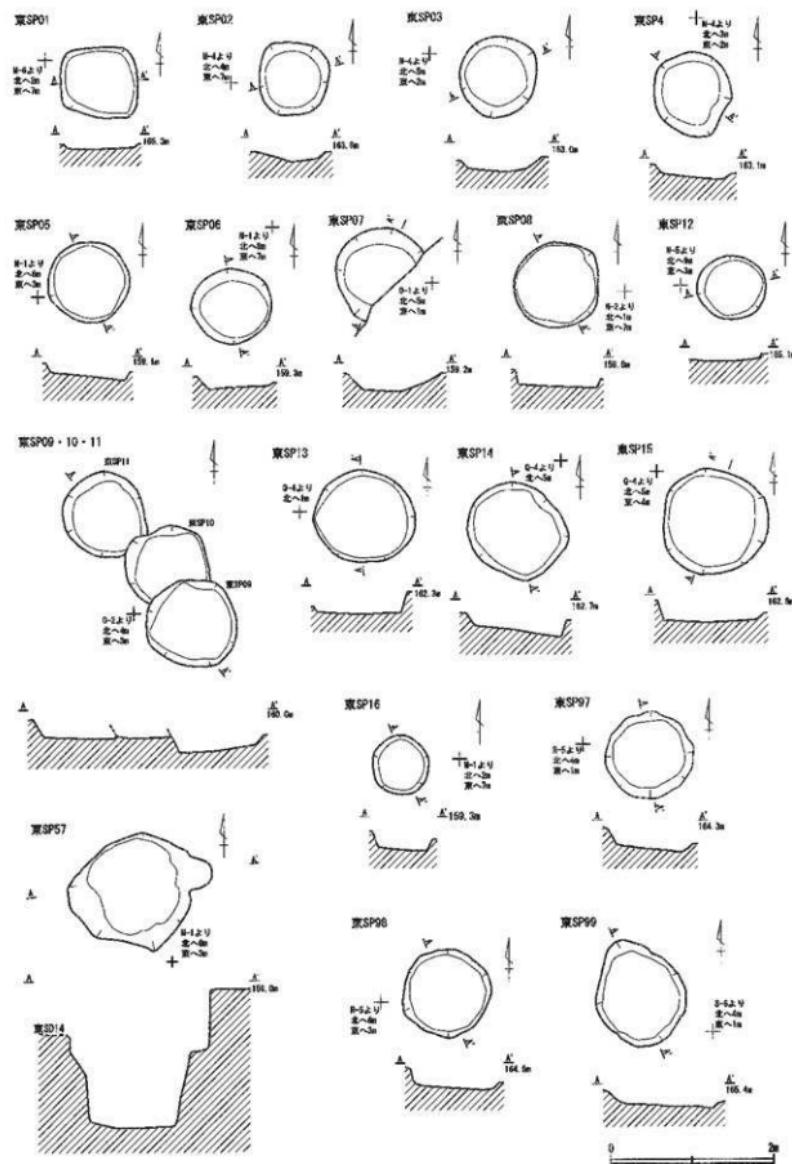
H-1グリッドで検出された長径1.2m、短径0.9mの不定形を呈し、深さ0.20mの断面が浅い皿状を呈する土坑である。中央谷部で検出される。出土遺物はない。

西SP06（第23図）

H-1グリッドで検出された長径0.8m、短径0.8mの隅丸方形で、深さ0.25mの断面が浅いU字状を呈する土坑である。中央尾根部で検出される。出土遺物はない。

西SP07（第23図）

H-1グリッドで検出された長径1.0m、短径0.7mの橈円形で、深さ0.20mの断面が皿状を呈する土坑である。中央尾根部で検出される。出土遺物はない。



第22図 東SP01～東SP15・東SP57・東SP97～東SP99

西SP08（第23図）

H-1グリッドで検出された長径0.8m、短径0.6mの梢円形で、深さ0.10mの断面が浅い皿状を呈する土坑である。中央谷部で検出される。西SP09を切る。出土遺物はない。

西SP09（第23図）

H-1グリッドで検出された長径1.1m、短径0.7mの梢円形で、深さ0.10mの断面が浅い皿状を呈する土坑である。中央谷部で検出される。西SP08に切られる。出土遺物はない。

西SP10（第23図）

H-1、I-1グリッドで検出された長径1.2m、短径1.0mの梢円形で、深さ0.25mの断面が浅いU字状を呈する土坑である。中央谷部で検出される。出土遺物はない。

西SP11（第23図）

I-2グリッドで検出された長径0.8m、短径0.7mの円形で、深さ0.15mの断面が浅いU字状を呈する土坑である。中央谷部で検出される。出土遺物はない。

西SP12（第23図）

I-1グリッドで検出された長径1.0m、短径1.0mの円形で、深さ0.15mの断面が浅い皿状を呈する土坑である。中央谷部で検出される。出土遺物はない。

西SP13（第23図）

I-1グリッドで検出された長径0.9m、短径0.9mの円形で、深さ0.20mの断面が浅い皿状を呈する土坑である。中央谷部で検出される。出土遺物はない。

西SP14（第23図）

H-0グリッドで検出された長径1.6m、短径0.9mの梢円形で、深さ0.10mの断面が浅い皿状を呈する土坑である。中央谷部で検出される。出土遺物はない。

西SP15（第23図）

I-0グリッドで検出された長径1.2m、短径1.1mの梢円形で、深さ0.55mの断面が深い箱状を呈する土坑である。中央谷部で検出される。出土遺物はない。

西SP16（第23図）

H-0グリッドで検出された長径0.6m、短径0.3mの梢円形で、深さ0.25mの断面がV字状を呈する土坑である。中央谷部で検出される。出土遺物はない。

西SP17（第23図）

G-5グリッドで検出された長径0.9m、短径0.9mの円形で、深さ0.45mの断面が深い箱状を呈する土坑である。西尾根部で検出される。西SD20を切る。出土遺物はない。

西SP18（第23図）

H-5グリッドで検出された長径0.8m、短径0.8mの隅丸方形に近い円形で、深さ0.15mの断面が浅い皿状を呈する土坑である。西尾根部で検出される。出土遺物はない。

西SP19（第23図）

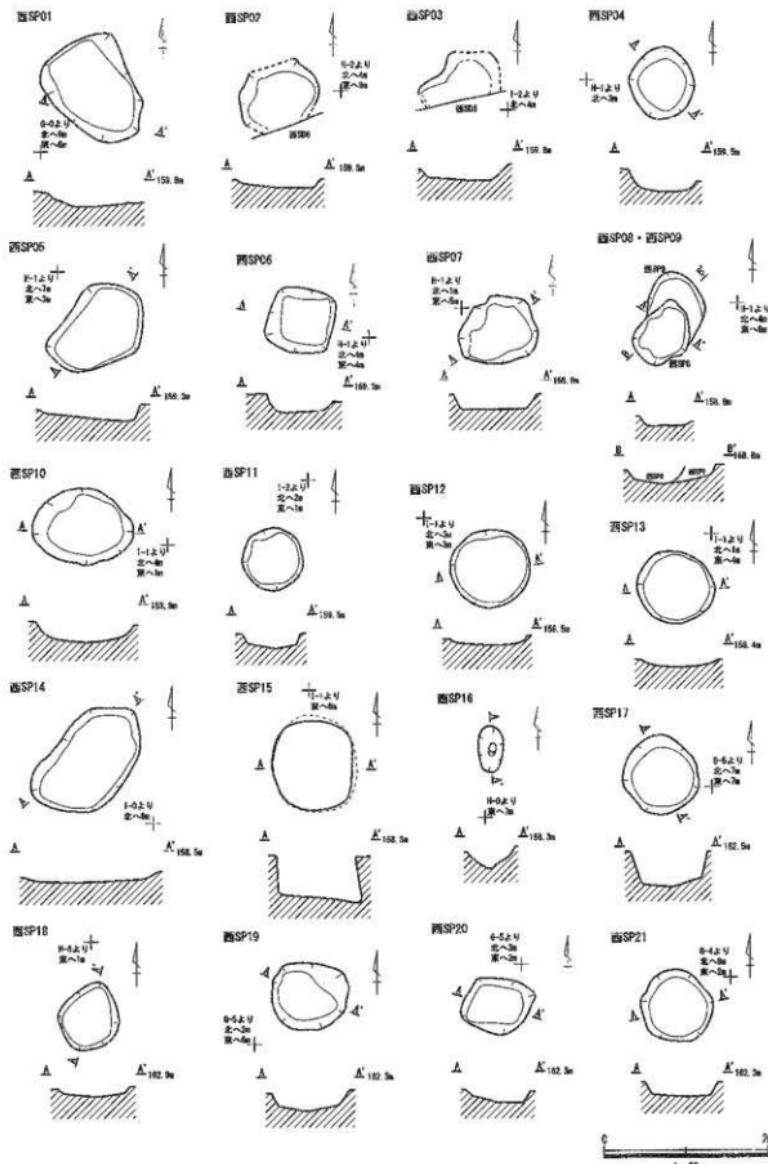
G-5グリッドで検出された長径1.0m、短径0.8mの梢円形で、深さ0.25mの断面が浅いU字状を呈する土坑である。西尾根部で検出される。出土遺物はない。

西SP20（第23図）

G-5グリッドで検出された長径0.8m、短径0.7mの隅丸方形で、深さ0.15mの断面が浅い皿状を呈する土坑である。西尾根部で検出される。出土遺物はない。

西SP21（第23図）

G-4グリッドで検出された長径0.9m、短径0.9mの円形で、深さ0.20mの断面が浅い皿状を呈する



第23圖 西SP01~西SP21

土坑である。西尾根部で検出される。出土遺物はない。

西SP22 (第24図)

H-4グリッドで検出された長径0.8m、短径0.8mの円形で、深さ0.15mの断面が浅い皿状を呈する土坑である。中央谷頭部で検出される。出土遺物はない。

西SP23 (第24図)

H-4グリッドで検出された長径0.9m、短径0.9mの円形で、深さ0.15mの断面が浅い皿状を呈する土坑である。中央谷頭部で検出される。出土遺物はない。

西SP24 (第24図)

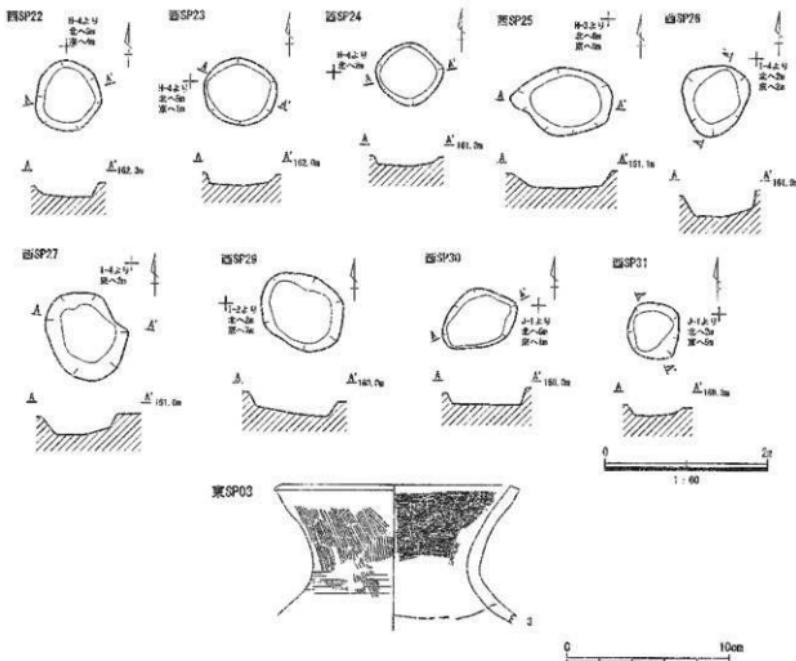
H-4グリッドで検出された長径0.8m、短径0.8mの円形で、深さ0.15mの断面が浅い皿状を呈する土坑である。中央谷頭部で検出される。出土遺物はない。

西SP25 (第24図)

H-3グリッドで検出された長径1.2m、短径0.8mの梢円形で、深さ0.20mの断面が皿状を呈する土坑である。中央谷頭部で検出される。土器片が1点出土している。

西SP26 (第24図)

I-4グリッドで検出された長径0.9m、短径0.8mの不定形を呈し、深さ0.35mの断面が浅いU字状を呈する土坑である。中央谷頭部で検出される。出土遺物はない。



第24図 西SP22～西SP31

西SP27（第24図）

I-3グリッドで検出された長径1.1m、短径1.0mの橿円形で、深さ0.25mの断面が浅いU字状を呈する土坑である。中央谷頭部で検出される。出土遺物はない。

西SP29（第24図）

I-2グリッドで検出された長径1.1m、短径0.9mの橿円形で、深さ0.35mの断面が皿状を呈する土坑である。中央谷部で検出される。出土遺物はない。

西SP30（第24図）

I-1、J-1グリッドで検出された長径1.0m、短径0.7mの橿円形で、深さ0.20mの断面が皿状を呈する土坑である。中央谷部で検出される。出土遺物はない。

西SP31（第24図）

J-1グリッドで検出された長径0.7m、短径0.7mの円形で、深さ0.15mの断面が浅い皿状を呈する土坑である。中央谷部で検出される。出土遺物はない。

第4表 第2層 土坑・小穴(SP) 計測表

()は残存値

No.	造営名	地区	グリッド	長径(m)	短径(m)	最大深(m)	平面形状	切り合ひ関係	発掘時期	備考
1	東SP01	東	M-6	0.9	0.6	0.10	橿丸形		中世	
2	東SP02	東	M-4	0.9	0.6	0.10	円形		中世	
3	東SP03	東	N-4	1	1	0.20	円形		中世	
4	東SP04	東	O-4	1	1	0.15	円形		中世	
5	東SP05	東	N-1	1	1	0.15	円形		中世	
6	東SP06	東	N-1	1	0.9	0.15	円形		中世	
7	東SP07	東	N-1・O-1	1.2	(0.8)	0.25	円形		中世	
8	東SP08	東	N-2	1.1	1	0.20	円形		中世	
9	東SP09	東	O-2	1.1	1.1	0.20	円形	東SP10を切る	中世	
10	東SP10	東	O-2	1	(0.7)	0.30	円形	東SP11を切る 東SP09に切られる	中世	
11	東SP11	東	O-2	1	(1)	0.25	円形	東SP10に切られる	中世	
12	東SP12	東	N-5	0.9	0.8	0.10	円形		中世	
13	東SP13	東	P-4・Q-4	1.3	1.1	0.30	円形		中世	
14	東SP14	東	P-4	1.2	1.2	0.15	円形		中世	
15	東SP15	東	Q-4	1.3	1.3	0.25	円形		中世	
16	東SP16	東	M-1	0.8	0.7	0.25	円形		中世	
17	東SP57	東	N-1	1.6	1.4	1.90	不定形		中世	
18	東SP97	東試掘	R-6	1.1	1	0.15	円形		中世	
19	東SP98	東試掘	R-6	1.1	1.1	0.20	円形		中世	
20	東SP99	東試掘	R-6・S-6	1.4	1.1	0.10	橿円形		中世	
21	西SP01	西	G-0	1.3	0.8	0.10	不定形		中世	
22	西SP02	西	H-2	1	0.7	0.10	橿円形	西SP06に切られる	中世	
23	西SP03	西	H-2	1	(0.6)	0.20	不定形	西SP06に切られる	中世	
24	西SP04	西	H-1	0.8	0.8	0.25	円形		中世	
25	西SP05	西	H-1	1.2	0.9	0.20	不定形		中世	
26	西SP06	西	H-1	0.8	0.8	0.25	橿丸形		中世	
27	西SP07	西	H-1	1	0.7	0.25	橿円形		中世	
28	西SP08	西	H-1	0.8	0.6	0.10	橿円形	西SP09を切る	中世	
29	西SP09	西	H-1	1.1	0.7	0.10	橿円形	西SP08に切られる	中世	
30	西SP10	西	H-1・I-1	1.2	1	0.25	橿円形		中世	
31	西SP11	西	I-2	0.8	0.7	0.15	円形		中世	
32	西SP12	西	I-1	1	1	0.15	円形		中世	
33	西SP13	西	I-1	0.9	0.9	0.20	円形		中世	
34	西SP14	西	H-0	1.6	0.9	0.10	橿円形		中世	
35	西SP15	西	I-0	1.2	1.1	0.55	橿円形		中世	
36	西SP16	西	II-0	0.6	0.3	0.25	橿円形		中世	
37	西SP17	西	G-5	0.9	0.9	0.45	円形	西SP20を切る	中世	
38	西SP18	西	H-5	0.8	0.8	0.15	橿円形		中世	
39	西SP19	西	G-5	1	0.6	0.25	橿丸形		中世	
40	西SP20	西	G-5	0.8	0.7	0.15	橿丸形		中世	
41	西SP21	西	G-4	0.9	0.9	0.20	円形		中世	
42	西SP22	西	H-4	0.8	(0.8)	0.15	円形		中世	
43	西SP23	西	H-4	0.9	0.9	0.15	円形		中世	
44	西SP24	西	H-4	0.8	0.8	0.15	円形		中世	
45	西SP25	西	H-3	1.2	0.8	0.20	橿円形		中世	
46	西SP26	西	I-4	0.9	0.8	0.35	円形		中世	
47	西SP27	西	I-3	1.1	1	0.25	橿円形		中世	
48	西SP29	西	J-2	1.1	0.9	0.35	橿円形		中世	
49	西SP30	西	I-1・J-1	1	0.7	0.20	橿円形		中世	
50	西SP31	西	J-1	0.7	0.7	0.15	円形		中世	

第2節 第3層（栗色土層）上面検出の遺構・遺物

1 遺構と遺物の概要

第3層（栗色土層）上面において遺構検出を行ったものとして竪穴住居11軒、掘立柱建物3棟、方形周溝墓3基、溝状遺構24基、土坑・小穴55基を報告する（第25図）。なお、溝、土坑・小穴の表記は、東区と西区で同じ名称を用いているものがあるため、新通スコリア層（第2層）と同様、東区のものは東SD01、西区のものは西SD01といったように表記する。

2 竪穴住居（第26～50図）

1号住居（SB01）（第26～28図）

J-4グリッドで検出された平面が橢円形を呈する竪穴住居である。谷側の南半分は削平により掘方が辛うじて確認されるにとどまるが、平面形と4基の主柱穴、炉の状況が確認できる。削平により失われている谷側の状況が不明であるが、東西の土層帯から貼床は主柱穴で囲まれる中央付近に確認できる。掘方は、底面中央部がわずかに浅く、周囲が環状にやや深くなるが、中央と周囲の明確な掘り分けは認めがたい。炉は、中央やや奥の北東寄りに設けられ、手前側に炉石2点が確認できる。覆土、床面上から土器が出土している。

出土遺物（第28図）

4は、床面上から出土した高坏の口縁部破片である。口径の4分の1程度が残存している。内湾気味に立ち上がり、口唇部の上端に面を持つもので、内外面をハケ後、ミガキ調整を加えている。ミガキはハケを完全に消去するには至らずやや粗いものである。内外面をミガキ調整すること、口径の割に薄手であることから、高坏の口縁部破片と判断した。

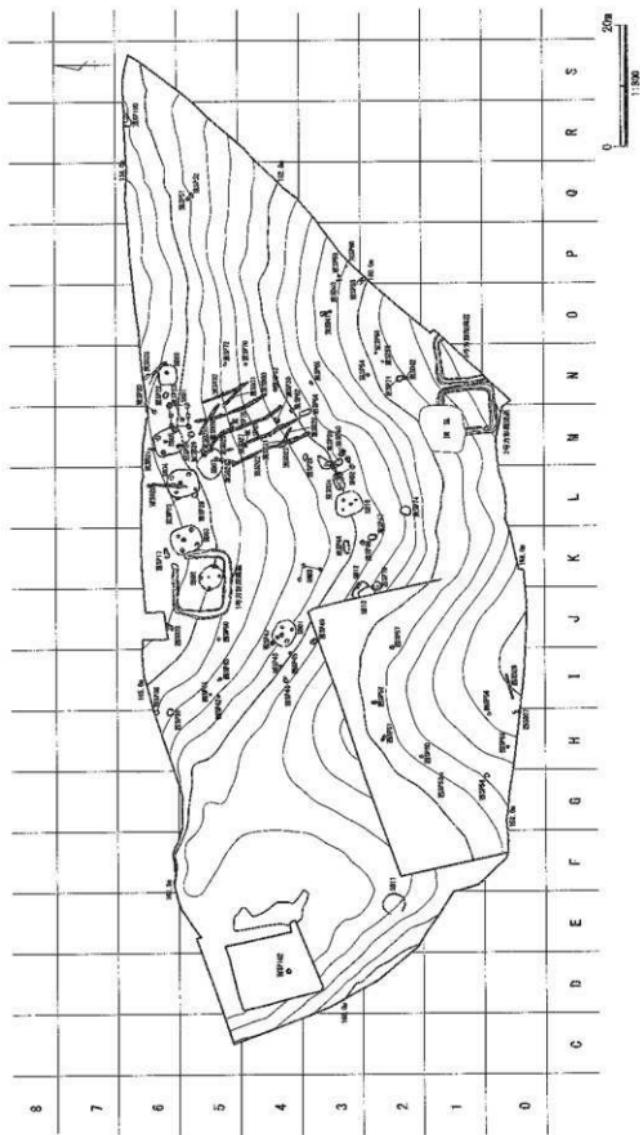
5は床面上から出土した折り返し口縁壺の口縁部破片である。水平近くまで外反した口縁端部の外面にやや薄い折り返し部を貼付する。器壁の摩耗が著しく施文、調整方法等は不明である。

6は床面上から出土した小型壺の底部破片である。底部内面にヨコハケ、中央付近に板ナデが確認できる。

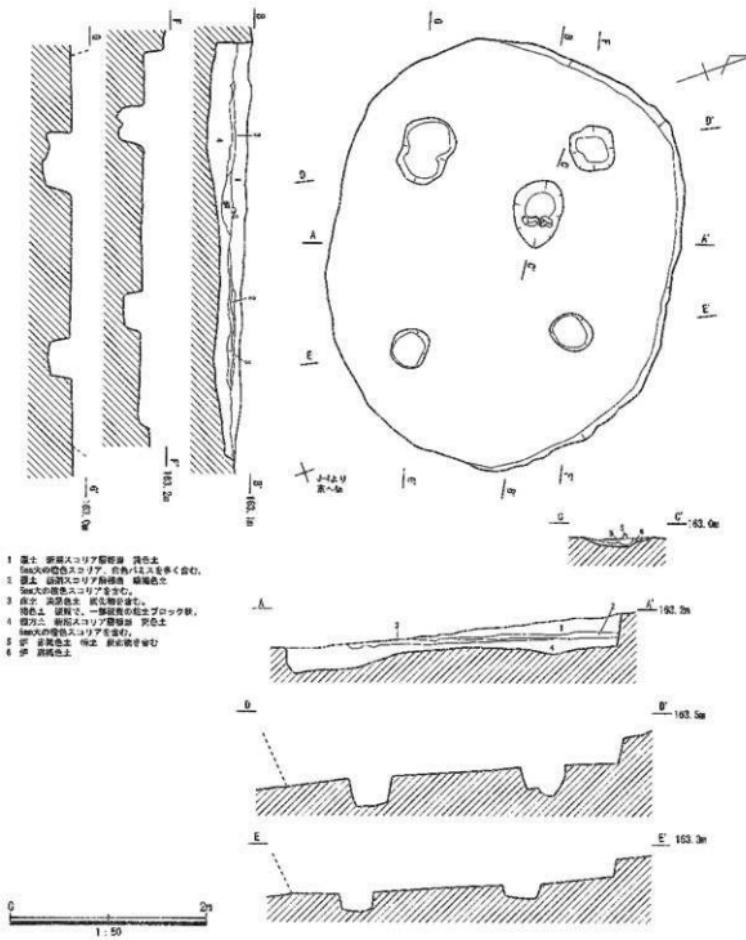
7は床面上と覆土、2層出土の破片がそれぞれ接合した窓口縁部破片である。弱く開く口縁部は口唇部をヨコナデにより丸く收め、緩やかに屈曲する頸部から中位に最大径を持つ胴部につながる。外面はタテハケ、内面はヨコハケにより調整している。頸部外面に器壁を焼成前に円形に浅く抉った痕跡が2箇所認められるが意図は不明である。胴部外面にはススが付着している。当地域の壺の胴部外面はヨコハケを基調に調整するものが多く、口唇部のヨコナデとともに在来の調整方法とは一線を画していることが確認できる。

8は床面上から出土した台付窓の台部である。台部は完存する。ほぼ直線的に開くやや高い台部を持ち、内外面をハケ調整する。外面は台部及び胴部下位にタテハケ調整を行う。なお、台部上半はハケ調整がやや不鮮明となり、右下がりの擦痕状の細沈線がほぼ等間隔に巡っている。この擦痕状の細沈線は下端付近が半月状に幅広かつ深く、上端に向かって徐々に先細りかつ浅くなる傾向がある。推測の域を出ないが、この細沈線は胴部下位のハケ調整を行う際、工具を持つ手の爪先が痕跡として残されたものの可能性が想定される。なお、胴部内面は著しく摩耗し、破断面にも炭化物が付着していることから、台部を脚台として転用していた可能性が考えられる。

破片資料が多く詳細な検討は困難であるが床面上を主体に出土していることからほぼ同時期の所産と判断される。ほぼ直線的に開くやや高い台部を有する台付窓を含むことから、弥生後期後半に比定されよう。



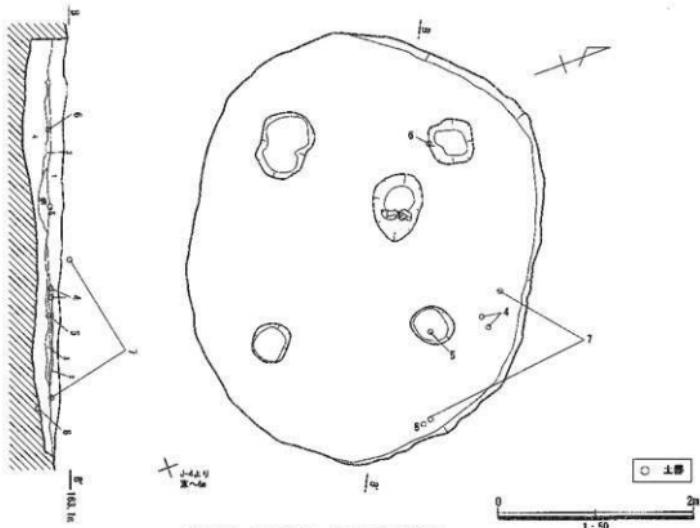
第25図 第3層上面遺構全体図



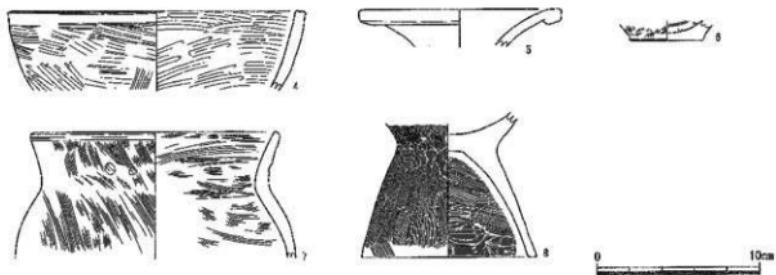
第26図 1号住居 (SB01)

2号住居 (SB02) (第29~32図)

K-5グリッドで検出された平面が橢円形を呈する竪穴住居である。谷寄りの南東半分は削平により床面が失われ掘方かが確認されるにとどまる。4基の主柱穴、炉の状況を確認できる。貼床は、ほぼ全面に行われていたと判断される。掘方は底面中央部がわずかに浅いようであるが周囲との差はほとんど認められない。炉は、中央やや東寄りに認められ、手前側に2個の炉石を確認できる。覆土、床面直上から比較的の残存率が高い土器が一括出土している。



第27図 1号住居 出土土器分布図

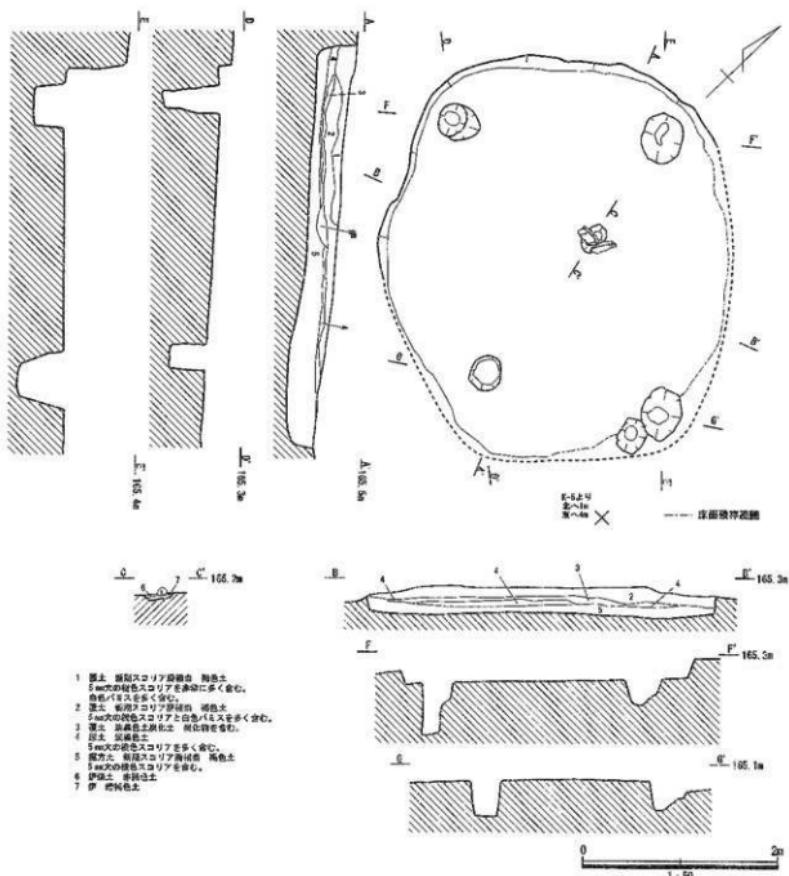


第28図 1号住居 出土土器

出土遺物（第31・32図）

9は床面直上から出土した腰部下半に最大径を持つ無文の壺である。欠損により口縁部の形態は不明である。突出が少ないやや大きめの底部から胴部下半で最大径を持ち、わずかに丸みを帯びた撫で肩の胸部となる。頸部で細く窄まり、口縁部に向かって上外方に開く。外面はほぼ全面にわたり丁寧なミガキにより調整されており、無文である。内面は胴部内面のほぼ全面を細かいヨコハケで調整し、頸部以上をミガキ調整している。胴部中位に梢円形（長径約2.5cm、短径約1.5cm）の焼成後の穿孔が認められる。

10は床面直上から出土したやや小型の壺の胴部下半の破片である。最大径を胴中位に持ち、胴部下半に弱い張りを持っている。底部はほとんど突出することがない。器壁の摩耗が著しく詳経は不明であるが、胴部外面にミガキ調整、内面にナデが確認できる。

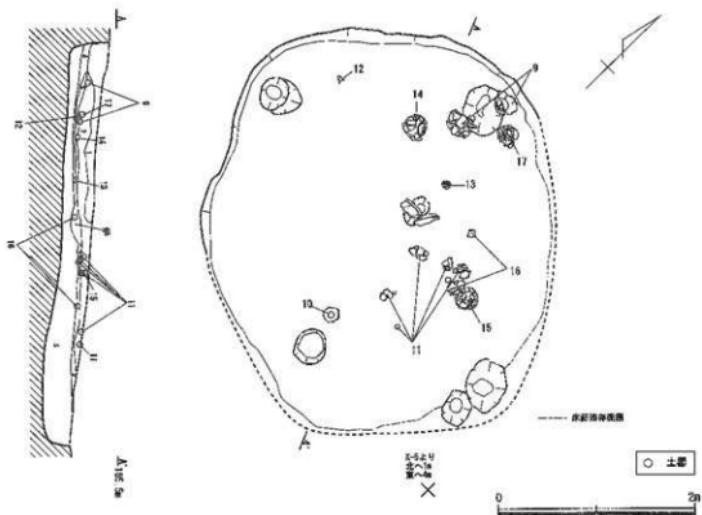


第29図 2号住居 (SB02)

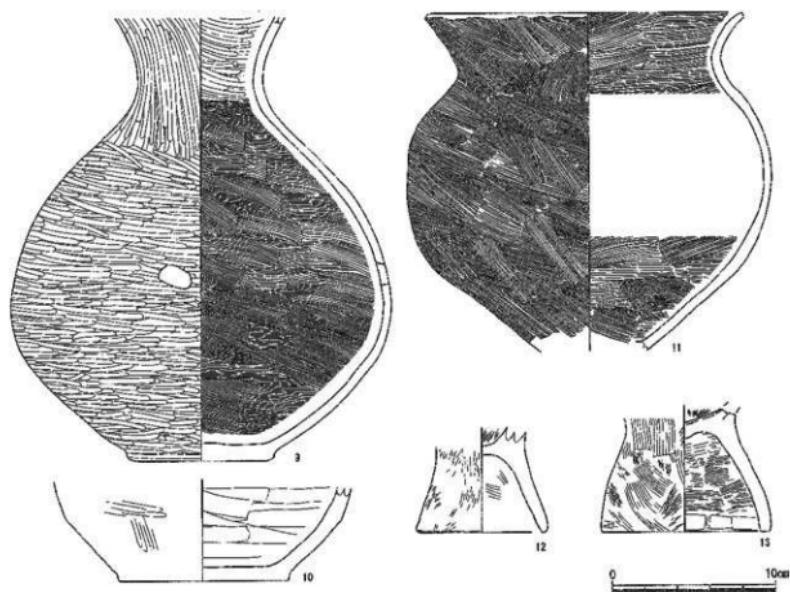
11は床面上直上及び覆土から出土した單純口縁の台付壺である。中位に最大径を持つ楕球形に近い胴部から緩やかに頸部で窄まり、上外方に直線的に開く口縁部を有する。外面は、口縁部外面をタテハケ(口唇部直下を部分的にヨコハケ)、胴部をヨコハケ、胴部下位はタテハケを基調に調整、内面は、口縁部をヨコハケ、胴部をナデ、胴部下位をヨコハケにより調整する。口唇部は未調整に近い状態とし、口縁部外面に部分的なヨコハケが加えられている。

12・13は床面上直上から出土した台付壺の台部である。

12はやや小振りで直線的に開く台部でほぼ完存する。胴部につながる底部内面の曲線は急であることからあまり胴部が張らない小型の台付壺の可能性がある。器壁は摩耗が著しいが、内外面にハケが確認できる。



第30図 2号住居 出土土器分布図



第31図 2号住居 出土土器

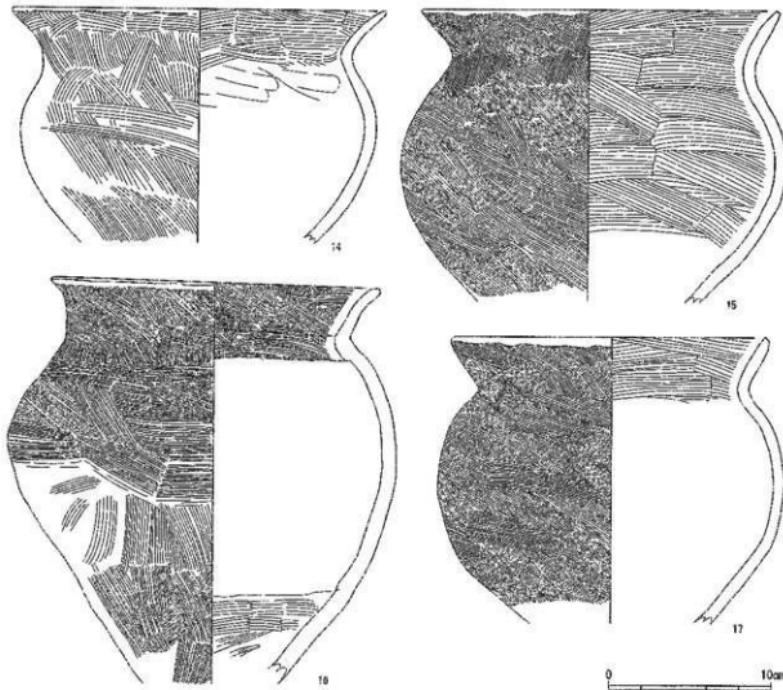
13はやや内湾気味に開く台部でほぼ完存する。底部内面には台部と胴部の接合部分が器壁の剥離により接合方法が良好に観察できる。すなわち、円筒状の台部の上面に粘土を充填し、台部上端にそって指頭により押圧して台部と充填部を密着させたもの（台部裏面はハケにより調整）を作製した後、台部上面に粘土を薄く貼りその外周から胴部下半が積み上げられていった過程がうかがえる。内外面はやや粗いハケが認められ、墻部にはヘラケズリ状の粘土の搔き取りが認められる。

14～17は床面上を中心に出土した台付壺の腹部である。胴部下半を欠損する以外はほぼ完存しており、前述の台部2点はいずれかの台部となる可能性が高いと考えられる。

14は口唇部を未調整に近い状態とし、屈曲する頸部に胴部中位やや上に最大径を持つ胴部を有するものである。外面及び口縁部内面をハケ、胴部内面を板ナデにより調整している。なお、口縁部外面には断続的にヨコハケが認められるが、同箇所の調整方法としてはやや異質である。

15は口唇部に明確な面を持たず、口縁部外面は未調整に近い状態とし、弱く屈曲する頸部に球形に近い胴部を有するものである。外面及び内面上半をハケにより調整している。外面には煤が多く付着している。

16は口唇部を未調整に近い状態とし、やや直立気味の口縁部から緩やかに屈曲する頸部に最大径を中位やや上に持つ長胴気味の胴部を有するものである。外面及び口縁部、底部内面をハケにより調整する。



第32図 2号住居 出土土器

17は口縁部を未調整に近い状態とし、屈曲する頸部に球形に近い胸部を有するものである。外面及び口縁部内面をハケ、胸部内面を板ナデにより調整している。

以上の土器は、比較的残存率が高いものを含み、その大半が床面直上から出土していることから、ほぼ同時期の所産と考えられる。頸部が細く、胸部の圧縮が進んでいない下膨れの胸部を持つ壺から弥生後期後半の時期に比定されよう。

3号住居（SB03）（第33～35図）

K-5～K-6グリッドで検出された平面が隅丸方形に近い梢円形の堅穴住居である。西壁面の一部は1号方形周溝墓によって切られている。谷側が削平を受けているが、4基の主柱穴、炉とともに床面も残存している。貼床は、ほぼ全面で確認できるようであるが、一部は壁面付近にまで及ばないようである。掘方は底面がほぼ平坦に掘削されている。この掘方は他の住居跡に比べ浅いため、炉の底面が掘方底面に接して設けられている。床面直上から土器片が出土している。

出土遺物（第35図）

18は床面直上から出土した折り返し口縁壺の口縁部破片である。薄手の口縁部に薄い折り返し部を貼付し、口唇部及び外面にはヨコハケが確認できる。

19は床面直上から出土した壺の口縁部破片である。口唇部を強く面取りすることにより外面下方に粘土のはみ出しが認められ、わずかに垂下口様となるものである。器壁の摩耗が著しいが、外面にはタテハケが確認できる。

20は床面直上から出土した単純口縁の台付壺口縁部破片である。口唇部をハケにより面取りした後、内面をヨコハケ、外面を斜めハケにより調整し口縁部としている。頸部は緩やかに屈曲する。

21は床面直上から出土した単純口縁の台付壺口縁部破片である。口唇部をハケにより面取りした後、内面をヨコハケ、外面を斜めハケにより調整した上で、口唇部下端にハケ状工具によるキザミを加えている。

いずれも破片資料であり、遺構と遺物の関連は不明であると言わざるをえないが、遺物の時期は弥生後期末～古墳前期初頭に比定されよう。

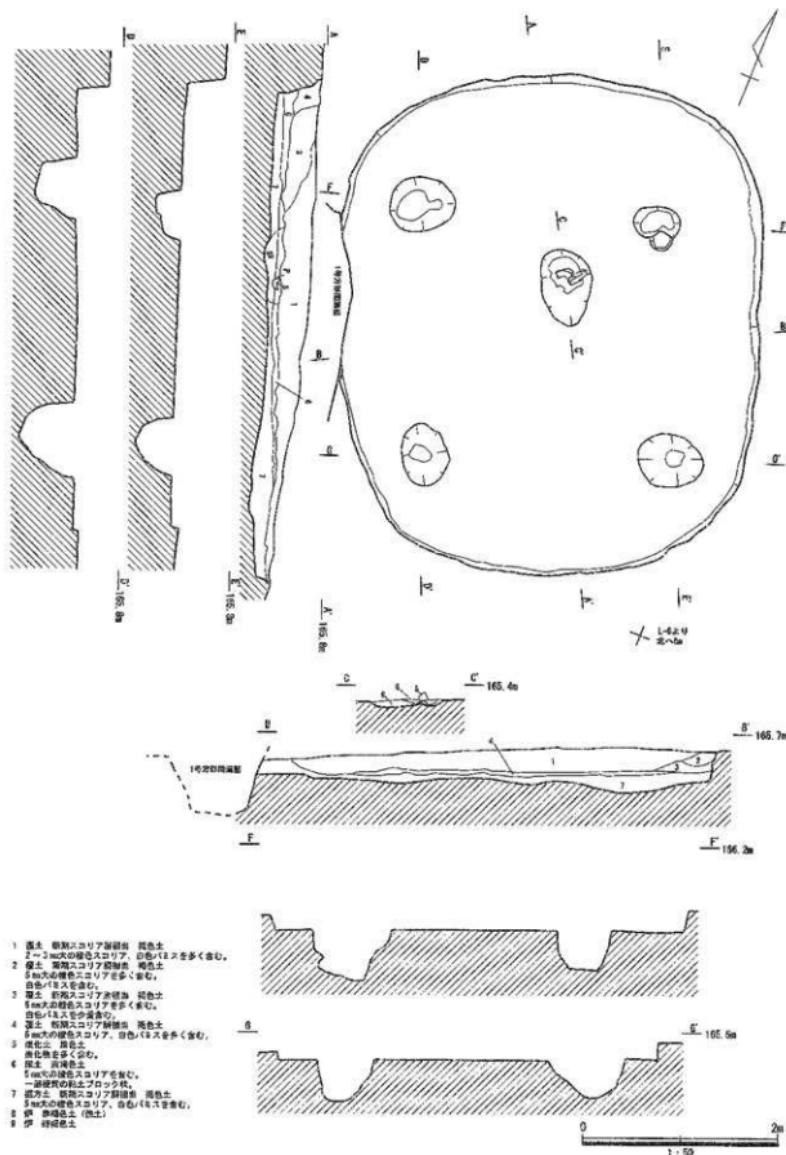
4号住居（SB04）（第36～38図）

L-5～L-6グリッドで検出された平面が隅丸方形を呈する堅穴住居である。西壁面はSP28・96により切られている。他の住居跡に比べ削平が少なく、4基の主柱穴、炉、貼床も良好に残存している。貼床は主柱穴で囲まれた内側に確認されるが、南側は壁面近くまで認められる。掘方は底面に若干の凹凸が認められるがほぼ平坦に掘削されている。炉は中央奥のやや右寄りに設けられているが炉石は検出されていない。南東隅の主柱穴周辺の床面直上及び覆土に土器の集中部が認められた。

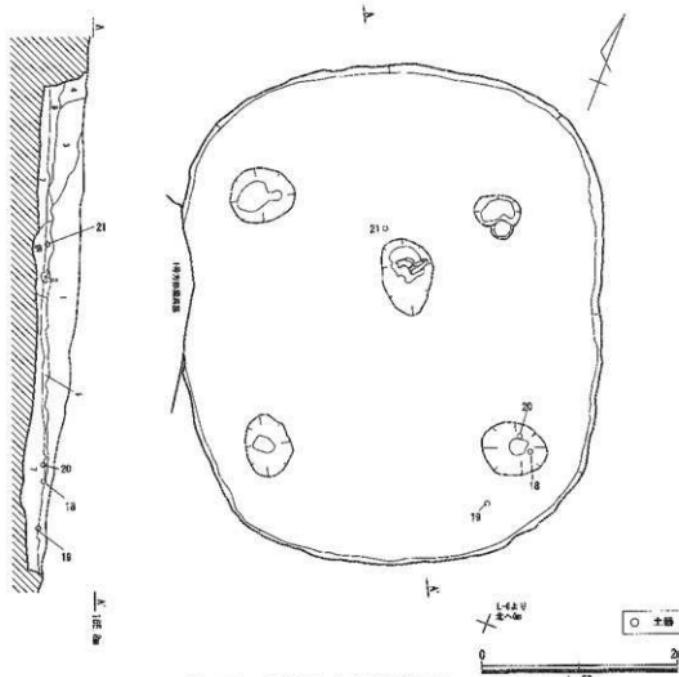
出土遺物（第38図）

22は床面直上から出土した単純口縁壺である。底部を欠損する以外はほぼ全形を知ることができる。わずかに内湾しながら外方に開く口縁部から緩やかな曲線で直立部を持つ頸部につながり、そこから肩が張らずに中位やや下位に最大径を持つ胴部につづく形態を有するものである。口唇部は明確な面取りを行う。器壁は摩耗しており、詳細な観察は困難であるが、無文で、口縁部内面及び外面はミガキ、内面はハケにより調整するが、成形時の指頭圧痕が良好に残っている。肩部内面には胴部と頸部接合の際の粘土のはみ出しが顕著に認められる。

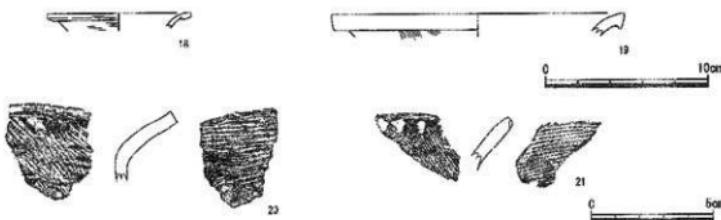
23は床面直上から出土した壺の頸部～胴部である。口縁部及び底部以外はほぼ全形を知ることができる。わずかに内湾しながら外方に開く口縁部から緩やかな曲線で短い頸部につながり、張りがある肩部から胴部中位に最大径を持つ扁球形に近い胴部を有するものである。胴部下半外面にわずかな稜を有する。外面はヘラミガキ、内面はナデにより調整している。



第33図 3号住居 (SB03)

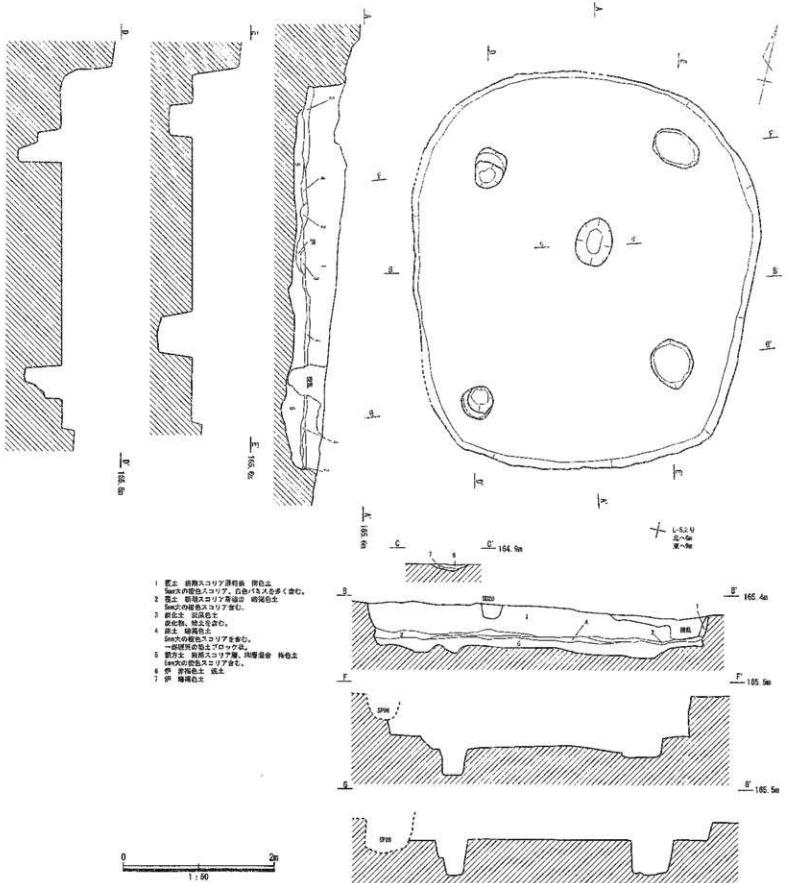


第34図 3号住居 出土土器分布図



第35図 3号住居 出土土器

24は床面上直上及び覆土から出土した台付壺の口縁～底部である。台部を欠損する以外はほぼ全周しており、全形を知ることができる。器壁の摩耗も少なく調整等が良好に観察できる。わずかに外反する口縁部から緩やかに括れた頸部につながり、そこから中位に最大径を持つ丸みを帯びた肩部を有するものである。口唇部は明確に面取りを行っている。外面はタテヘナナメハケを基調に調整しているが、口縁部付近はハケが及ばない部分がある。内面はヨコハケを基調に調整している。なお、外面及び口縁部内面はやや細かい工具、洞部内面はやや粗い工具により調整されている。



第36図 4号住居 (SB04)

25は覆土から出土した單純口縁壺の口縁部破片である。大きく外反する口縁部を有し、口唇部は強く面取りを行った結果、下端に粘土のはみ出しが認められる。器壁が摩耗しており、調整方法は不明であるが、ミガキ調整されているものと考えられる。

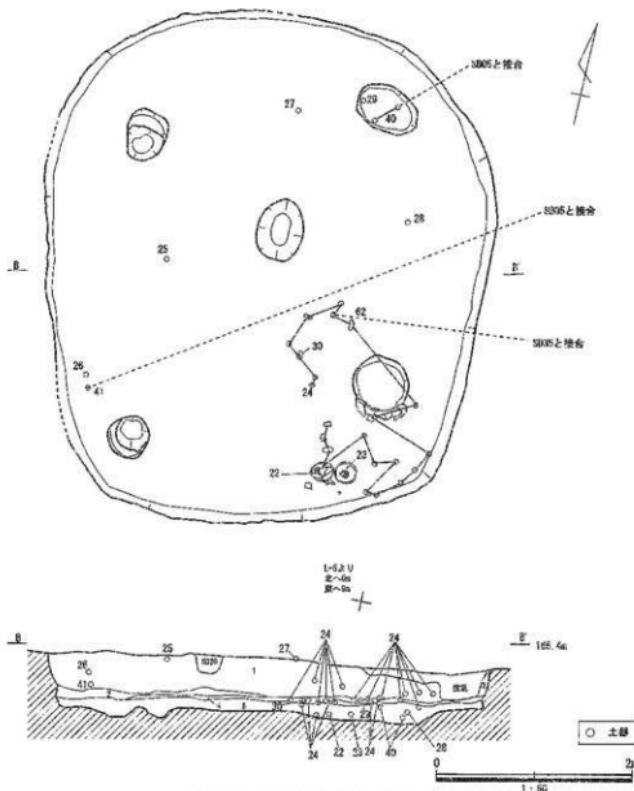
26~28は覆土及び床面直上から出土した壺の胴部破片である。

26は突出した底部から上外方に大きく開く肩部へとつながる。底部内面は緩やかな曲線を描くことから、底部中央部分はやや薄く製作されている可能性がある。器壁の摩耗が著しく調整方法は不明である。

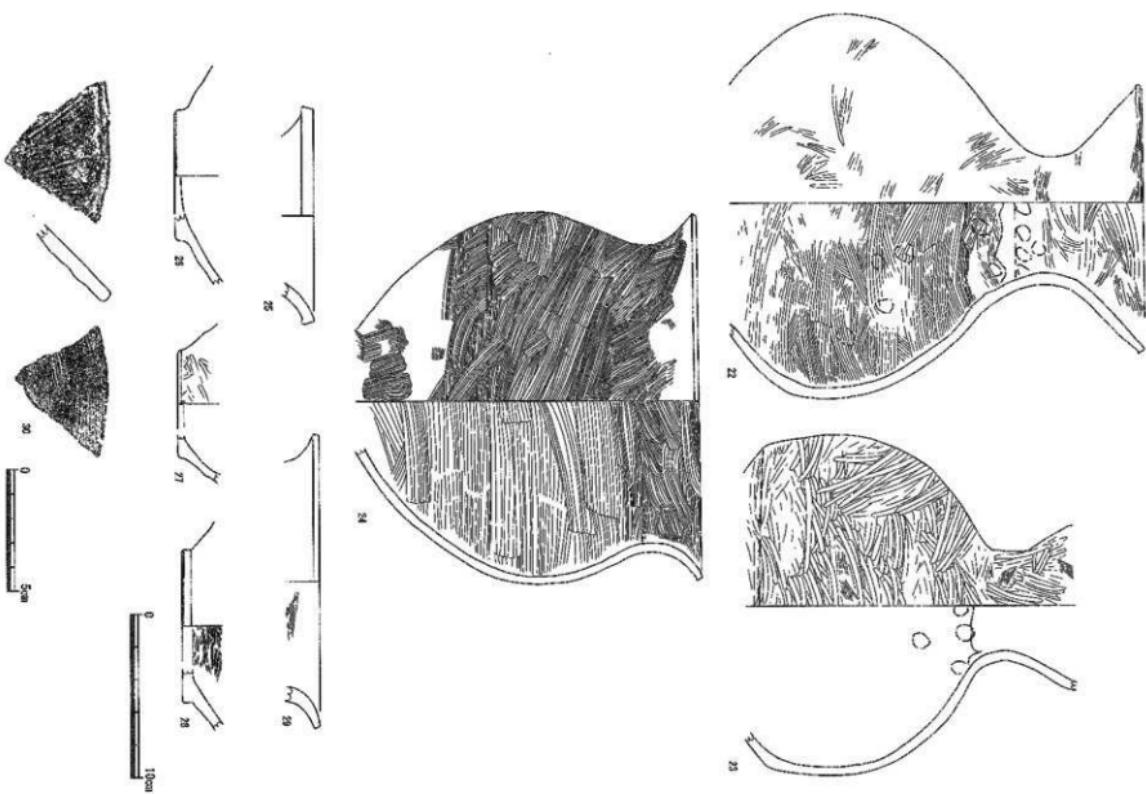
27は小型の壺の底部破片で、わずかに突出した底部からあまり開かずに肩部へとつながる。外面をヘラミガキ、内面をナデ調整している。

28は突出した底部から上外方に大きく開く肩部へとつながる。外面は摩耗により調整不明、内面はヨコハケ調整している。

29は床面直上から出土した台付壺の口縁部破片である。外反する口縁部を有し、口唇部を面取りしている。器壁の摩耗が著しく調整方法の観察は困難であるが、頸部内面にヨコハケが確認できる。



第37図 4号住居 出土土器分布図



第38図 4号住居 出土土器

30は床面直上から出土した壺口縁部破片である。台付壺の台部の可能性も考えたが、開きが大きいため、単純口縁部の口縁部破片と判断した。やや内湾気味に外方に開く口縁部で、口唇部は面取りを行う。外面をナメハケ、内面をヨコハケにより調整している。

23のような肩部が張り、球形を志向した胴部の存在から古墳前期初頭の時期に比定されよう。

5号住居（SB05）（第39～42図）

M-5～M-6グリッドで検出された平面が隅丸方形を呈する竪穴住居である。東壁面の一部がSP69により切られている。谷側は削平により床面が失われ、壁面の残存状況は良好とは言えないが、4基の主柱穴、炉は良好に残存している。貯床はほぼ全面に施されていたと考えられる。掘方は底面が若干凹凸を残すが、ほぼ平坦に掘削されている。炉は中央奥や右寄りに設けられているが、炉石は検出されていない。遺構残存率が高い北半の床面直上を中心に土器が出土している。

出土遺物（第41・42図）

31は床面直上から出土した内湾する口縁部を有する壺の口縁部破片である。口縁部外面にやや長めの棒状浮文を貼付しており、内湾気味の口縁部と相俟って外見上は複合口縁のように見える。また、口縁部の輪積痕で剥離したと考えられる横一線の破断面がちょうど棒状浮文の下端付近にめぐることから、複合口縁を意識したものである可能性があるが、同箇所の内外面に明確な稜線は認められない。外面はヘラミガキ、内面はハケを基礎に調整しているが、内面は摩耗が著しく詳細な観察は困難である。

32は床面直上から出土した複合口縁壺の口縁部破片である。頸部から大きく開いた後、上方に内湾気味に立ち上がる口縁部を附加している。口唇部は上面に面を持つ。外面はハケ、内面はヘラミガキ調整している。

33は覆土から出土した折り返し口縁壺の口縁部破片である。やや厚めの折り返し部を有する。摩耗が著しく調整方法等は不明である。

34は床面直上、覆土、炉の間で接合関係が認められる台付壺の口縁部～胴部破片である。球形に近い肩部から緩やかに屈曲する頸部を有し、そこからやや直立気味に開く口縁部を有するものである。口唇部に面を持ち、下端にヘラ状工具によるキザミを密接して施す。内外面ともにハケ調整を行っている。

35は床面直上から出土した壺の底部破片である。突出した底部から上外方に大きく開き胴部に至る。外面はヘラミガキ、内面はハケ後、一部をナデ調整している。

36は床面直上から出土した台付壺の台部破片である。同箇所が全周の半分強残存しており、破断面付近には成形時の接合痕が観察できる。内外面ともにハケ調整されているが、台部内面のみや粗い工具を用いている。

37・38は床面直上から出土した台付壺の口縁部破片である。色調、胎土、形状等が類似することから同一個体の可能性がある。いずれも緩やかに屈曲する頸部から大きく開く口縁部を持ち、口唇部は弱い面を持つものである。口縁部内外面はヨコハケ調整される。

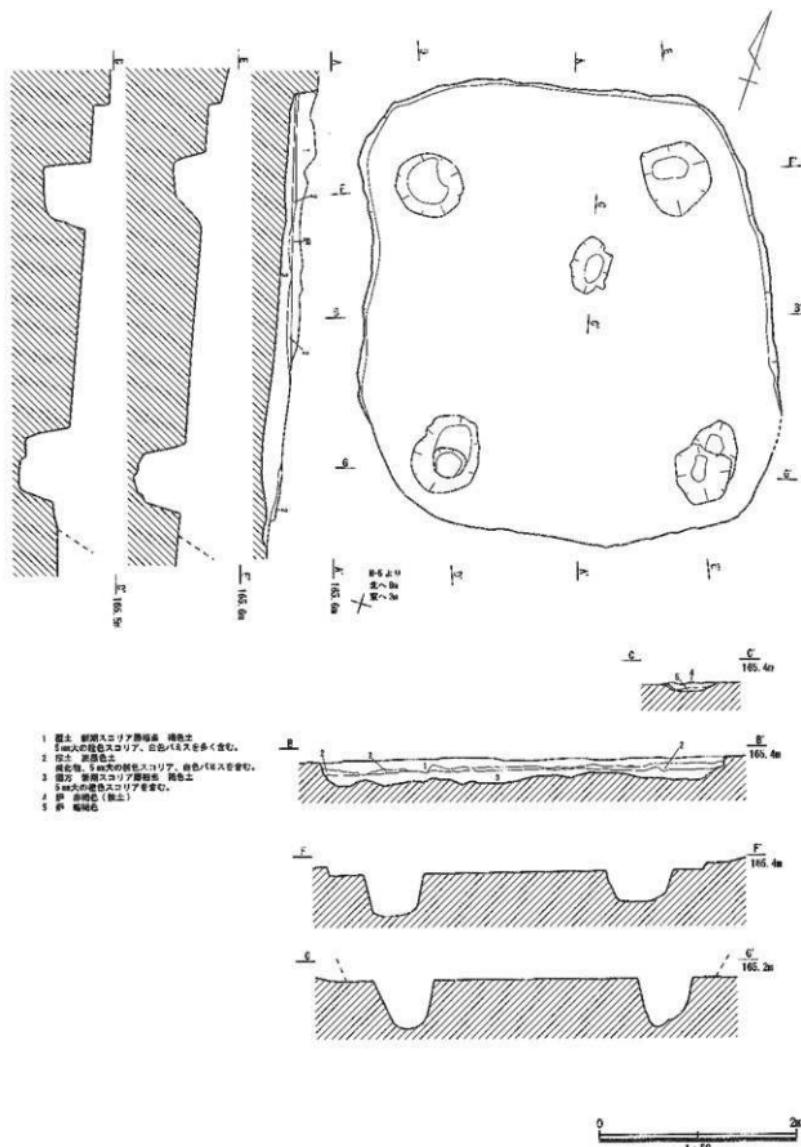
壺、甌の形態から以上の土器は弥生後期末～古墳前期初頭の時期に比定されよう。

4号住居・5号住居遺構間焼合土器（第43・44図）

39・40は4号住居、5号住居の間で接合関係にある土器である（第44図）。

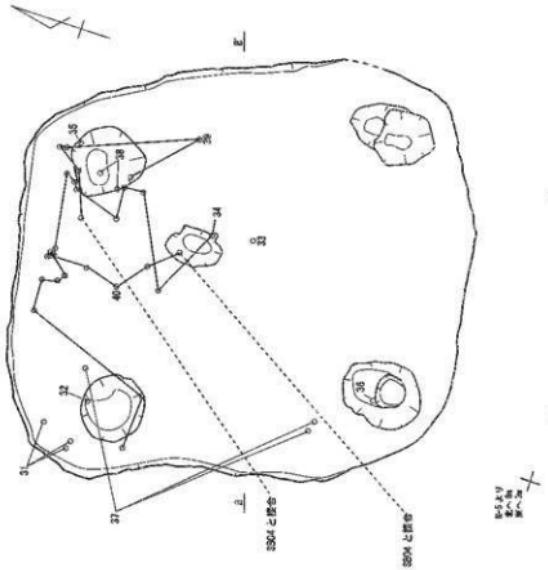
39は4号住居の床面直上、5号住居の床面直上で接合関係にある壺の底部破片である。外周が剥離していることから、成形時の接合箇所で剥離したと考えられる。おそらく、円盤状の粘土板を底面とし、その周囲から粘土を積み上げ胴部を成形したものと考えられる。内面は底面がナデ、立ち上がり部分がハケ調整、外面はハケ後ミガキ調整、裏面には木葉痕が確認できる。

40は4号住居覆土及び炉、5号住居床面直上及び覆土、炉の間で接合関係が認められる単純口縁壺の口縁部破片である。やや強く屈曲する頸部から直線的に開く短い口縁部を有するものである。口唇部は



第30図 5号住居 (SB05)

第2図 第3層(黒色土層)上面検出の遺物・遺物

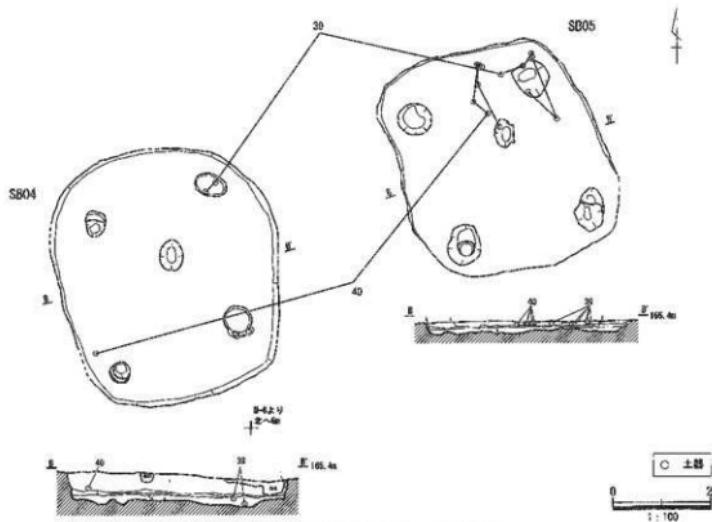


わずかに面を持つが、内外面に施すナデにより不明瞭な面となっている。やや薄手であり、他の土器とは明らかに異なる。

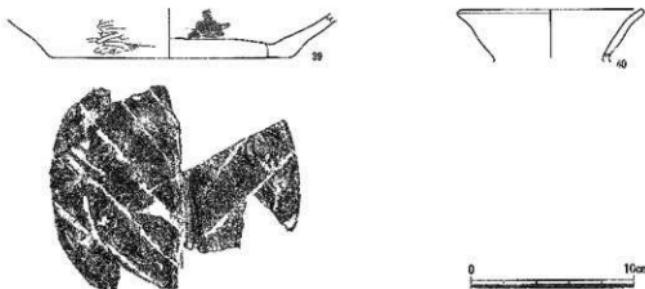
4号・5号住居の年代観と同様、以上の土器は弥生後期末～古墳前期初頭の時期に比定されよう。



第42図 5号住居 出土土器



第43図 遺構間土器接合図（4・5号住居）



第44図 遺構間接合土器（4・5号住居）

6号住居（SB06）（第45図）

N-6グリッドで検出された平面が隅丸方形を呈する竪穴住居である。北東隅が東SD33により切られている。中央部分を主体として炭化物・焼土を含む厚さ数cm程度の薄い層が確認されているが、現地調査では貼床であるとの判断には至っていない。主柱穴は未確認である。掘方はほぼ平坦に掘削されている。中央やや東寄りに炉が設けられているが炉石は未確認である。

7号住居（SB07）（第45図）

L-5、M-5グリッドで検出された平面が隅丸方形を呈する竪穴住居である。削平が著しく、本来は隅丸方形であったものの南側溝が削平された結果不定形となったと考えられる。東SD24、東SD28に切られる。削平により掘方と柱穴1基が検出されるにとどまるが、柱穴は本住居に伴うものかは不明である。掘方底面はおおむね平坦に掘削されているが、一部凹凸が認められるようである。覆土から土器片が3点出土している。

10号住居（SB10）（第46図）

L-3グリッドで検出された平面が隅丸方形を呈する竪穴住居である。やや不定形な平面形を呈するが、これは南側が削平により大半が失われていることに起因すると考えられる。主柱穴とを考えられる柱穴が3基、炉が確認できる。柱穴の位置を勘案すればほぼ南北に主軸を持つ竪穴住居であったと推測できよう。中央部分を主体として炭化物・焼土を含む厚さ数cm程度の薄い層が確認されているが、現地調査では貼床であるとの判断には至っていない。掘方はほぼ平坦に掘削されている。炉は中央やや南寄りに設けられているが、炉石は未確認である。覆土から土器片が5点出土している。

11号住居（SB11）（第47図）

E-2グリッドで検出された平面が円形を呈する竪穴住居である。柱穴、炉等は未確認であるが、平面形、壁面の立ち上がりの状況から竪穴住居と判断した。西半分は削平により失われている。掘方底面はやや凹凸が認められる。

12号住居（SB12）（第48～50図）

J-2、K-2、K-3グリッドで検出された平面が隅丸方形を呈する小型の竪穴住居である。13号住居に切られ、南西部分は後世の搅乱により削平されており残存状況は良好とは言えない。北側壁際に柱穴が2基近接して検出されているが、位置、深度から主柱穴と断定するには至らない。炉も未確認である。

出土遺物（第50図）

41～44は折り返し口縁部破片である。

41はやや薄い折り返し部を有するもので、折り返し部及び口縁部外面にハケ調整が確認できる以外は器壁の摩耗が著しく調整方法、施文の有無は不明である。

42はやや厚い折り返し部を有するものである。折り返し部にハケ調整が確認できる以外は器壁の摩耗が著しく調整方法、施文の有無は不明である。

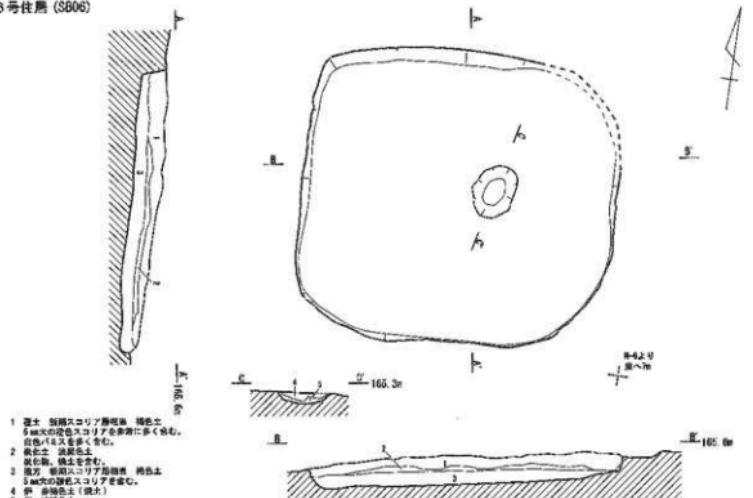
43は薄い折り返し部を有するものである。器壁もやや薄く成形されており、口唇部にも明確な面を持つもので、他に比べ精緻な印象がある。器壁の摩耗が著しく調整方法、施文の有無は不明である。

44はやや薄い折り返し部を有するものである。口唇部及び口縁部内面はハケ後ヘラミガキ調整、口縁部外面はハケ調整を行う。折り返し部裏面は未調整である。

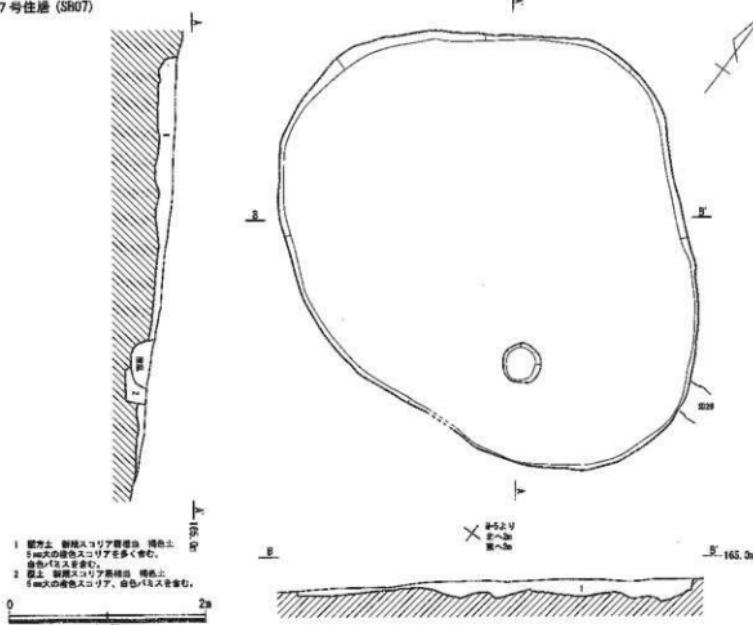
45は胴部が球形に近い小型壺の胴部破片である。外面はハケ後ヘラミガキ調整、内面は成形時の輪積み痕を一部強めナデ調整を行っている。

いずれも破片資料であり詳細な検討は困難であるが、弥生後期後半～古墳前期初頭の時期に比定されよう。

6号住居 (SB06)



7号住居 (SB07)



第45図 6号・7号住居 (SB06・SB07)

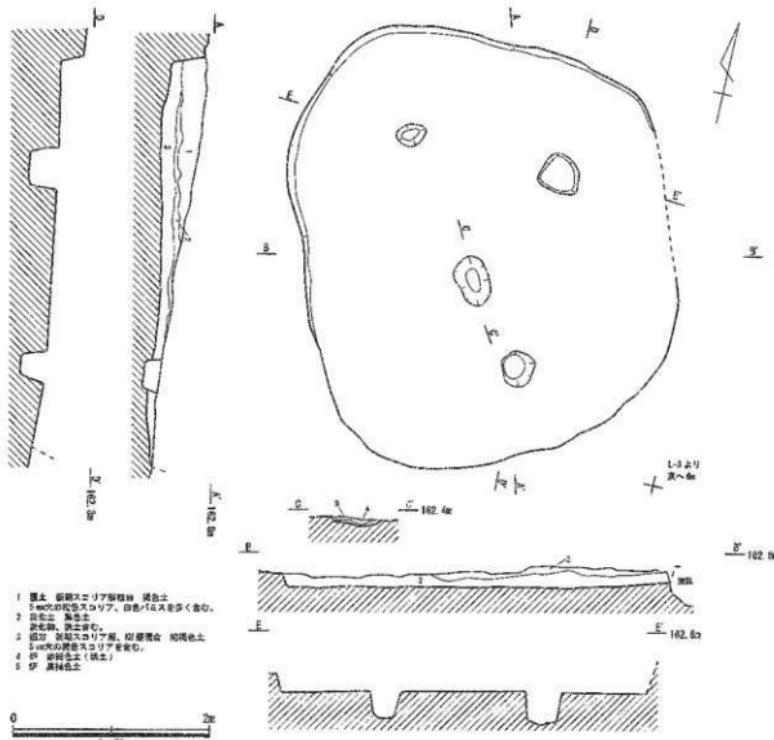
13号住居 (SB13) (第48~50図)

J-2グリッドで検出された平面が隅丸方形を呈する小型の整穴住居である。12号住居を切っている。南西部分の大半は後世の搅乱により削平されており残存状況は良好とは言えない。柱穴、炉も未確認である。掘方底面に近い部分で土器片が数点出土している。

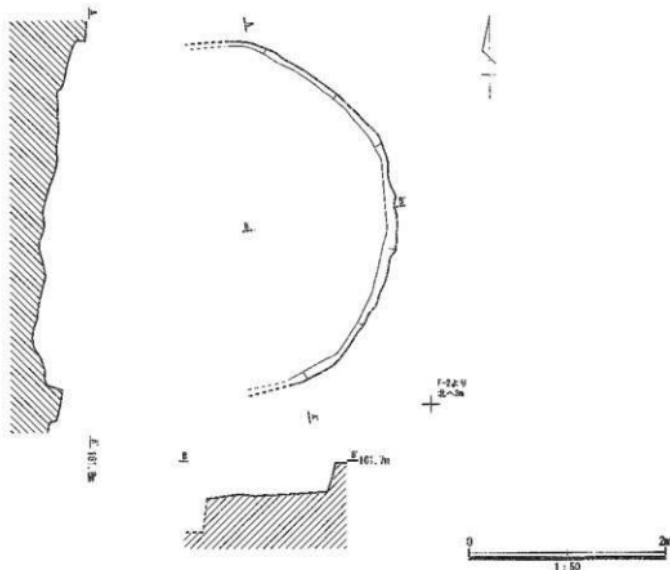
出土遺物 (第50図)

46は口唇部下端にキザミを持つ台付窓の口縁部破片である。わずかに内湾する口縁部からくの字に屈曲する頸部に至る形態を有し、頸部内面には明確な縫が形成されている。口唇部のキザミはヘラ状の工具によると考えられ、断面V字形でやや深く長めのキザミとなっている。キザミの密度も通常のものにくらべやや密に行われている。

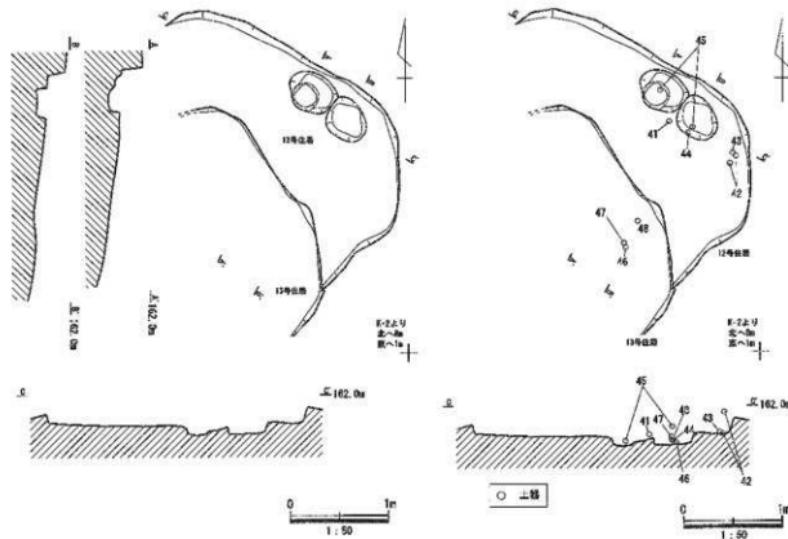
47は台付窓の底部付近の破片である。上外方に聞くことから、肩部付近に最大径をもつものと推測される。台部との接合部は1/2強残存しているが底部が剥離せず、台部のみが欠損していることから、ラッパ状の台部を接合するものであった可能性がある。外面はハケ調整、内面は接合部付近を境として上半をナデ、下半を粗く凹凸が少ないハケ調整としている。底部裏面(台部内面)は台部接合の際のもとのと考えられる強いナデ調整が認められる。



第46図 10号住居 (SB10)



第47図 11号住居 (SB11)



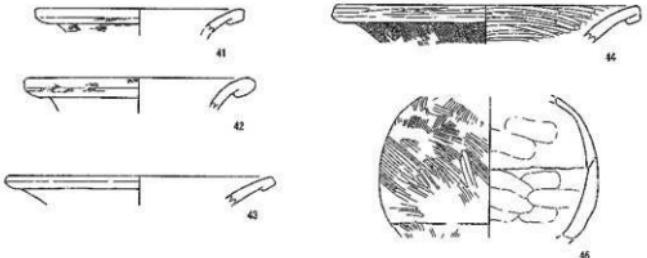
第48図 12号・13号住居 (SB12・SB13)

第49図 12号・13号住居 出土土器分布図

48は台付壺の底部破片である。外面及び胴部内面はハケ調整、台部内面はナデ調整が行われている。台部内面には充填により底部成形を行ったと考えられるひび割れが確認できる。

いずれも破片資料であり詳細な検討は困難であるが、弥生後期後半～古墳前期初頭の時期に比定されるよう。

12号住居



13号住居



第50図 12号・13号住居 出土土器

第5表 第3層 竪穴住居(SB)計測表

()は残存値

No.	遺構名	遺構番号	地区	グリッド	埴 装 面	平四形縦 (長軸:短軸)	幅高	主軸方位	主軸 穴数	伊形類	切り合い跡係	堆 層 地 期	備考
1	1号住居	SB01	西	J-4	3 横円形	4.3×3.5	N-62°-W	4 地床炉				弥生後期後半	
2	2号住居	SB02	東	K-6	3 横円形	4×3.5	N-45°-W	4 地床炉				弥生後期後半	
3	3号住居	SB03	東	K-5 K-6	3 橢丸方形	5.1×(4.3)	N-23°-W	4 地床炉	1号方形容萬葉茎周 溝に切られる			弥生後期末～古墳前期初頭	
4	4号住居	SB04	東	L-5 L-6	3 橢丸方形容	5.2×4.5	N-10°-W	4 地床炉	東SP28・東SP96と 切りあう 東SD26を切る			古墳前中期初頭	
5	5号住居	SB05	東	M-5 M-6	3 橢丸方形	4.7×4.2	N-22°-W	4 地床炉	SH01(東SP90)に 切られる 東SD21に切られる			弥生後期末～古墳前中期初頭	
6	6号住居	SB06	東	N-6	3 橢丸方形	4.4×4.1	N-0°-W	— 地床炉	東SD33に切られる			古墳前中期初頭	
7	7号住居	SB07	東	L-5 M-5	3 橢丸方形	3.2×3	N-47°-W	—	— 東SD24・東SD23に 切られる			弥生後期後半～古墳前中期初頭	
8	10号住居	SB10	東	L-5	3 橢丸方形	4.3×(3.5)	N-1°-E	(5) 地床炉				古墳前中期初頭	
9	11号住居	SB11	西道路	E-2	3 橢丸方形	(3.6)×(1.4)	—	—	—			弥生後期後半～古墳前中期初頭	
10	12号住居	SB12	東道路	K-2 K-3	3 橢丸方形	(3.6)×(1.9)	—	(1)	— SB13に切られる			弥生後期後半～古墳前中期初頭	
11	13号住居	SB13	東道路	J-2	3 橢丸方形	(1.5)×(1.4)	—	—	SB12を切る			弥生後期後半～古墳前中期初頭	

3 挖立柱建物（第51～54図）

1号掘立柱建物（SH01）（第51図）

M-5、M-6、N-5、N-6グリッドで検出された1間×2間の掘立柱建物である。長径0.6～1m、短径0.5～0.6mの隅丸長方形に近い平面形の柱穴掘方を持つ。

2号掘立柱建物（SH02）（第52・53図）

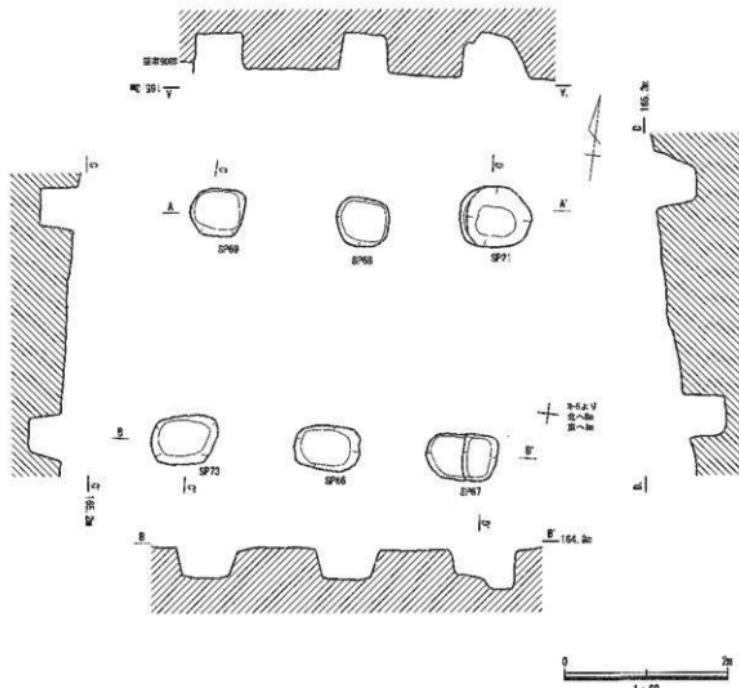
L-3、M-3グリッドで検出された1間×2間の掘立柱建物である。北東隅の柱穴位置にやや疑問が残るが、1間×2間の掘立柱建物と判断した。長径0.5～1m、短径0.25～0.5mの隅丸長方形及びやや不定形な平面形の柱穴掘方を持つ。

柱穴から土器片が出土している。

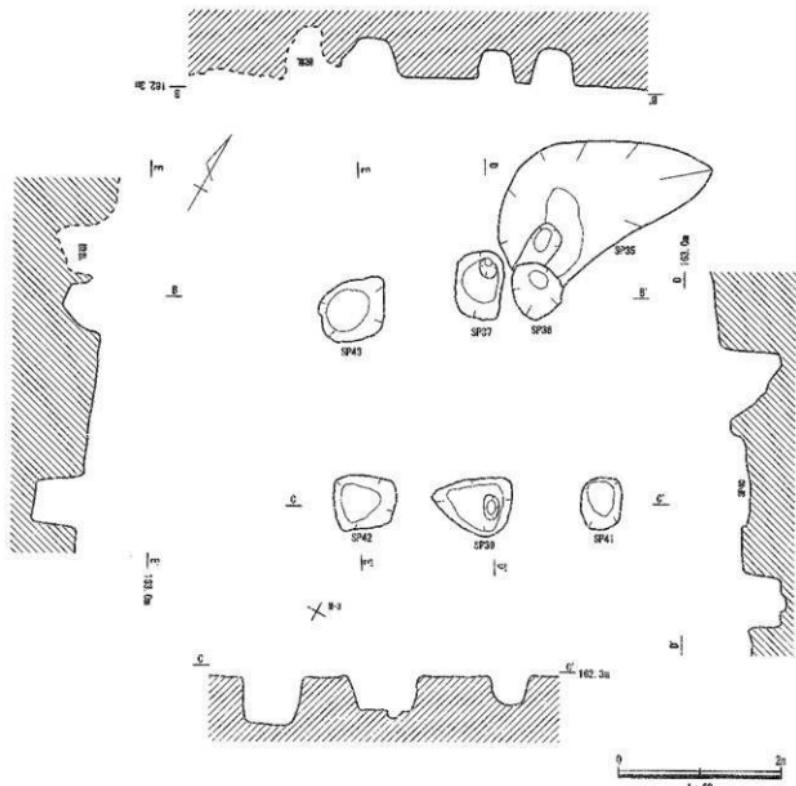
出土遺物（第53図）

49は南隅の柱穴（SP42）覆土から出土した折り返し口縁部の口縁部破片である。薄く幅広い折り返し部を有し、口唇部にキザミ、口縁部内面に織文を施している。

破片のため詳細な検討は困難であるが弥生後期前半にさかのぼる可能性がある。ただし、小破片であり、他に後期前半の資料が認めがたいことから、遺構の時期を示している可能性は低いと判断する。



第51図 1号掘立柱建物（SH01）



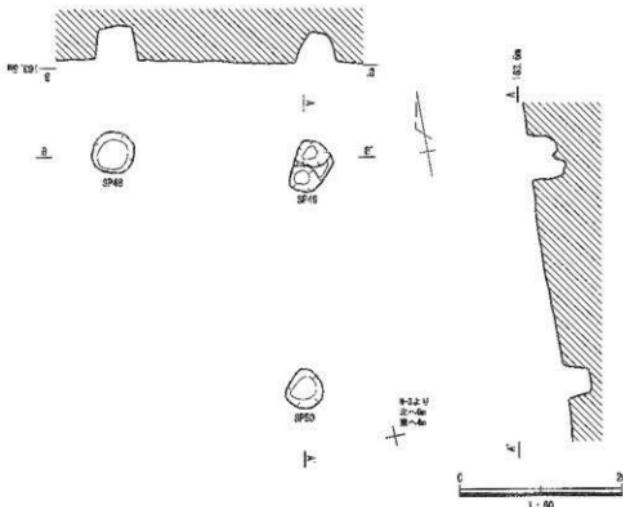
第52図 2号掘立柱建物 (SH02)



第53図 2号掘立柱建物 出土土器

3号掘立柱建物 (SH03) (第54図)

K-3、K-4グリッドで検出された1間×1間の掘立柱建物である。南西隅の柱穴が未検出であるが、1間×1間の掘立柱建物と判断した。長径0.5~0.6m、短径0.5mの円形及びやや不定形な平面形の柱穴端方を持つ。柱穴の形態・規模が他の掘立柱建物と異なることから、掘方以上が削平により失われた竪穴住居の主柱穴である可能性が考えられる。



第54図 3号掘立柱建物 (SH03)

第6表 第3層 掘立柱建物 (SH) 計測表

() は残存値

No.	遺構名	遺構 番号	地 区	グリッド 座 標	面 積	形狀規様	幅 (m)	奥行 (m)	主壁方向	構成柱穴	長 径 (m)	短 径 (m)	地 盤 (m)	地 下 水 面 (m)	切り 合 い 開 口	解 説	解 説	備 考
1	1号掘立柱建物	SH01	東	M-5	3	2間×1間	3.6	3	N-5~W	東SP19	1.0	0.6	0.30	椭丸方形			古墳前期初期	
				M-6						東SP21	0.8	0.6	0.25	椭円形				
				N-6						東SP26	0.7	0.5	0.35	椭丸方形				
										東SP27	0.6	0.6	0.30	椭丸方形				
										東SP28	0.6	0.6	0.30	椭丸方形				
										東SP29	0.5	0.5	0.25	椭丸方形				
2	2号掘立柱建物	SH02	東	L-3	5	2間×1間	2.9	2.5	N-30°~W	東SP30	0.7	0.6	0.40	椭丸方形			古墳後期中期～古墳後期初期	
				M-3						東SP31	0.6	0.6	0.40	椭丸方形				
										東SP32	0.7	0.6	0.40	椭丸方形				
										東SP33	0.6	(0.6)	0.30	椭丸方形				
										東SP34	0.5	0.5	0.40	内凹				
3	3号掘立柱建物	SH03	東	K-3	3	1間×1間	2.8	2.4	N-12°~S	東SP35	0.6	0.6	0.40	椭円形			古墳後期中期	
				K-4						東SP36	0.5	0.5	0.30	内凹				

4 小穴・土坑(第55~57図)

現地調査において小穴(SP)として記録されたものを一括している。一部には土坑に分類すべきものも含まれるが遺構名称の変更による混乱を避けるため現地調査当時の遺構名称(SP)を記載することとする。

東SP17(第55図)

K-6グリッドで検出された長径1.6m、短径0.8mの楕円形で、深さ0.35mの断面が浅いU字形を呈する土坑である。中央尾根部で検出される。土器片が1点出土している。

東SP20(第56図)

M-6グリッドで検出された直径0.6mの円形で、深さ1.00mの断面が深いU字状を呈する小穴である。中央尾根部で検出される。土器片が1点出土している。

東SP22（第55図）

N-6グリッドで検出された長径1.0m、短径0.7mの橢円形で、深さ0.15mの断面が浅い皿状を呈する土坑である。中央尾根部で検出される。出土遺物はない。

東SP23（第55図）

M-5グリッドで検出された直径0.5mの円形で、深さ0.20mの断面が浅いU字状を呈する小穴である。中央尾根部で検出される。出土遺物はない。

東SP24（第55図）

M-5グリッドで検出された長径1.0m、短径0.8mの橢円形で、深さ0.05mの断面が浅い皿状を呈する土坑である。中央尾根部で検出される。土器片が1点出土している。

東SP28（第55図）

L-5グリッドで検出された長径1.0m、短径0.6mの円形で、深さ0.40mの断面が深いU字状を呈する土坑である。中央尾根部で検出される。SB04を切る。出土遺物はない。

東SP29（第55図）

M-3グリッドで検出された長径1.1m、短径0.7mの橢円形で、深さ0.20mの断面が皿状を呈する土坑である。中央尾根部で検出される。出土遺物はない。

東SP30（第55図）

M-4グリッドで検出された直径0.8mの円形で、深さ0.20mの断面が浅い逆台形状を呈する土坑である。中央尾根部で検出される。出土遺物はない。

東SP31（第55図）

M-4グリッドで検出された長径0.8m、短径0.5mの橢円形で、深さ0.15mの断面が浅い皿状を呈する土坑である。中央尾根部で検出される。東SD26に切られる。出土遺物はない。

東SP38（第55図）

M-3グリッドで検出された長径1.2m、短径0.9mの隅丸長方形で、深さ0.20mの断面が浅い皿状を呈する土坑である。中央尾根部で検出される。出土遺物はない。

東SP40（第55図）

M-3グリッドで検出された長径0.7m、短径0.5mの橢円形で、深さ0.40mの断面がU字状を呈する小穴である。中央尾根部で検出される。出土遺物はない。

東SP44（第55図）

K-3グリッドで検出された長径2.1m、短径1.0mの隅丸長方形で、深さ0.15mの断面が浅い皿状を呈する土坑である。中央尾根部で検出される。出土遺物はない。

東SP46（第55図）

K-3グリッドで検出された長径0.8m、短径0.6mの湾円形で、深さ0.10mの断面が浅い皿状を呈する土坑である。中央尾根部で検出される。出土遺物はない。

東SP47（第55図）

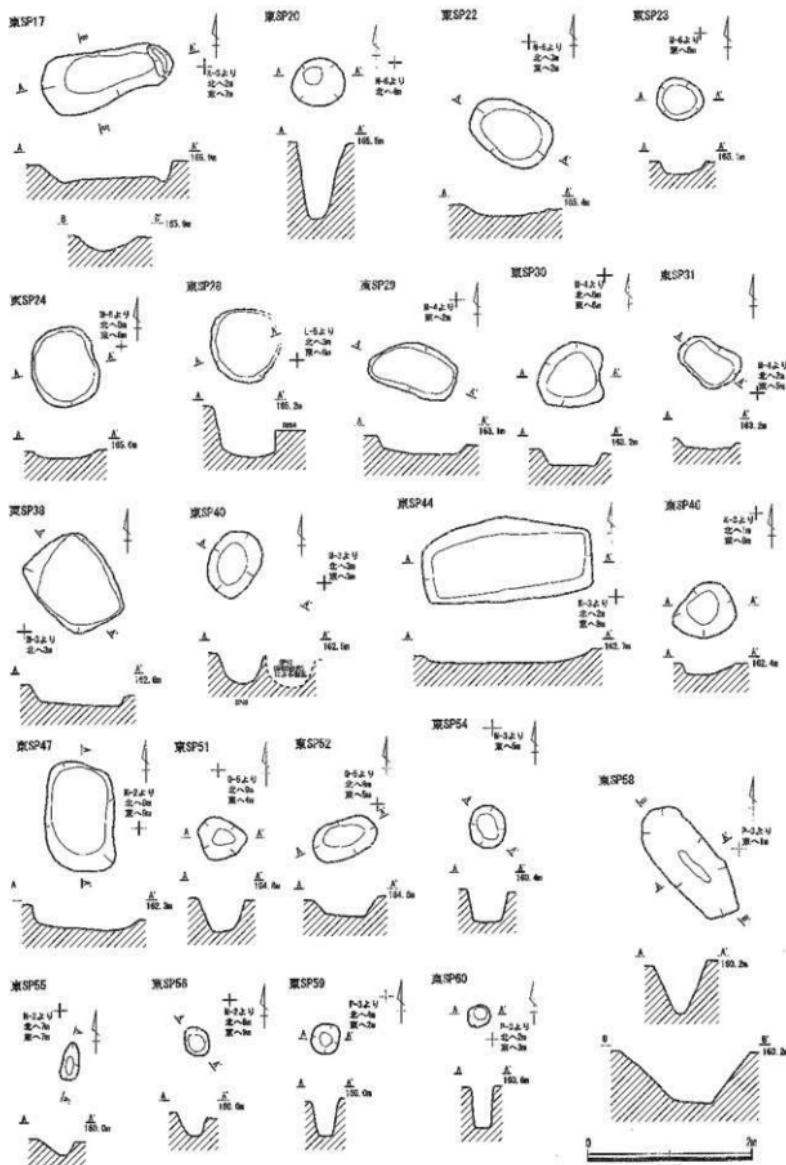
K-2グリッドで検出された長径1.3m、短径0.9mの橢円形で、深さ0.25mの断面が浅いU字状を呈する土坑である。中央尾根部で検出される。出土遺物はない。

東SP51（第55図）

Q-5グリッドで検出された長径0.6m、短径0.5mの不定形で、深さ0.30mの断面が逆台形を呈する小穴である。東尾根部で検出される。出土遺物はない。

東SP52（第55図）

Q-5グリッドで検出された長径0.8m、短径0.5mの橢円形で、深さ0.20mの断面が深い逆台形状を



第55図 小穴・土坑1

呈する土坑である。東尾根部で検出される。出土遺物はない。

東SP54（第55図）

N-2グリッドで検出された長径0.5m、短径0.4mの楕円形で、深さ0.25mの断面が深い逆台形状を呈する小穴である。東谷部で検出される。出土遺物はない。

東SP55（第55図）

N-2グリッドで検出された長径0.5m、短径0.3mの楕円形で、深さ0.20mの断面が深い逆台形状を呈する小穴である。東谷部で検出される。出土遺物はない。

東SP56（第55図）

N-2グリッドで検出された長径0.4m、短径0.3mの円形で、深さ0.25mの断面がU字状を呈する小穴である。東谷部で検出される。出土遺物はない。

東SP58（第55図）

P-2グリッドで検出された長径1.7m、短径0.6mの楕円形で、深さ0.50mの断面がV字状を呈する土坑である。東谷部で検出される。出土遺物はない。

東SP59（第55図）

P-3グリッドで検出された直径0.3mの円形で、深さ0.35mの断面が深い筒状を呈する小穴である。東谷部で検出される。出土遺物はない。

東SP60（第55図）

P-3グリッドで検出された直径0.3mの円形で、深さ0.50mの断面が深い筒状を呈する小穴である。東谷部で検出される。出土遺物はない。

東SP61（第56図）

M-4グリッドで検出された長径0.5m、短径0.4mの円形で、深さ0.30mの断面が深い逆台形状を呈する小穴である。中央尾根部で検出される。東SD27に切られる。出土遺物はない。

東SP62（第56図）

M-4グリッドで検出された長径0.7m、短径0.6mの円形で、深さ0.20mの断面が深い逆台形状を呈する小穴である。中央尾根部で検出される。出土遺物はない。

東SP63（第56図）

N-6グリッドで検出された長径0.6m、短径0.5mの楕円形で、深さ0.25mの断面がU字状を呈する小穴である。中央尾根部で検出される。出土遺物はない。

東SP64（第56図）

M-4グリッドで検出された長径2.0m、短径0.8mの楕円形で、深さ0.15mの断面が深いU字状を呈する土坑である。東谷部で検出される。出土遺物はない。

東SP65（第56図）

N-3グリッドで検出された長径0.6m、短径0.4mの楕円形で、深さ0.15mの断面が深いU字状を呈する土坑である。東谷部で検出される。出土遺物はない。

東SP70（第56図）

N-4グリッドで検出された長径0.5m、短径0.4mの楕円形で、深さ0.30mの断面が深いU字状を呈する小穴である。中央尾根部で検出される。出土遺物はない。

東SP71（第56図）

N-2グリッドで検出された長径0.9m、短径0.8mの楕円形で、深さ0.20mの断面が皿状を呈する土坑である。東谷部で検出される。出土遺物はない。

東SP72（第56図）

N-5グリッドで検出された長径0.5m、短径0.3mの不定形で、深さ0.15mの断面が浅い輪形を呈する小穴である。中央尾根部で検出される。出土遺物はない。

東SP74（第56図）

L-2グリッドで検出された長径1.8m、短径1.4mの楕円形で、深さ0.20mの断面が皿状を呈する土坑である。中央尾根部で検出される。出土遺物はない。

東SP75（第56図）

M-5グリッドで検出された長径1.0m、短径0.5mの楕円形で、深さ0.20mの断面がU字状を呈する土坑である。中央尾根部で検出される。東SD28に切られる。出土遺物はない。

東SP96（第56図）

L-6グリッドで検出された長径0.6m、短径0.2mの圓丸方形で、深さ0.30mの断面がU字状を呈する土坑である。中央尾根部で検出される。SB04を切る。出土遺物はない。

東SP100（第56図）

R-6グリッドで検出された長径1.5m、短径2.1mの不定形で、深さ0.35mの断面が皿状を呈する土坑である。北側が調査区外のため全形は不明である。東尾根部で検出される。出土遺物はない。

西SP38（第56図）

H-6グリッドで検出された長径0.8m、短径0.6mの楕円形で、深さ0.10mの断面が浅い皿状を呈する土坑である。中央尾根部で検出される。出土遺物はない。

西SP39（第56図）

H-6グリッドで検出された長径1.0m、短径1.0mの圓丸方形で、深さ0.15mの断面が浅い皿状を呈する土坑である。中央尾根部で検出される。出土遺物はない。

西SP41（第56図）

I-5グリッドで検出された長径0.4m、短径0.3mの円形で、深さ0.15mの断面が浅い箱型を呈する小穴である。中央尾根部で検出される。出土遺物はない。

西SP42（第56図）

I-5グリッドで検出された長径0.4m、短径0.3mの楕円形で、深さ0.13mの断面が浅い皿状を呈する小穴である。中央尾根部で検出される。出土遺物はない。

西SP43（第56図）

I-5グリッドで検出された長径0.6m、短径0.5mの楕円形で、深さ0.30mの断面が袋状を呈する小穴である。中央尾根部で検出される。出土遺物はない。

西SP44（第56図）

I-4グリッドで検出された長径1.1m、短径0.6mの不定形で、深さ0.10mの断面が皿状を呈する土坑である。中央尾根部で検出される。出土遺物はない。

西SP45（第56図）

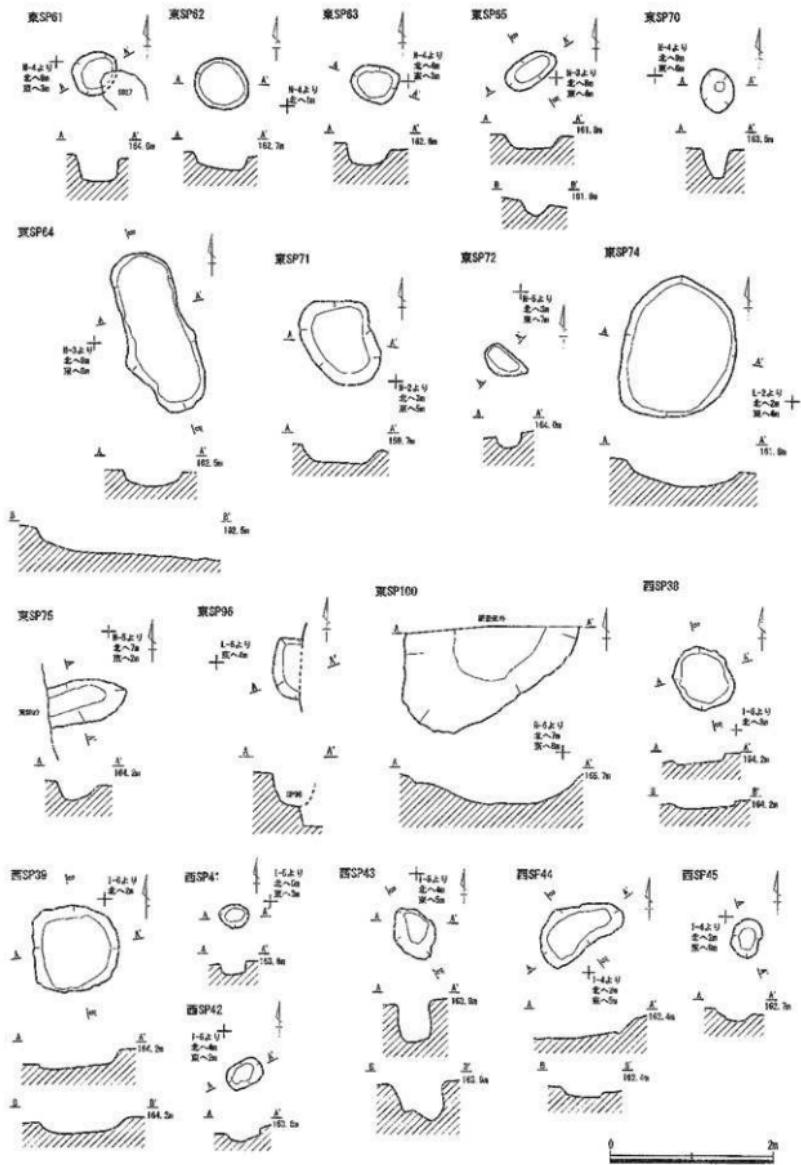
I-4グリッドで検出された長径0.5m、短径0.4mの楕円形で、深さ0.25mの断面が皿状を呈する小穴である。中央尾根部で検出される。出土遺物はない。

西SP46（第56図）

I-4グリッドで検出された長径0.5m、短径0.4mの円形で、深さ0.20mの断面が深いU字状を呈する小穴である。中央尾根部で検出される。出土遺物はない。

西SP47（第56図）

J-4グリッドで検出された長径0.7m、短径0.5mの楕円形で、深さ0.40mの断面が逆台形状を呈する



第56圖 小穴・土坑2

小穴である。中央尾根部で検出される。出土遺物はない。

西SP49 (第56図)

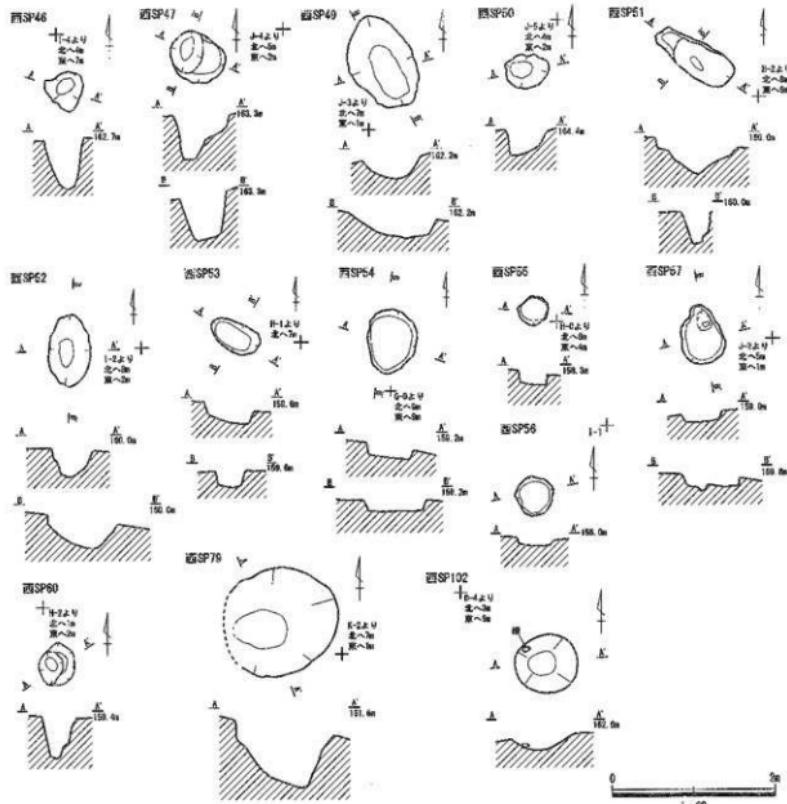
J-3グリッドで検出された長径0.9m、短径0.7mの椭円形で、深さ0.30mの断面が浅いU字状を呈する土坑である。中央尾根部で検出される。出土遺物はない。

西SP50 (第56図)

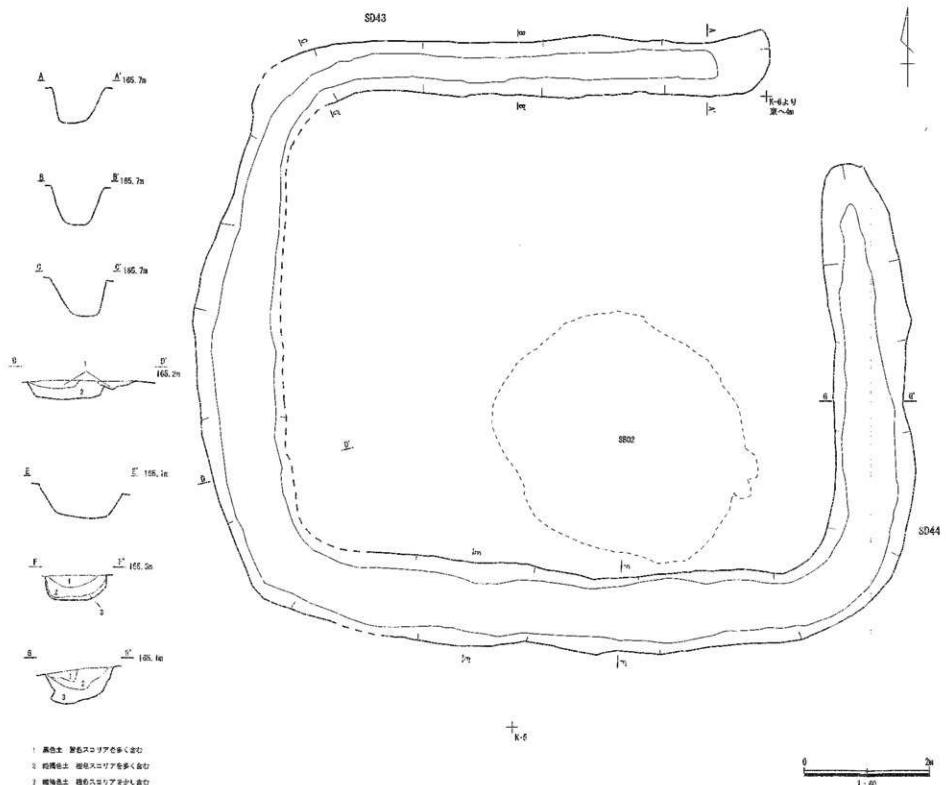
J-5グリッドで検出された直径0.4mの円形で、深さ0.15mの断面が逆台形状を呈する小穴である。中央尾根部で検出される。土器片が2点出土している。

西SP51 (第56図)

H-2グリッドで検出された長径1.1m、短径0.4mの椭円形で、深さ0.30mの断面が浅いV字状を呈する土坑である。中央谷部で検出される。出土遺物はない。



第57図 小穴・土坑3



第58図 1号方形周溝墓

西SP52（第56図）

I-2グリッドで検出された長径0.9m、短径0.5mの楕円形で、深さ0.30mの断面がU字状を呈する土坑である。中央谷部で検出される。出土遺物はない。

西SP53（第56図）

G-1グリッドで検出された長径0.6m、短径0.4mの楕円形で、深さ0.20mの断面が箱型状を呈する柱穴である。中央谷部で検出される。出土遺物はない。

西SP54（第56図）

G-0グリッドで検出された長径0.7m、短径0.6mの楕円形で、深さ0.15mの断面が浅い逆台形状を呈する土坑である。中央谷部で検出される。出土遺物はない。

西SP55（第56図）

H-0グリッドで検出された直径0.4mの円形で、深さ0.10mの断面が浅い箱状を呈する柱穴である。中央谷部で検出される。出土遺物はない。

第7表 第3層 小穴・土坑(SP)計測表

No.	造構名	地盤	アプローチ ツ (m)	高さ (m)	幅員 (m)	深入 (m)	平面形状	切り合ひ回数	測量時刻	備考
1.	西SP17	東	K-6	1.6	0.8	0.35	楕円形		午後8時45分～古墳前中期初頭	
2.	西SP20	東	M-6	0.6	1.00		円形		午後8時45分～古墳前中期初頭	
3.	西SP23	東	N-6	1	0.7	0.15	楕円形		午後8時45分～古墳前中期初頭	
4.	西SP25	東	M-5	0.5	0.5	0.20	円形		午後8時45分～古墳前中期初頭	
5.	西SP26	東	M-5	1	0.8	0.05	扇丸三方形		午後8時45分～古墳前中期初頭	
6.	西SP28	東	L-6 (1)	0.6	0.40	扇丸三方形		S304を切る	午後8時45分～古墳前中期初頭	
7.	西SP29	東	M-2	1.1	0.7	0.20	楕円形		午後8時45分～古墳前中期初頭	
8.	西SP30	東	M-6	0.8	0.6	0.20	楕円形		午後8時45分～古墳前中期初頭	
9.	西SP31	東	M-6	0.2	0.5	0.15	楕円形	SD26に切られる	午後8時45分～古墳前中期初頭	
10.	西SP38	東	M-3	1.2	0.9	0.20	扇丸三方形		午後8時45分～古墳前中期初頭	
11.	東SP40	東	M-3	0.7	0.5	0.40	楕円形		午後8時45分～古墳前中期初頭	
12.	東SP44	東	K-3	2.1	1	0.15	扇丸三方形		午後8時45分～古墳前中期初頭	
13.	東SP46	東	K-5	0.8	0.8	0.10	楕円形		午後8時45分～古墳前中期初頭	
14.	東SP47	東	K-2	1.3	0.9	0.25	扇丸三方形		午後8時45分～古墳前中期初頭	
15.	東SP51	東	Q-6	0.6	0.6	0.50	不定形		午後8時45分～古墳前中期初頭	
16.	東SP52	東	Q-5	0.5	0.6	0.20	楕円形		午後8時45分～古墳前中期初頭	
17.	東SP54	東	N-2	0.5	1.4	0.20	楕円形		午後8時45分～古墳前中期初頭	
18.	東SP55	東	N-2	0.5	0.9	0.20	楕円形		午後8時45分～古墳前中期初頭	
19.	東SP56	東	N-2	0.4	0.8	0.25	楕円形		午後8時45分～古墳前中期初頭	
20.	東SP58	東	P-2	1.7	0.6	0.50	楕円形		午後8時45分～古墳前中期初頭	
21.	東SP59	東	P-3	0.3	0.8	0.28	円形		午後8時45分～古墳前中期初頭	
22.	東SP60	東	P-3	0.2	0.8	0.05	円形		午後8時45分～古墳前中期初頭	
23.	東SP61	東	M-4	0.5	2.4	0.30	円形	SD27に切られる	午後8時45分～古墳前中期初頭	
24.	東SP62	東	M-4	0.7	0.8	0.20	楕円形		午後8時45分～古墳前中期初頭	
25.	東SP63	東	M-4	0.6	0.5	0.25	円形		午後8時45分～古墳前中期初頭	
26.	東SP64	東	M-3	2	0.8	0.15	楕円形		午後8時45分～古墳前中期初頭	
27.	東SP65	東	N-3	0.6	0.4	0.15	楕円形		午後8時45分～古墳前中期初頭	
28.	東SP70	東	N-4	0.5	0.4	0.20	楕円形		午後8時45分～古墳前中期初頭	
29.	東SP71	東	N-6 (0.9)	0.6	0.20	楕円形		午後8時45分～古墳前中期初頭		
30.	東SP72	東	N-5	0.5	0.3	0.15	不定形		午後8時45分～古墳前中期初頭	
31.	東SP74	東	L-2	1.8	1.4	0.20	楕円形		午後8時45分～古墳前中期初頭	
32.	東SP75	東	M-5 (1)	0.5	0.20	楕円形	SD28に切られる	午後8時45分～古墳前中期初頭		
33.	東SP95	東	L-6 (0.6) (2)	0.30	扇丸三方形	SB04を切る		午後8時45分～古墳前中期初頭		
34.	東SP100	東	R-6 (1.5)	2.1	0.35	扇丸三方形?		午後8時45分～古墳前中期初頭		
35.	西SP88	西	H-6	0.8	0.6	0.10	楕円形		午後8時45分～古墳前中期初頭	
36.	西SP89	西	H-6	1	0.5	0.15	扇丸三方形		午後8時45分～古墳前中期初頭	
37.	西SP91	西	I-5	0.4	0.5	0.15	円形		午後8時45分～古墳前中期初頭	
38.	西SP92	西	I-5	0.4	0.8	0.13	楕円形		午後8時45分～古墳前中期初頭	
39.	西SP93	西	I-5	0.6	0.5	0.20	楕円形		午後8時45分～古墳前中期初頭	
40.	西SP94	西	I-4	1.1	0.6	0.10	不定形		午後8時45分～古墳前中期初頭	
41.	西SP95	西	I-4	0.5	0.1	0.25	楕円形		午後8時45分～古墳前中期初頭	
42.	西SP96	西	I-4	0.5	0.4	0.20	円形		午後8時45分～古墳前中期初頭	
43.	西SP97	西	J-4	0.7	0.5	0.40	楕円形		午後8時45分～古墳前中期初頭	
44.	西SP98	西	J-5	0.5	0.7	0.29	楕円形		午後8時45分～古墳前中期初頭	
45.	西SP99	西	J-5	0.4	0.4	0.15	円形		午後8時45分～古墳前中期初頭	
46.	西SP101	西	H-2	1.1	0.4	0.20	楕円形		午後8時45分～古墳前中期初頭	
47.	西SP102	西	I-2	0.9	0.6	0.30	楕円形		午後8時45分～古墳前中期初頭	
48.	西SP103	西	C-1	0.6	0.6	0.15	楕円形		午後8時45分～古墳前中期初頭	
49.	西SP104	西	G-0	0.7	0.6	0.15	楕円形		午後8時45分～古墳前中期初頭	
50.	西SP106	西	H-0	0.4	0.4	0.10	円形		午後8時45分～古墳前中期初頭	
51.	西SP108	西	H-6	0.6	0.4	0.10	円形		午後8時45分～古墳前中期初頭	
52.	西SP107	西	I-2	0.8	0.5	0.15	楕円形		午後8時45分～古墳前中期初頭	
53.	西SP109	西	I-2	0.2	0.5	0.15	楕円形		午後8時45分～古墳前中期初頭	
54.	西SP110	西	H-0 (1.5)	1.5	0.60			午後8時45分～古墳前中期初頭		
55.	西SP102	西	D-4	0.8	0.7	0.18	円形		午後8時45分～古墳前中期初頭	

西SP56（第56図）

H-1グリッドで検出された長径0.5m、短径0.4mの円形で、深さ0.10mの断面が浅い皿状を呈する柱穴である。中央谷部で検出される。出土遺物はない。

西SP57（第56図）

I-2グリッドで検出された長径0.6m、短径0.5mの楕円形で、深さ0.15mの断面が浅い逆台形状を呈する土坑である。中央谷部で検出される。出土遺物はない。

西SP60（第56図）

H-2グリッドで検出された長径0.5m、短径0.4mの楕円形で、深さ0.50mの断面が筒状を呈する柱穴である。中央谷部で検出される。出土遺物はない。

西SP79（第56図）

K-2グリッドで検出された直径1.3mの円形で、深さ0.90mの断面がU字状を呈する土坑である。中央尾根部で検出される。出土遺物はない。

西SP102（第56図）

D-4グリッドで検出された直径0.8mの円形で、深さ0.18mの断面が浅いU字状を呈する土坑である。西側尾根部で検出される。出土遺物はない。

5 方形周溝墓（第58～67図）

1号方形周溝墓（SD43、SD44）（第58・59図）

J-5、J-6、K-5、K-6グリッドで検出された北東隅に陥穀をもつ方形周溝墓である。平面形は、正方形に近い長方形である。方台部は削平されており、主体部及び墳丘の一部と判断できる盛土は確認されなかった。周溝の断面形はU字形または逆台形を呈する。SB03を切り、SB02が方台部内から検出されていることから、これら住居の廃絶後、周溝墓が構築されたものと判断される。溝覆土及び方台部から土器が出土している。

出土遺物（第59図）

50は溝覆土から出土した折り返し口縁壺の口縁部破片である。薄い折り返し部を有し、口唇部の面取りは強いものではない。外面はタテハケ後、タテミガキ、内面はヨコハケ後、ヨコミガキにより調整している。

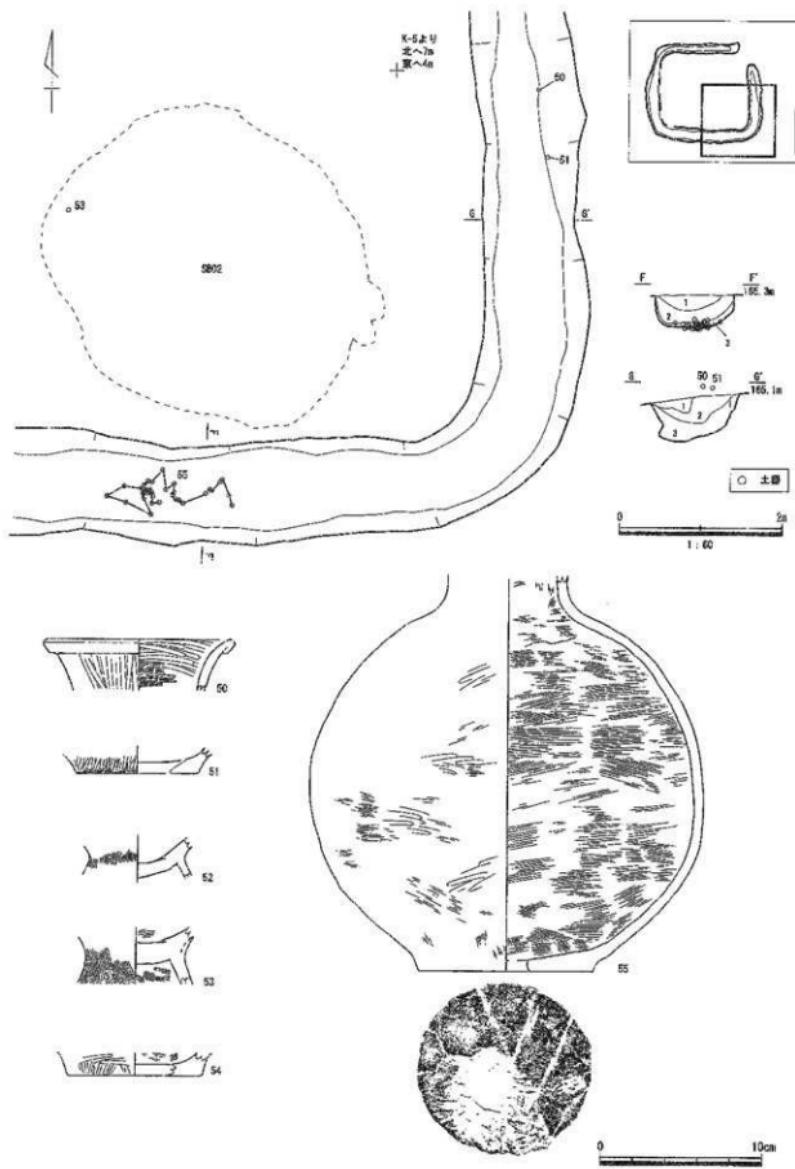
51は溝覆土から出土した壺の底部破片である。底部の外周1/4程度が残存し、底部中央部分は剥離により欠損している。剥離部分の断面形が三角形状となることから、ドーナツ状に底部外周を形成した後、中央に粘土塊を上から充填し底部とした可能性が考えられる。内面は摩耗が著しいが、外面にはタテミガキが確認できる。

52・53は溝覆土から出土した台付壺の台部破片である。小破片であるが、いずれも台部裏面及び底部内面に底部を充填する際にできた段差が認められ、破断面には成形時の接合痕が良好に観察できる。53は外面ハケ、内面ナデ、53は内外面ともにハケ調整される。

54は溝覆土から出土した壺底部破片である。52・56の底部に比べ大きく突出するものである。内面をハケ、外面を丁寧なミガキ調整を行う。

55は溝底部で出土した壺洞部である。部分的に欠損するが、底部から頭部まではほぼ完存している。直立する頸部から屈曲して球形の肩部につながる。やや大きめの底部は中央部からややずれた位置に径4cm程度の焼成後の穿孔が認められる。外面はハケ後ヘラミガキ、内面はハケ調整を行っている。底部には木葉痕が確認できる。

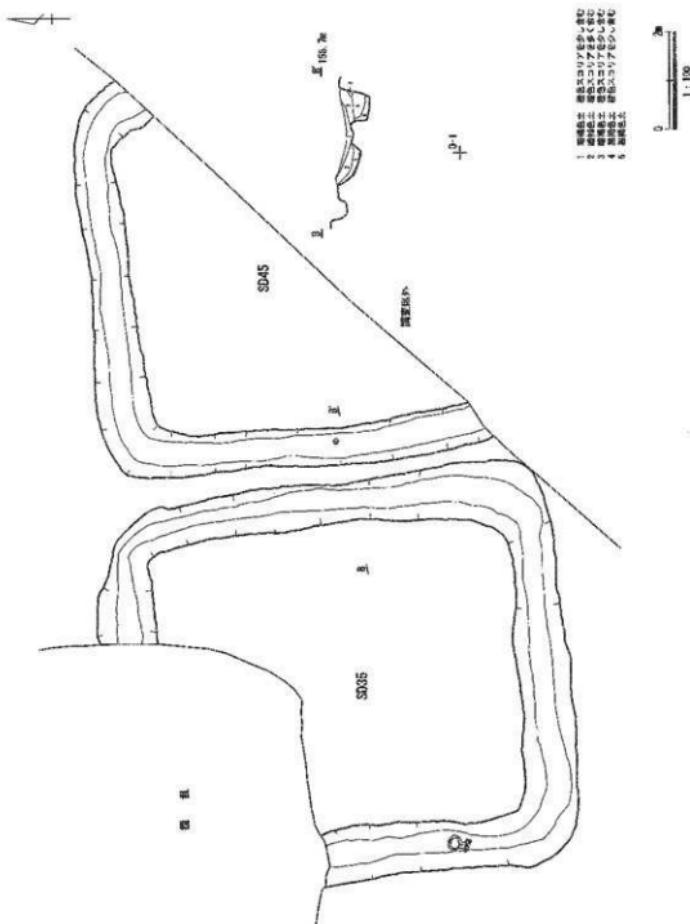
球形の肩部を有する壺にやや新しい要素をみることができることから、おおむね古墳前期初頭の時期と考えておく。



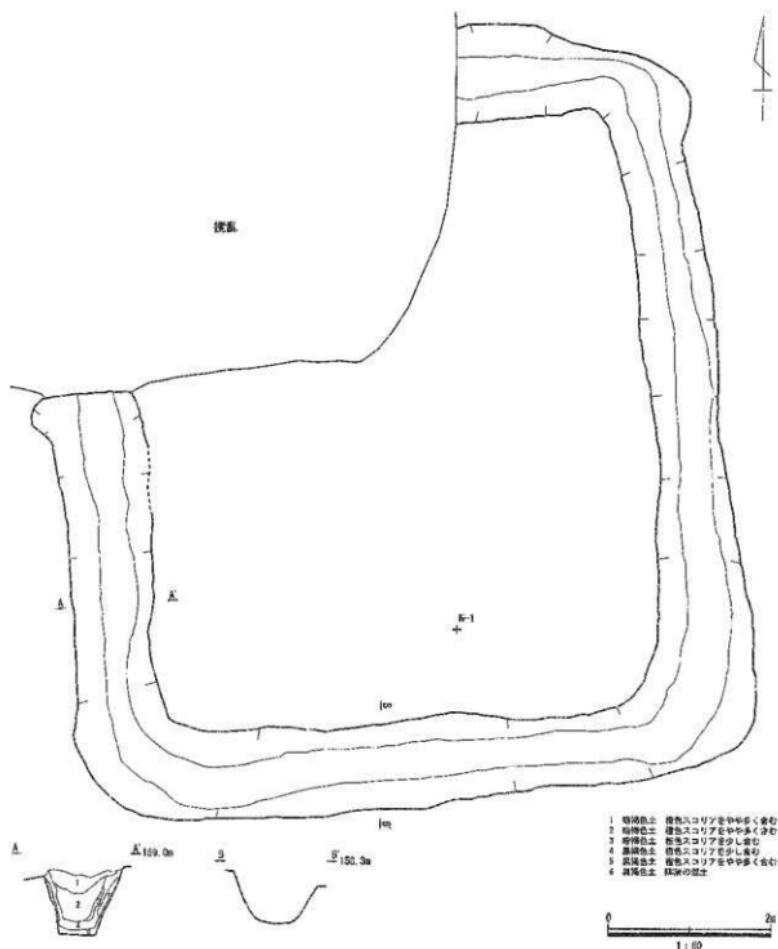
第59圖 1号方形周溝墓 出土土器分布圖・出土土器

2号方形周溝墓（SD35）（第60～63図）

M-0、M-1、N-0、N-1グリッドで検出された方形周溝墓である。3号方形周溝墓に隣接して掘削されている。平面形は、正方形に近い長方形である。方台部は削平されており、主体部及び濠丘の一部と判断できる盛土は確認されなかった。北西部は擾乱により失われており陸橋の有無は不明である。断面形は逆台形及びU字形を呈する。溝覆土及び方台部から土器が出土している。



第60図 2号（SD35）・3号（SD45）方形周溝墓



第61図 2号方形周溝墓

出土遺物（第63図）

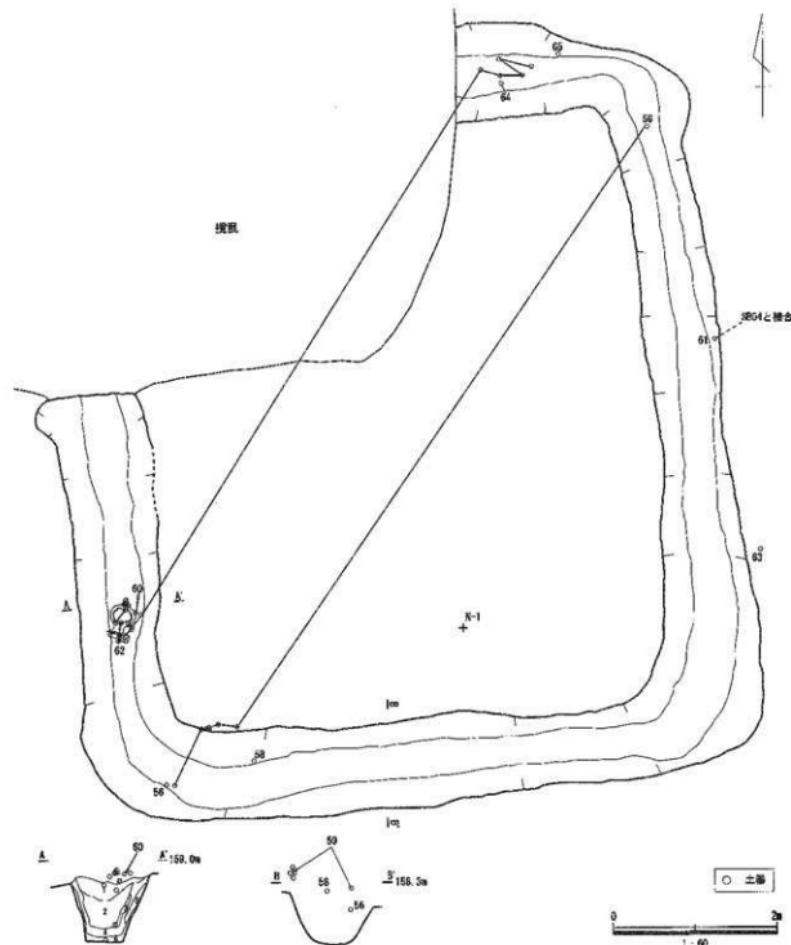
56は溝覆土上位で出土した壺底部破片である。底面から緩やかに開くもので外面をミガキ、内面をハケ調整している。底部には木葉痕が確認できる。外面は全面黒色を呈しており、焼成方法が他と異なっていることが推測される。

57は溝覆土から出土した折り返し口縁壺の口縁部破片である。薄い折り返し部は指頭圧痕が残され、口唇部の面取りも不十分である。内外面にハケが確認できるが、器壁が摩耗しており詳細な観察は困難

である。

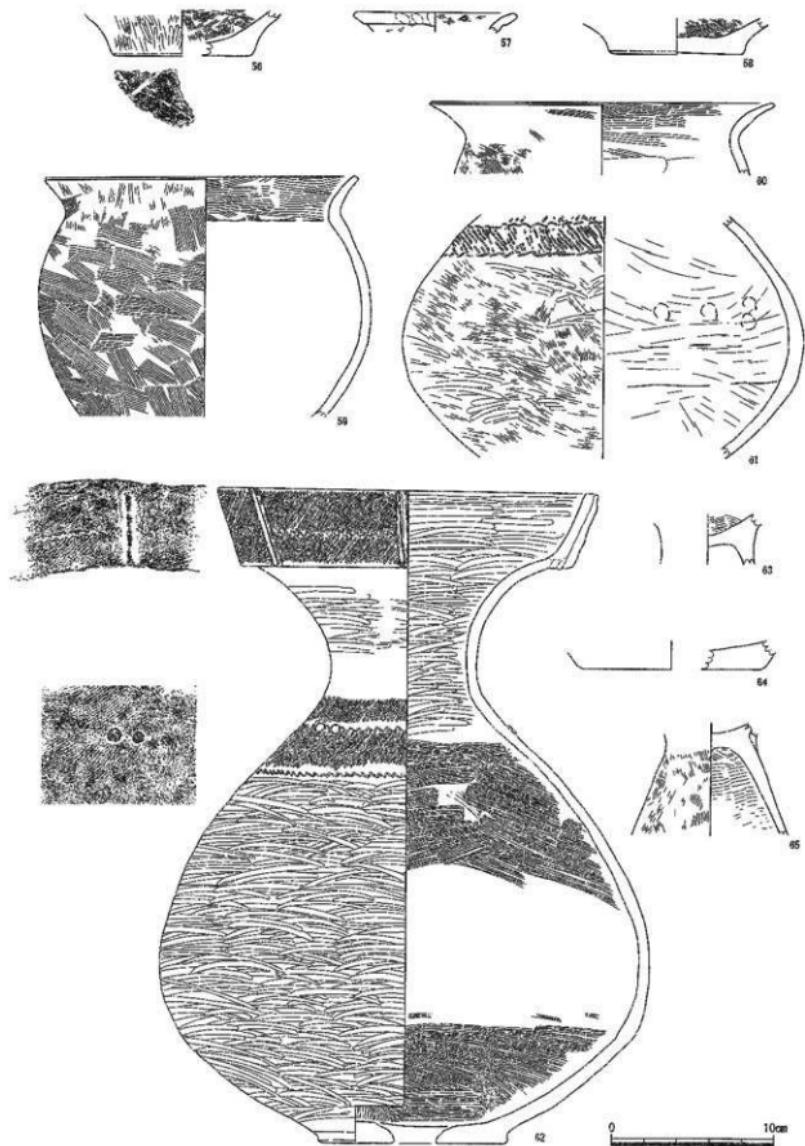
58は溝覆土から出土した壺底部破片である。突出気味の底部から緩やかに開く形態を有する。内面はハケ調整、外面及び底部は摩耗により調整方法は不明である。

59は溝覆土から出土した台付甕の洞部である。一部は方台部に近い部分から出土している。僅かに外反する口縁部を有し、くの字に近く屈曲する頸部から球形に近い胴部につながる。口唇部は面取りされるが、一部の面取りは不十分である。外面はハケ、内面は口縁部をハケ、胴部をナデ調整しているが、



第62図 2号方形周溝窯 出土土器分布図

第2節 第3層（栗色土層）上面検出の遺構・遺物



第63図 2号方形周溝墓 出土土器

口縁部外面のハケは部分的に確認される程度で未調整の面を残している。

60は溝覆土から出土した台付甕の口頸部破片である。僅かに外反する口縁部から緩やかに屈曲する頸部にいたる。口唇部は面取りされる。外面はハケ、内面は口縁部をハケ、頸部以下をナデ調整している。

61は溝覆土から出土した壺の肩部破片である。扁球形の胴部を有し、肩部に結節繩文を施している。外面をハケ後粗いミガキ、内面をナデ調整している。記録上、4号住居床面直上から出土した土器小片と接合したものであるが、遺構間に距離があり正当に評価すべきかどうかは判断しがたい。

62は溝覆土から出土した複合口縁壺である。口縁部及び胴部の一部を欠損する以外はほぼ完存する。やや突出した底部から下彫れの胴部を有し、あまり肩が張らずに緩やかにやや長く頸部に至る形状を持つ。口縁部は頸部から大きく外反し上方に直線的に開く複合部を付加する。口縁部外面及び肩部に結節繩文を施し、口縁部外面には棒状浮文を等間隔に7箇所、肩部には2個1組の円形浮文を4箇所に貼付している。底部中央には焼成後の穿孔が認められる。外面はミガキ、内面は口頸部をミガキ、肩部は中位をナデ、上位、下位はハケ調整している。

63は溝覆土から出土した台付甕の台部破片である。胴部との接合部分の括れに幅があり、やや柱状になっている。摩耗により調整方法の観察は困難であるが、底部内面にはやや粗いハケが確認できる。

64は溝覆土から出土した壺底部破片である。突出が少なく大きく開く胴部につながると考えられる。器壁の摩耗が著しく調整方法は不明である。

65は溝覆土から出土した台付甕の台部破片である。胴部との接合部から直線的に開くやや高い台部を有する。胴部との接合部には括れ部への粘土把の追加や台部形成時の凝口縁状の面が剥離により観察できる。

以上の土器は、62の胴部形態、施文方法が猿生時代の形態を留めていることから猿生後期後半の時期に比定されよう。

3号方形周溝墓（SD45）（第60・64～67図）

N-0、N-1、O-1グリッドで検出された方形周溝墓である。2号方形周溝墓に隣接して掘削されている。南東部は調査区外となっており陸橋の有無は不明である。溝覆土から土器が出土している。

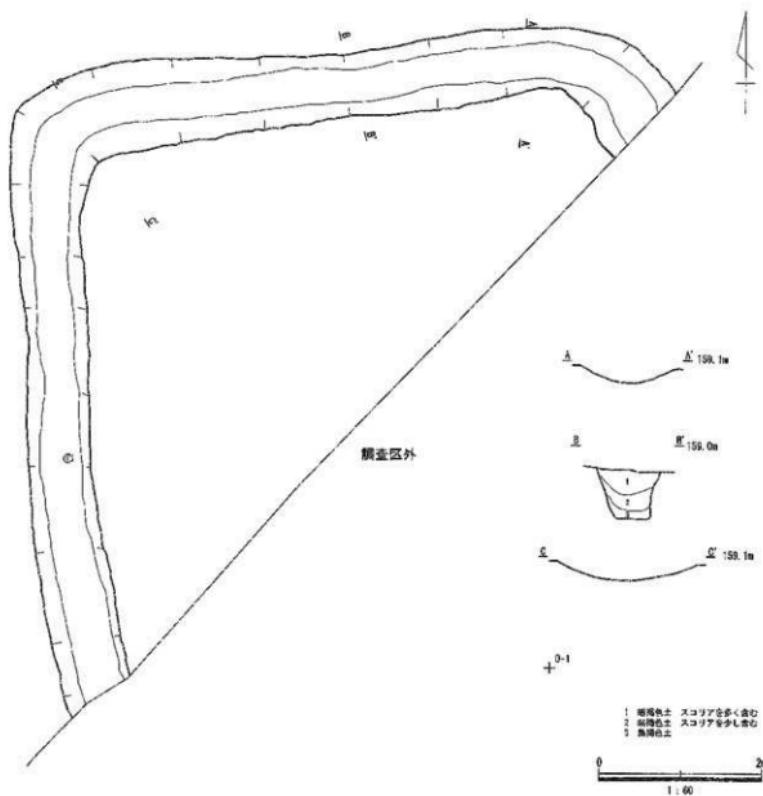
出土遺物（第66・67図）

66は溝覆土から出土した折り返し口縁壺の口頸部破片である。67と同一個体の可能性が高いが、接点がないため、別個に報告する。緩やかに括れる頸部に開きが少ない口縁部を有し、軸狭の折り返し部を貼付している。口唇部の面取りは不十分で折り返し部の貼付の際に加えたと考えられる口縁部外面からの調整により口唇部が凹面状となっている。外面はタテハケ、内面はヨコハケを基調に調整している。

67は溝覆土から出土したやや小型の壺の胴部である。部分的に欠損するが、底部から頸部までの形状を知ることができる。66と同一個体の可能性が高いが、接点がないため、別個に報告する。突出した底部から球形に近い胴部を絶て緩やかに括れる頸部を有するものである。ただし、球形近い底部であるものの、胴部下には外面に弱い稜線が認められる。底部中央付近には焼成後の穿孔が認められる。調整方法は、外面はハケ、内面は胴部をハケ及びナデ、頸部をナデ調整している。なお、ハケ調整の工具は外面がやや粗め、内面は細かいものを用いている。

68は溝覆土から出土した壺の底部破片である。やや突出気味の底部から上方に開く胴部へとつながる。内面は底部と底部下半との間にわずかに段差を持っている。外面はタテハケ後、タテミガキ、内面はナデ調整を行っている。

69は溝覆土から出土した小型壺である。口頸部を欠損する以外は完存している。突出する小さな底部から胴部下に強い稜線を持つもので、下彫れの胴部形態を有し、肩部はほとんど張らず頸部につながるものである。外面はハケ後、肩部付近を中心にヨコナデを加えている。内面はナデ及びハケにより調

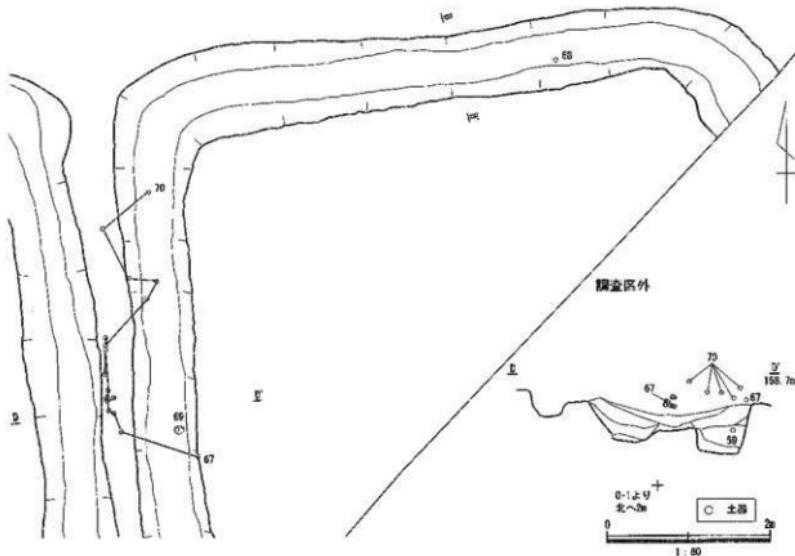


第64図 3号方形周溝墓

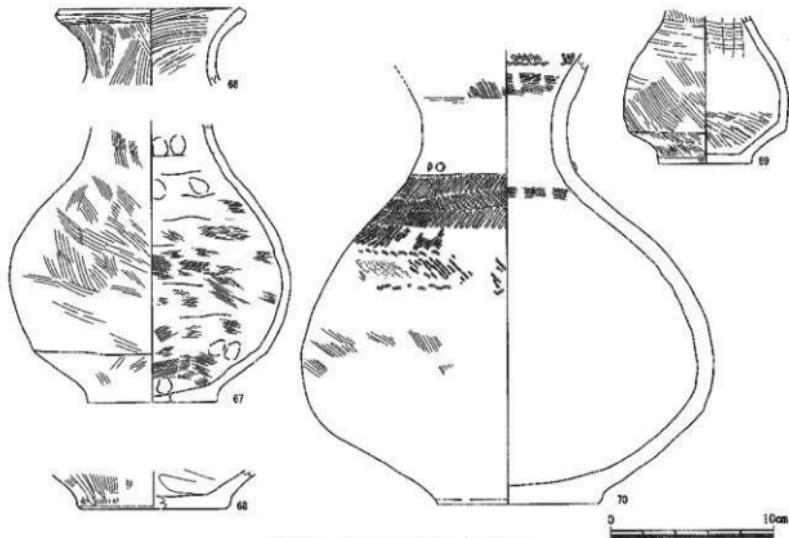
整されている。

70は溝覆土から出土した壺の頸部～底部である。全周の半分程度を欠損しているが、底部から頸部までの形状を知ることができる。やや突出した底部から下膨れの腹部にいたり、肩部がほとんど張らずに緩やかに括れる頸部へつながる。口縁部内面及び肩部に文様が施されている。口縁部内面は結節繩文、肩部には柳状工具による刺突羽状文（3段）の下に結節繩文が認められる。また、羽状文の施文後、上端に同様の工具による1条の横線文を加え、さらにその上に2個1組の円形浮文を貼付している。施文以外の箇所は器壁が摩耗し観察が困難な部分もあるが、口部は外面をタテハケ後、頸部をヨコナデ、肩部はハケ後、最大径以下をヘラミガキ調整している。

71は溝覆土から出土した台付甕の口縁部破片である。緩やかに括れる頸部から外反する口縁部を有する。口唇部は明確な面を持たない。外面はタテハケ、内面は口縁部をヨコハケ、頸部をナデ調整している。



第65図 3号方形周溝窯 出土土器分布図



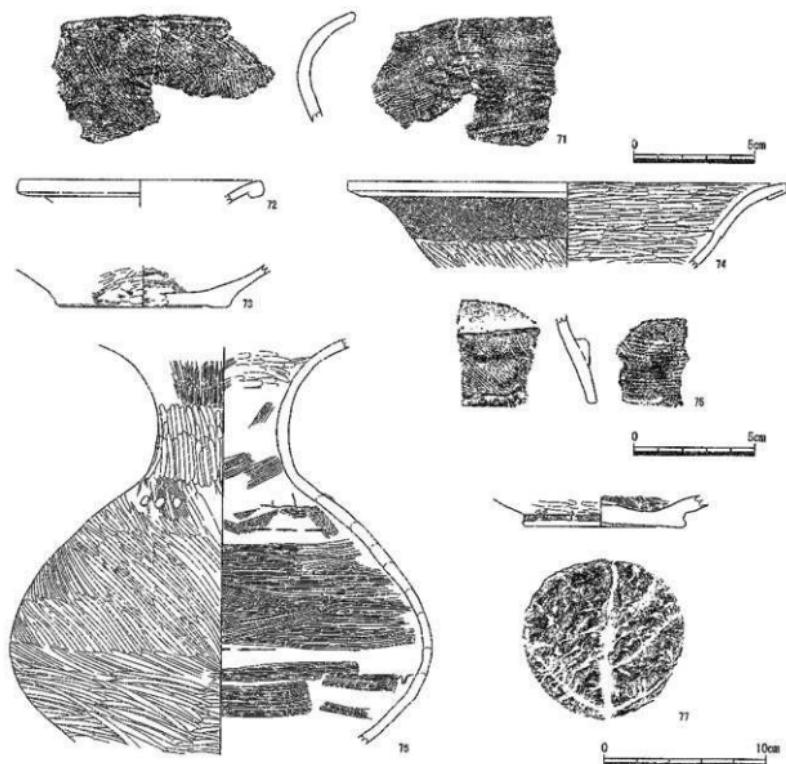
第66図 3号方形周溝窯 出土土器

72は溝覆土から出土した折り返し口縁壺の口縁部破片である。やや薄い折り返し部を貼付し口唇部は摩耗が著しいが無文のようである。内外面とともに器壁が摩耗しており、調整方法の観察は困難である。

73は溝覆土から出土した壺底部破片である。突出した底部から大きく開く胴部へとつながる。底部裏面には輪台状の痕跡が認められる。外面はハケ後ヘラミガキ、内面はハケ調整している。

74は溝覆土から出土した高环の口縁部破片である。内湾気味に聞く坏部に大きく外反する口縁部を付している。口縁部は折り返し口縁とし、口唇部及び口縁部内外面を強いナデにより調整しているため、口唇部には明確な面が形成される。坏部と口縁部の接合部分は内外面に明確な痕跡がみられ、特に外面では口縁部の接合痕を明瞭に残している。調整は、外面がハケ後、坏部だけヘラミガキ、内面がハケ後ヘラミガキ調整している。形状及び調整方法は県西部の菊川式の高环に酷似しており、当該地域との関連で理解すべき土器と考えられる。

75は溝覆土から出土した高环の脚端部破片である。74と同一個体と考えられるものである。図示したものを上下逆転すると複合口縁壺の口縁部破片にも見えるが、壺部だけ摩耗が著しいこと、内面がハケ



第67図 3号方形周溝墓上面 出土土器

調整であること、同一造構内に色調・胎土・調整工具が類似した高环が出土していることから高环脚部と判断した。内湾気味に丸ん張る脚裾部の外面に粘土帯を付加し段を形成している。内面はヨコハケ、外面は段以下を斜めハケ、段以上をヘラミガキ調整している。74と同様、形状及び調整方法は県西部の菊川式の高环に類似しており、当該地域との関連で理解すべき土器と考えられる。

76は溝覆土から出土した壺の頸部～胴部である。口縁部及び底部を欠損するが、頸部～胴部の形状を知ることができる。算盤玉に近い胴中位や下に最大径を持ち、肩部が狭らずに筒状にのびる頸部につながる。口縁部は頸部から大きく外反する形態になるものである。外面はハケ後、口縁部以外をミガキ調整、内面は胴部ハケ、頸部ナデ、口縁部はハケ後ヘラミガキを加えている。なお、肩部外面には3個1組の円形浮文を4箇所に貼付するが、肩部付近はヘラミガキ調整が散漫であることから、円形浮文または文様帶を意識している可能性がある。

77は溝覆土から出土した壺の底部破片である。明確に突出する底部から胴下間に丸みを持つ胴部につながると考えられる。底部外周の粘土のはみ出しあはラ状工具による面取りが行われているようであり、その結果ハケ調整を行った突出部側面は凹面状となっている。一方、底部内面は中央が凸レンズ状となっている。外面はハケ後ヘラミガキ、内面はハケ調整が行われている。

以上の土器は70の胴部形態、施文方法が弥生後期の形態を良好に残していること、菊川式系の高环が弥生後期後半の形態を示していることから、弥生後期後半の時期と考えられる。

第8表 第3層 方形周溝墓 計測表

()は残存値

No.	塗構名	地 区	グリッド	幅 員 (共軸×側面)	底 盤 (共軸×側面)	現丘面測定 (共軸×側面)	主軸方位	底成 形	最大 幅 (m)	最大 深 度 (m)	壁斜率	主体部 間隔	空合 い	堆高時間	備 考
1	1号方形周溝墓	東 K-5・K-6 J-5・J-6	3	11.4×9.8	(8.7)×7.6	N-1°-W	東SD43 東SD44	1.2	0.80	北東部	不明	SB03を 切る	古墳周辺頭		
2	2号方形周溝墓	東 M-0・M-1 N-0・N-1	3	8.5×8.2	7.3×6.7	N-8°-W	東SD56	1.1	0.70	不明	不明		弥生後期後半	北西部遭乱 のため不明	
3	3号方形周溝墓	東 N-0・N-1・O-1	3	(8.0)×8.2 (6.5)×6.6	N-0°-W	東SD46	1	0.60	不明	不明				弥生後期後半	

6 溝(第68・69図)

畠状遺構(第68図)

M-4～M-5・N-4グリッド付近で検出された東SD22、東SD23、東SD25、東SD27、東SD28、東SD30、東SD32の計7基の溝はほぼ2.5～3.0mの等間隔で主軸をN-20～27°-Wに描えることから愛鷹山麓の遺跡で確認されている遺構と同様の畠状遺構と判断した。中央尾根部東側で等高線とほぼ直交して掘削され、溝の幅0.3～0.8m、深さ0.1～0.3m、長さ1.1～13.8mをはかる。直線的に延びるものが多いが、東SD28は北端部が弧状となっている。溝断面形は浅いU字形からV字形を呈する。溝覆土から土器片が若干量出土している(東SD22: 3点、東SD23: 1点、東SD27: 4点、東SD28: 4点、東SD30: 4点)。

東SD20(第69図)

L-0～L-6グリッドで検出された最大幅0.5m、深さ0.20mの断面形が浅いU字形を呈する溝である。中央尾根部東側で等高線とほぼ直交して掘削され、全長6.7mを確認できる。SB04を切る。土器片が6点出土している。

東SD21(第69図)

M-6グリッドで検出された最大幅0.3m、深さ0.10mの断面形が浅いU字形を呈する溝である。中央尾根部東側で等高線とほぼ直交して掘削され、全長1.2mを確認できるが、南端はSB05に切られるため全形は不明である。出土遺物はない。

東SD24(第68図)

M-5グリッドで検出された最大幅0.4m、深さ0.10mの断面形が浅いU字形を呈する溝である。中央

尾根部東側で等高線とほぼ直交して掘削され、全長3.4mを確認できるが、南端は畠状造構（東SD22）に切られるため全形は不明である。SB07を切る。土器片が2点出土している。

出土遺物（第68図）

78は溝覆土から出土した台付甕の口縁部破片である。緩やかに括れる頸部からほぼ直線的に開く口縁部を有する。口唇部は欠損するため形状は不明である。外面は斜めハケ、内面はヨコハケ調整している。

東SD26（第68図）

M-6グリッドで検出された最大幅0.3m、深さ0.05mの断面形が浅いU字形を呈する溝である。中央尾根部東側で等高線とほぼ斜行して掘削され、全長1.8mを確認できるが、西端は東SP31に切られるため全形は不明である。出土遺物はない。

東SD29（第68図）

M-5グリッドで検出された最大幅0.5m、深さ0.15mの断面形が浅いU字形を呈する溝である。中央尾根部東側で等高線とほぼ斜行して掘削され、全長5.9mを確認できる。溝中央部は畠状造構（東SD28）に切られている。土器片が3点出土している。

東SD31（第68図）

N-4グリッドで検出された最大幅0.4m、深さ0.10mの断面形が浅いU字形を呈する溝である。中央谷部で等高線とほぼ直交して掘削され、全長3.3mを確認できるが、北端は削平のため全形は不明である。畠状造構（東SD32）を切る。出土遺物はない。

東SD33（第69図）

N-6グリッドで検出された最大幅0.5m、深さ0.05mの断面形が浅いU字形を呈する溝である。中央尾根部東側で等高線とほぼ平行して掘削され、全長5.0mを確認できるが、北端は調査区外に延びるため全形は不明である。出土遺物はない。

東SD34（第69図）

L-3グリッドで検出された最大幅1.7m、深さ0.70mの断面形が逆台形を呈する不定形な溝である。中央尾根部で等高線とほぼ平行して掘削され、全長2.8mを確認できる。土器片が1点出土している。

東SD39（第68図）

N-5グリッドで検出された最大幅1.2m、深さ0.80mの断面形が深いV字形を呈する不定形な溝である。中央尾根部東側で等高線とほぼ平行して掘削され、全長1.3mを確認できる。出土遺物はない。

東SD40（第69図）

P-3グリッドで検出された最大幅0.2m、深さ0.15mの断面形が浅いV字形を呈する溝である。東谷部で等高線とほぼ直交して掘削され、全長0.8mを確認できる。出土遺物はない。

東SD41（第69図）

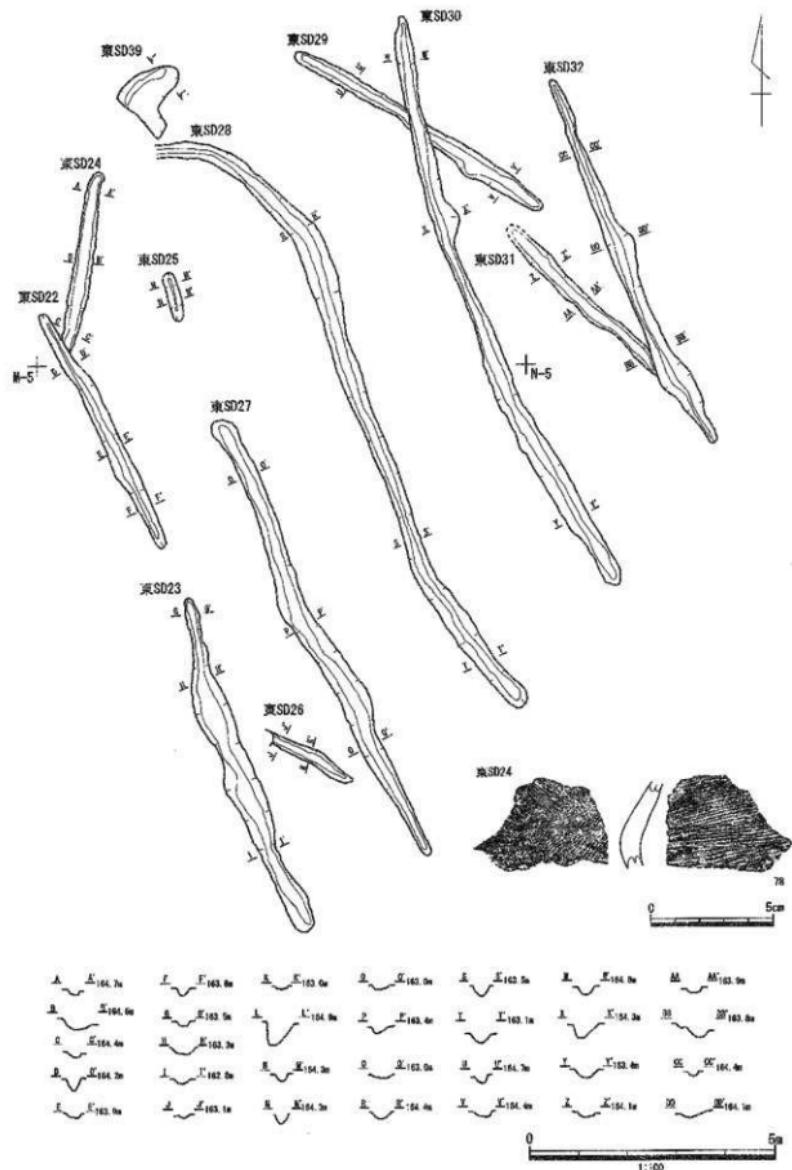
O-3グリッドで検出された最大幅0.5m、深さ0.25mの断面形が浅いV字形～逆台形を呈する溝である。中央谷部で等高線とほぼ直交して掘削され、全長1.3mを確認できる。北端に焼土が見られる。出土遺物はない。

東SD42（第69図）

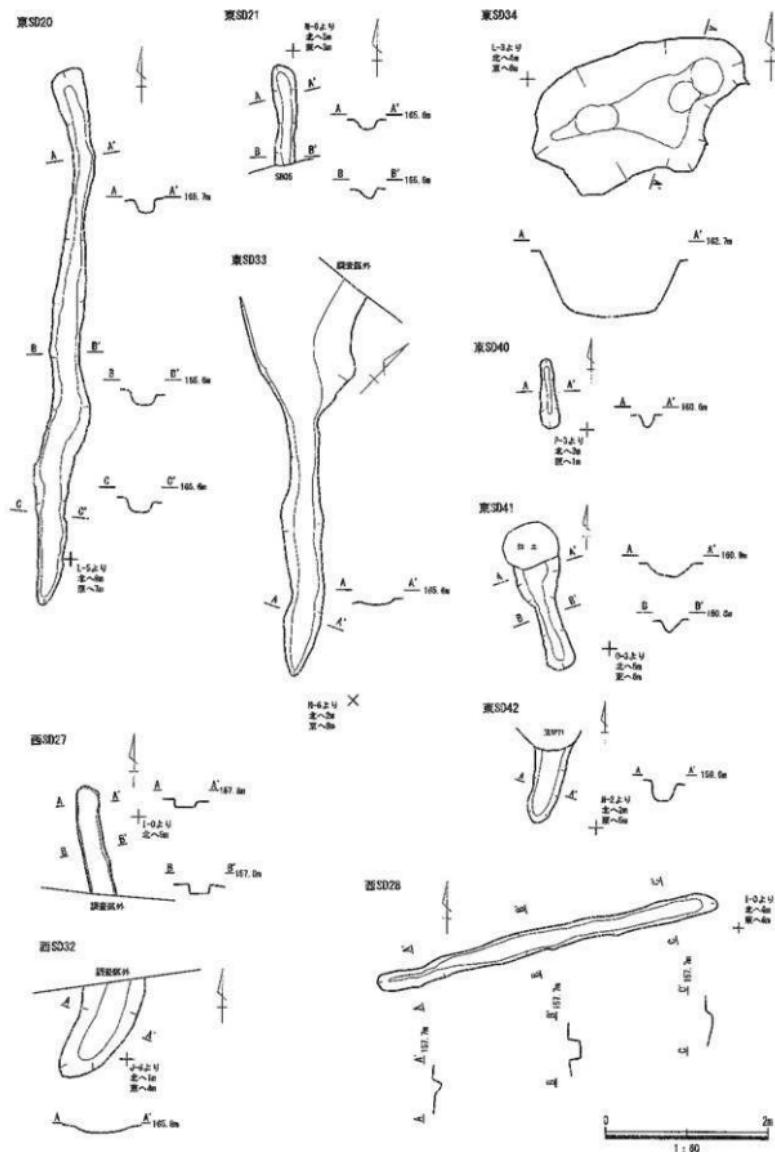
N-2グリッドで検出された最大幅0.3m、深さ0.20mの断面形が浅いV字形を呈する溝である。東谷部で等高線とほぼ斜行して掘削され、全長1.1mを確認できるが、北側は東SP71とつながる。出土遺物はない。

西SD27（第69図）

H-0グリッドで検出された最大幅0.3m、深さ0.15mの断面形が浅い箱形を呈する溝である。中央谷部で等高線とほぼ直交して掘削され、全長1.4mを確認できるが、南端は調査区外に延びるため全形は不



第63圖 煙狀遺構



第69図 東SD20・東SD21・東SD33・東SD34・東SD40～東SD42・西SD27・西SD28・西SD32

明である。出土遺物はない。

西SD28（第69図）

I-0グリッドで検出された最大幅0.3m、深さ0.15mの断面が浅いV字形～箱型を呈する溝である。中央谷部で等高線とほぼ斜交して掘削され、全長4.3mを確認できる。出土遺物はない。

西SD32（第69図）

J-6グリッドで検出された最大幅0.7m、深さ0.08mの断面形が浅い皿状を呈する溝である。中央尾根部で等高線とほぼ直交して掘削され、全长1.3mを確認できるが、北端は調査区外のため全形は不明である。出土遺物はない。

第9表 第3層 溝（SD）計測表

() は残存部

No.	遺構名	地区	グリッド	全長 (m)	最大幅 (m)	最大深 (m)	主軸方位	平面形態	切り合ひ関係	縦横比
1	焼け透溝 (東SD22)	東	M-6 M-5	5.6	0.5	0.25	N-27°-W	直線状		弥生後期末～古墳前期初頭
2	烟状透溝 (東SD23)	東	M-3 M-4	7.4	0.8	0.15	N-20°-W	直線状		弥生後期末～古墳前期初頭
3	烟状透溝 (東SD25)	東	M-5	1.1	0.3	0.30	N-17°-W	直線状		弥生後期末～古墳前期初頭
4	烟状透溝 (東SD27)	東	M-4	9.9	0.7	0.10	N-26°-W	直線状～弧状	東SP61を切る	弥生後期末～古墳前期初頭
5	烟状透溝 (東SD28)	東	M-6 M-5	13.8	0.5	0.25	N-30°-W	直線状	SB07・東SP76を切る	弥生後期末～古墳前期初頭
6	烟状透溝 (東SD30)	東	M-6 M-5	12.3	0.5	0.50	N-22°-W	直線状	東SD29を切る	弥生後期末～古墳前期初頭
7	烟状透溝 (東SD32)	東	N-4 N-5	8	0.6	0.10	N-24°-W	直線状	東SD31を切る	弥生後期末～古墳前期初頭
8	東SD29	東	L-5 L-6	6.7	0.5	0.20	N-3°-E	直線状	SB04を切る	弥生後期後半～古墳前期初頭
9	東SD21	東	M-6	(1.2)	0.3	0.10	N-2°-W	直線状	SB05に切られる	弥生後期後半～古墳前期初頭
10	東SD24	東	M-6	3.4	0.4	0.10	N-12°-E	直線状	SB07を切る 東SD22に切られる	弥生後期後半～古墳前期初頭
11	東SD26	東	M-4	(1.8)	0.3	0.05	N-61°-W	直線状	東SP31を切る	弥生後期後半～古墳前期初頭
12	東SD29	東	M-5	5.9	0.5	0.15	N-57°-W	直線状	東SD30に切られる	弥生後期後半
13	東SD31	東	N-4	(3.3)	0.4	0.10	N-46°-W	直線状	東SD32に切られる	弥生後期後半
14	東SD33	東	N-6	(6)	0.5	0.05	N-42°-W	直線状	SB06を切る	弥生後期後半～古墳前期初頭
15	東SD34	東	L-3	2.6	1.7	0.70	N-63°-E	不定形		弥生後期後半～古墳前期初頭
16	東SD39	東	N-5	1.3	1.2	0.80	N-54°-E	不定形		弥生後期後半～古墳前期初頭
17	東SD40	東	P-3	0.8	0.2	0.15	N-5°-W	直線状		弥生後期後半～古墳前期初頭
18	東SD41	東	O-3	(1.3)	0.5	0.25	N-19°-W	直線状		弥生後期後半～古墳前期初頭
19	東SD42	東	N-2	(1.1)	0.3	0.20	N-10°-E	不定形		弥生後期後半～古墳前期初頭
22	西SD27	西	H-0	(1.4)	0.5	0.15	N-14°-W	直線状		弥生後期後半～古墳前期初頭
23	西SD28	西	I-0	4.3	0.3	0.15	N-75°-E	直線状		弥生後期後半～古墳前期初頭
24	西SD32	東道路	J-6	(1.3)	0.7	0.08	N-29°-E	直線状		弥生後期後半～古墳前期初頭

第3節 遺構外の出土遺物

土器（第70図）

79は第3層から出土した折り返し口縁壺の口頸部破片である。緩やかに屈曲する頸部から直線的に開く口縁部を有するものである。口縁部外面に粘土帯を付加し、折り返し口縁とし、口唇部は面取りを行っている。外面をタテハケ、内面をヨコハケ調整している。なお、外面のタテハケ調整は、折り返し部の貼付前に行っていたことが、折り返し部の剥離箇所から観察できる。

80は第3層から出土した折り返し口縁壺の口縁部破片である。大きく開く口縁部外面に粘土帯を付加し折り返し口縁としている。口唇部は丁寧な面取りを行い、折り返し部裏面には貼付の際の指頭圧痕が顕著に認められる。外面はタテミガキ、内面はヨコハケ後ヨコミガキ調整している。

81は第2層から出土した単純口縁壺の口縁部破片である。内湾気味に開く口縁部を有し、口唇部は面取りを行い、上外方に面を向ける。口唇部直下に2個1組の円孔を穿っている。円孔は穿孔面に螺旋状の鋭い線条痕が観察できることから、焼成後に穿たれた可能性も考えられるが、器壁の摩耗が著しく断定するには至らない。

82は壺の頸部破片である。肩が張らない肩部から緩やかに屈曲する頸部につながる。外面はヘラミガキ、内面は痕痕状に器壁が荒れており調整方法は観察困難である。肩部外面に3個1組の円形浮文を貼付している。

83は第2層から出土した壺の胴部破片である。破片中ほどに接合痕と考えられる膨らみが確認できることから、胴部下半の破片と判断した。球形に近い胴部形態になると推測される。外面はハケ後、タテミガキ、内面はナデ後、下半をヨコハケ調整している。

84は第2層から出土した壺の底部破片である。突出した底部の破片で、破断面の観察から円盤状の底部を作成後、その上縁から胴部下半の成形を開始したことが確認できる。その際、底部内面に粘土を薄く貼り足し胴部成形の補助としていることがうかがえる。器壁の摩耗が著しく調整方法は不明である。

85は壺の底部破片である。やや突出した底部破片で内面は緩やかに湾曲し胴部下半につながる。摩耗が著しく調整方法は不明である。

86は第1層から出土した壺の底部破片である。やや突出した底部から上外方に開く胴部下半につながる。底部縁辺にはわずかに粘土のはみ出しが認められる。外面はタテハケ、内面はヨコハケ調整しているが、外面は部分的にナデまたはミガキ調整を加えている可能性がある。

87は壺の底部破片である。やや突出した薄い底部から上外方に開く胴部下半につながる。内面は胴部下半につながる立ち上がり付近がわずかに窪み、指頭圧痕状の痕跡が確認できる。これは、胴部下半成形の際の痕跡と考えられる。また、底部外面の縁辺部には粘土のはみ出しが認められる。外面は摩耗により調整方法は不明、内面はヨコハケ調整している。

88は壺の底部破片である。突出が少ない薄い底部を有する。底部外面の縁辺部には粘土のはみ出しが認められる。底部内面は平坦部分が多く、胴部下半へつながる立ち上がり付近からやや急に立ち上がっている。外面はハケ後ヘラミガキ、内面は板ナデが確認できる。

89は壺の底部破片である。突出した底部から上外方に開く胴部下半につながる。外面は底部縁辺付近まで及ぶ丁寧なヨコミガキが確認できる。内面はナデ調整を行う。

90は突出しない底部から内湾気味に開く胴部へつながる底部破片である。外面は斜め方向のヘラミガキ、内面はヨコハケ後、部分的にナデによりハケが消されている。やや小型の壺の底部と考えられる。

91は確認調査TP10の擾乱から出土した球形に近い胴部形態を有すると考えられる壺の胴部下半～底部である。突出する底部から湾曲する胴部下半につながる。外面は底部付近を未調整とし、胴部下半をヨ

コミガキ調整（一部タテミガキ）する。内面は板ナデ調整により平滑に調整されている。

92は第2層から出土した台付壺の口縁部破片である。口唇部に明確な面を持つ単鶴口縁を有し、キザミは施さない。内外面ともに器壁の摩耗が著しく調整方法は不明である。

93は第2層から出土した台付壺の台部破片である。ほぼ直線的に聞く台部で端部は強い面取りを行い、内面に粘土のはみ出しが認められる。外面はやや細かいハケで羽状に、内面はやや粗いハケで横位に調整している。

94は確認調査TP10の搅乱から出土した台付壺の台部破片である。八字形に聞く台部で、外面をやや細かいタテハケ、内面をやや粗いヨコハケによって調整している。

95は台付壺の台部破片である。胴部との接合部分は全周残存している。他の台付壺よりもやや厚手に作られており、台部外面はタテハケ、内面はやや粗いヨコハケを施している。底部内面はナデ及び板ナデが確認できる。

96は第2層から出土した台付壺の台部破片である。台括れ部に剥離痕が認められることにより、台部成形後、括れ部に粘土を付加して胴部下半成形を開始していることが確認できる資料である。台部の剥離面にはハケ調整も残されており、台部をハケ調整まで行って整えた後、その上部に胴部下半を成形していくことがうかがえる。台部内外面及び底部内面はハケ調整を行っている。

97は第2層から出土した台付壺の台部破片である。台括れ部の小破片で台部内面にヨコハケが確認できる。外面は廃粧のため調整方法は不明、上面は破断面となっている。

98は直立気味に聞く形態から高环脚部の可能性もあるが、外面をハケ調整することから台付壺の台部破片と判断した。内面は指頭圧痕を残している。底部内面はハケ調整し、括れ部は脚部下半が剥離した状態を残している。

99は台付壺の台部破片である。台部内面に臍状の突出が認められることから、筒状に台部を成形した後、上部を充填して台部としたことが考えられる。台部の上面は土器成形時の面が剥離して表出している状態であり、指頭及びヘラ状工具による刺突により粘土を充填したことがうかがえる。刺突は台部と底部の接着を確実にするための可能性もある。台部内外面ともにハケ調整している。

100は台付壺の口縁部破片である。口唇部を明瞭に面取りする。外面をタテハケ、内面をヨコハケ調整している。

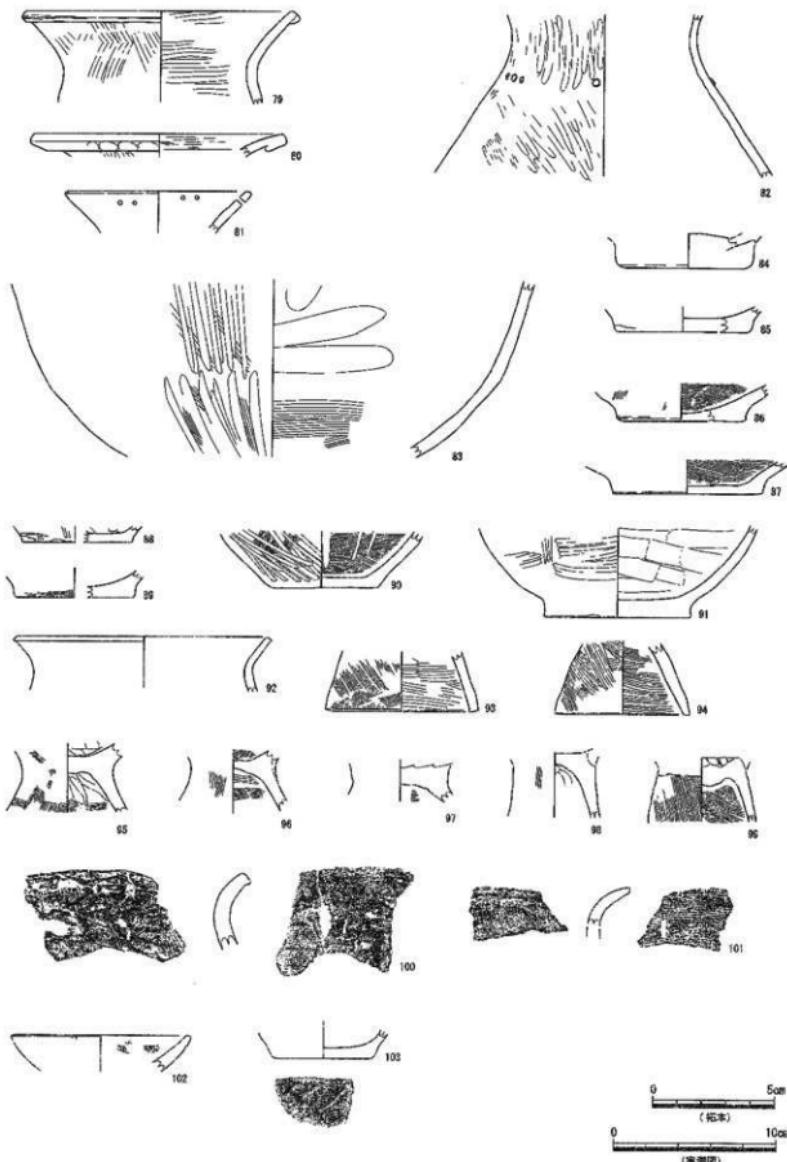
101は第1層から出土した小型の台付壺の口縁部破片である。口唇部はやや尖り気味に取める。外面をタテハケ、内面をヨコハケ調整している。

以上の土器は弥生後期～古墳前期初頭に比定されよう。

102・103はその特徴から古墳時代中期以降の土器の可能性を持つものである。

102は、第1層から出土した内湾気味に聞く口縁部破片である。口唇部に面を持ち、内外面をミガキ調整している。また、内面には赤彩の痕跡が確認できる。破片下端部分が厚く、口縁部に向かって薄くなる形状から壺の口縁部とは考えにくく、古墳時代後期以降の壺または鉢に近い形状、色調・胎土を有している。

103は突出しない底部から上外方に聞く底部破片である。外面はヨコミガキ、内面はナデ調整、底面には木葉痕が確認できる。古墳中期以降の壺または鉢となる可能性がある。



第70図 遺構外 出土土器

第10表 土器觀察表

番 号	古 文 書 登 録 番 号	地 理 的 位 置	敷 上 面 積	高 度 (m)	面 積 (m ²)	基 高 (m)	幅 度 (m)	総 延 長 (m)	幅 度 (m)	延 長 (m)	面 積 (m ²)	面 積 (m ²)	形 態 の特 徴	割 別 性	地 土	植 被	色 調 (緑/黄)	備 考	
17	1	27 85 西SD9-原土	13951	高	3.8	23.2								ナデ・ハケ	石英・白色砂紋	良	よい・青緑色に・よい・黄色		
22	2	27 85 西SD9-原土	6650	高	1.5	15.9							ナデ	石英・白色砂紋・カタセン石	良	黄色・褐色			
3	27	110 亞SPG-原土	13001~12003 U2266	高	8.6	16.0		16.3					ハケ	石英	良	黄色/褐色			
24	4	27 75 S301-原土面上	239 240	高伴	18.2									ヘラミガキ・ハケ	石英	良	黄色/褐色		
28	5	27 85 S301-原土面上	242	高	2.5	12.4							新造?	ナデ(ホ+壁礫)	石英・白色砂紋・カタセン石	良	白色砂紋		
6	6	27 26 S301-原土面上	236	高	1.2				4.6				ハケ	石英・白色砂紋・カタセン石	良	白色砂紋	普通		
28	7	27 19 S301-原土面上・土・土・(原土・草包含)	K3 245 1223	高	7.8	15.2		13.8					ハケ	石英・白色砂紋・カタセン石	良	白色砂紋			
28	8	28 42 S301-原土面上	3484	高	8.9			6.1	12.6					石英・白色砂紋	良	白色/褐色			
31	9	28 22 S301-原土面上	315~2 316~1 317~2	高	26.5		33.0	7.6	8.9	13.5			ヘラミガキ・ハケ	石英・白色砂紋	良	白色/褐色			
31	10	28 23 S301-原土面上	306	高	7.4	不明	15.3		6.7				ハケ	石英	良	白色/褐色			
31	11	7 8 S301-原土面上・原土	3 307 310~312	高	20.0	19.6		22.4	16.1				ハケ	石英	良	白色/褐色			
51	12	18 30 S301-原土面上	318	高	1.4			4.8	6.7				ハケ	石英・白色砂紋	良	白色/褐色			
51	13	18 29 S301-原土面上	319	高	6.5			5.8	9.8				ハケ	石英・白色砂紋	良	白色/褐色			
52	14	29 21 S301-原土面上	314 315~3 316~2	高	12.1	16.1	18.5	15.8					ハケ	石英・白色砂紋	良	白色/褐色			
53	15	29 20 S301-原土面上	308	高	15.0	18.5	18.7	15.5					ハケ	石英	良	白色/褐色			
54	16	29 3 S301-原土面上・原土	6 309 310~3 312~1 319	高	21.2	15.9	19.9	14.5					ハケ	石英	良	白色砂紋			
55	17	29 10 S301-原土面上	310~2	高	14.7	16.3	17.7	10.8					ハケ	白色砂紋	良	白色/褐色			
55	18	29 76 S301-原土面上	220	高	1.1	8.8							ハケ	石英	良	白色砂紋			
55	19	29 83 S301-原土面上	317	高	1.5	17.9							口端部新造?	石・ハケ・高・ナデ	石英・白色砂紋	良	白色砂紋		
55	20	29 20 S301-原土面上	216	高	2.9	12.6	8.5						ハケ	石英・白色砂紋	良	白色砂紋			
56	20	29 20 S301-原土面上	216	高	3.2	15.6							ハケ	石英・白色砂紋	良	白色砂紋			
56	21	30 94 S301-原土面上	262	高	2.5									ハケ	石英・白色砂紋	良	白色砂紋		
56	22	30 2 S301-原土面上	304~2	高	25.4	16.5	25.6	7.9	5.0	12.5			ヘラミガキ・ハケ	石英・白色砂紋	良	白色砂紋			
56	23	30 4 S301-原土面上	303	高	26.4	10.7	22.1	7.1	4.1	10.5			ヘラミガキ・ハケ	石英・白色砂紋	良	白色砂紋			
56	24	31 1 S304-原土面上・原土	338 39 42 44 46 47 48 50 57 283 226~302 304~1~3 322 323~1 256~1 324~1~3 325~1~3	高	21.9	22.6	22.8	18.9						外反するU字型、端部は四つ、側面は斜面	ナデ・表面の斜面は斜めで、大きなものハケ	石英・白色砂紋	良	よい・赤褐色/によい・茶褐色	スス付岩
56	25	31 21 S304-原土	116	高	2.0	13.2							ハケ	石英・白色砂紋	良	よい・青褐色/灰青褐色			
56	26	31 20 S304-原土	94	高	2.9				7.5				ナデ	石英・白色砂紋	良	白色/褐色			
56	27	31 24 S304-原土	61	高	2.6			6.5					ヘラミガキ・ハケ	石英・白色砂紋	良	白色/褐色			
56	28	31 26 S304-原土面上	296	高	2.5			9.4					ハケ	石英・白色砂紋	良	白色/褐色			
56	29	31 51 S304-原土面上	276	高	3.1	10.9							ハケ	石英・白色砂紋	良	白色/褐色			
56	30	31 92 S304-原土面上	294	高	3.0	12.2							ハケ	石英・白色砂紋	良	白色/褐色			
41	31	32 8 S304-原土面上	377	高	13.6	21.4	14.2	9.8					口沿部肥厚する	ヘラミガキ	石英・白色砂紋・カタセン石	良	白色砂紋		
41	32	32 7 S304-原土面上	364	高	17.8								ヘラミガキ・ハケ	石英・白色砂紋	良	白色砂紋			
41	33	32 99 S305-原土	199	高	1.7	16.6							ナデ・ハケ	石英・白色砂紋	良	肉桂褐色/青褐色			
41	34	32 41 S305-原土裏・、脇・土・伊	152~1~111 172 174 175 178 346 362 354 386 461 453 461 465	高	8.3	26.2		18.9					ハケ	石英・白色砂紋	良	青褐色/黒褐色			
41	35	32 18 S305-原土面上	151	高	2.5				8.3					ヘラミガキ・ハケ	石英・白色砂紋	良	白色/によい・青褐色		
41	36	32 18 S305-原土面上	193	高	2.5			5.0					ハケ	石英	良	白色/褐色			
41	37	32 14 S305-原土面上	198 200	高	2.8	24.5							ハケ	石英・白色砂紋	良	白色/褐色			
41	38	33 37 S305-原土面上	185 456	高	1.9	15.7							ハケ	石英・白色砂紋	良	白色/褐色			
44	39	33 17 S305-原土裏・、脇・土・伊	150~1~166 168 300 405 451 182 258	高	2.7			9.4					ヘラミガキ・ハケ・ナデ	石英・白色砂紋	良	青褐色/青褐色			
44	40	33 33 S305-原土裏・、脇・土・伊	150~1~166 286~2~300	高	11.4								ハケ	石英・白色砂紋	良	白色/褐色			
44	41	33 33 S305-原土裏・、脇・土・伊	665	高	1.5	12.8							ヘラミガキ・ナデ	石英・白色砂紋・カタセン石	良	白色/褐色			
44	42	33 35 S305-原土裏・、脇・土・伊	6627 6628	高	2.1	14.1							ナデ・ハケ少	石英・白色砂紋・カタセン石	良	白色砂紋			
44	43	33 35 S305-原土裏・、脇・土・伊	6650	高	1.5	15.5							ハケ	石英	良	白色砂紋			
44	44	33 36 S305-原土裏・、脇・土・伊	5061	高	1.9	18.9							ヘラミガキ・ハケ	石英・白色砂紋	良	白色/褐色			
44	45	34 32 S302-原土	5041 6063	高	8.5		13.4						ハケ	石英・白色砂紋	良	白色/青褐色			

番 号	地 名	施 設 名	通 路 名	附 註	基 上 分 類	面積 (m ²)	高 度 (m)	口徑 (m)	深 度 (m)	剝 離 部 (m)	堆 積 部 (m)	幅 度 (m)	高 度 (m)	形 態 特 徴	解 説	植 生 法	植 物	地 成	色 調 (赤/青)	備 考
50	46	35	35	SBD3-透土	6057	透	17.0	14.9							ハケ	石英・白色砂粒	良	褐色/紫褐色		
50	47	34	26	SBD3-透土	6056	透	7.5	不透							ハケ	白色砂粒	良	明褐色/紫褐色		
50	45	34	34	SBD3-透土	6054	透									ハケ	石英・白色砂粒	良	褐色/紫褐色		
53	49	34	67	SBD2-透土(透SD4)	15078	透	1.5	12.5							ハケ・開穴	石英・白色砂粒	普通	褐色/暗灰色		
59	50	34	61	1号方形崩落區(東SD44)	11513~11220	透	11.6								ハラミガキ・ハケ		良	褐色/紫褐色		
59	51	35	35	1号方形崩落區(東SD44)	11096	透								7.9		ハラミガキ・ハケ		良	褐色/紫褐色	崩落帯凡。54と 同一個体か
59	52	35	107	1号方形崩落區(東SD44)	11116	透	5.6							5.6	ハケ	石英・白色砂粒	良	に赤い褐色/に赤い褐色		
59	53	35	40	1号方形崩落區(東SD44)	11190	透								6.0	ハケ		良	褐色/褐色		
59	54	35	103	1号方形崩落區(東SD44)	11312	透	1.4							8.0	ハケ	石英・白色砂粒	普通	に赤い褐色/に赤い褐色	崩落帯凡。51と 同一個体か	
69	55	35	79	1号方形崩落區(東SD44)・ 透底壁上	11011~11013 11005 11014~11016 11006 11113~11117~11211 11225~11228~11373 11354~11356~1137 11446~11706~2 11707~2 11708~8~11709~11703	透	24.8		24.2						10.7	ハラミガキ・ハケ・(ナダ)	石英・白色砂粒・カクセン石	褐色	褐色/褐色	崩落穿孔
63	56	36	40	2号方形崩落區(東SD45)	11053	透	2.8							8.2		ハラミガキ・ハケ	白色砂粒	良	オリーブ褐色/に赤い褐色	
63	57	56	77	2号方形崩落區(東SD45)	11228	透	1.2	10.0							ハケ	石英・白色砂粒	普通	に赤い褐色/褐色		
63	58	36	47	2号方形崩落區(東SD45)	11058	透	2.2							3.1	ハケ	石英	普通	に赤い褐色/淡褐色		
63	59	36	9	2号方形崩落區(東SD45)	11024~11025 11056 11179~11222	透	14.9	19.1	30.3	16.5					ハケ	石英・白色砂粒	普通	に赤い褐色/褐色		
63	60	36	40	2号方形崩落區(東SD45)	11054~11181	透	4.5	21.2						16.7	ハケ	石英・白色砂粒	普通	に赤い褐色/褐色		
63	61	37	72	2号方形崩落區(東SD45)	11018~359~2	透	16.8							24.7	ハラミガキ・ハケ・ 透開穴	石英・白色砂粒	普通	褐色/に赤い褐色		
67	62	37	5	3号方形崩落區(東SD46)	405 11001~11004 11000 11001~11011 11004 11040~11042~11044 11041~11043 11045~11046~11041 11851~11871	透	40.4	25.4	40.1	30.1	8.9	11.7	19.4	38.0	混合1種で剝離 せりや下剥に岩 壁がある	ハラケズリ・ハケ・ 開穴・ 透開穴	石英・白色砂粒・ 青色砂粒・ 砂利	普通	褐色/に赤い褐色	崩落穿孔
63	63	37	40	2号方形崩落區(東SD46)	11020	透	3.1							6.6	ハケ	石英・白色砂粒	普通	に赤い褐色/褐色		
63	64	37	26	2号方形崩落區(東SD46)	11007	透	1.5							10.8	ハケ	石英・白色砂粒	普通	明褐色/に赤い褐色		
63	65	37	40	2号方形崩落區(東SD46)	11030	透	6.9							8.5	ハケ	石英・白色砂粒	普通	褐色/褐色		
66	66	35	62	2号方形崩落區(東SD15)	11076~11084 11085	透		11.8		7.9					ハケ		良	褐色/褐色		
66	67	35	64	2号方形崩落區(東SD15)	11053~11069 11066~11068 11072~11075 11077~11081 11081~11085 11075~11103~11104 11287~11135 11109~11193 11196 11194~11196~11206 11234~11238 11238~11237 11239 11245	透	17.1		17.3					8.0		ハケ・(ヘア?)	石英・白色砂粒・カクセン石	褐色	褐色/褐色	

回 数	系 列	系 列 区分	遺 構・層 位	取 上 番 号	断 面	残 存 高 (cm)	口 径 (cm)	盃 高 (cm)	瓶 底 直径 (cm)	瓶 底 高 (cm)	口 沿 高 (cm)	瓶 高 (cm)	形 状 特 徴	剖 面 法	胎 土	焼 成	色 調 (灰/青)	備 考	
66	58	58	3方形容圓窓 (東SD45) ・壁土	11158	盤	2.4					9.2			ハケ	石英・白色砂粒	灰	褐色/褐色		
66	69	36	3方形容圓窓 (東SD45) ・壁土	11174	盤	9.4				10.0	5.6			ハケ	石英・白色砂粒	灰	褐色/深褐色		
66	70	39	3方形容圓窓 (東SD45) ・壁土	11086~11095 11182 11188~11195 11203 11208~11239 112734	盤	27.7			26.3	8.8	9.8	14.0		ハケ他	石英・白色砂粒・カクセン石 角	褐色/深褐色付・断に灰い 褐色			
67	71	39	3方形容圓窓 (東SD45) ・壁土	11215 11218	盤	4.5	25.1			21.5				ハケ	石英	普通	褐色/褐色		
67	72	39	3方形容圓窓 (東SD45) ・壁土	11297	盤	2.0	15.4							ハケ	石英・白色砂粒	普通	に高い貴褐色/褐色		
67	73	36	3方形容圓窓 (東SD45) ・壁土	11215	盤	2.7					10.1			ヘラミガキ・ハケ	石英・白色砂粒	普通	に高い貴褐色/褐色		
67	74	39	3方形容圓窓 (東SD45) ・壁土	11304 11296 11207 11211 11212	碗杯	25.9								ヘラミガキ・ハケ	石英	明褐色/褐色	鶴川式系窯坏、 筒と附・個体か ・壺式系窯坏、 71と同・個体か		
67	75	40	3方形容圓窓 (東SD45) ・壁土	1118	碗杯	4.1					12.2			ハケ	石英・白色砂粒	灰	褐色/褐色		
67	76	40	3方形容圓窓 (東SD45) ・壁土	11383~11409 11411 11413~11415 11417 11419 11421 11423~11425 11431 11433~11438 11444 11447~11497 12052	盤	不規 (44.8)	なし			25.8	7.9			12.5	断面の下部がな だらかに広がる 腹原まで・ハケ・ヘラミズリ	石英・白色砂粒	普通	に高い褐色/に低い褐色	
67	77	46	39	3方形容圓窓 (東SD45)	11217	盤	1.7			9.7				ヘラミガキ・ハケ	石英・白色砂粒	普通	褐色/明褐色		
68	78	41	27	東SD45・土壌	11095	盤	2.2							ハケ	白色砂粒	普通	青褐色/暗灰色		
70	79	41	55	第3層	11363~11357 12559 11361~11352 12564 11362~11353 12572 11364~11356 12578 11367~11358 12585	盤	16.9		11.8					ハケ	石英	灰	褐色/褐色		
70	80	61	88	第3層	11316	盤	1.4	16.6						ハケ・ヘラミガキ・断面直角	石英・白色砂粒	普通	褐色/に低い褐色		
70	81	41	85	第2層	11158	盤	2.6	11.3						ハケ	石英・白色砂粒	普通	明褐色/に低い褐色		
70	82	41	68	不明	11369~11382	盤	2.9						11.3	ヘラミガキ・ハケ	石英・白色砂粒	普通	褐色/青褐色		
70	83	41	52	第2層	11308	盤	10.8							ハケ	石英・白色砂粒	普通	褐色/褐色		
70	84	41	75	第2層	11311	盤					7.5			ハケ	石英・白色砂粒	灰	褐色/褐色		
70	85	41	10	不明	11567	盤	1.3				8.0			ハケ	石英・白色砂粒	普通	に高い褐色/貴褐色		
70	86	52	104(南)層	112213	盤	2.3					7.8			ハケ	石英	灰	に高い貴褐色/淡貴褐色		
70	87	62	57	不明	11322~11323	盤					9.1			ハケ	白色砂粒	灰	明褐色/褐色		
70	88	62	61	不明	11306	盤	1.2				5.4			ハケ	石英	普通	に高い褐色/墨褐色		
70	89	45	50	不明	11307	盤	1.2				7.0			ヘラミガキ・ハケ	普通	明褐色/灰褐色			
70	90	45	43	不明	11327~11328	盤	3.6				6.4			ヘラミガキ・ハケ	白色砂粒	灰	褐色/褐色		
70	91	42	44	TPIC 掘出	11945	盤	5.6				9.6			ヘラミガキ・ハケ	白色砂粒	灰	淡褐色/褐色		
70	92	43	91	第2層	11535	盤	2.6	16.8						ナデ	石英・白色砂粒	灰	安褐色/愛褐色		
70	93	42	95	第2層	11268	盤	3.7				9.4			ハケ	石英・白色砂粒	普通	に高い貝色/墨褐色		
70	94	43	54	1715~南	11933	盤					8.1			ハケ	石英・白色砂粒	灰	褐色/褐色		
70	95	43	15	不明	11498	盤	4.5	なし			5.5			ハケ	石英・白色砂粒	普通	褐色/明褐色		
70	96	43	16	不明	11328	盤	5.7	なし			6.1			ハケ	石英・白色砂粒	普通	明褐色/に高い貴褐色		
70	97	43	165	第2層	11277	盤	2.4				5.9			ハケ	石英・白色砂粒	灰	褐色/褐色		
70	98	43	63	不明	11305	盤					5.9			ヘラミガキ・ハケ	石英	明褐色/褐色			
70	99	43	58	不明	11321	盤								ハケ	石英	普通	灰褐色/墨褐色		
70	100	44	53	不明	11324~11326	盤	14.7				12.2			ハケ	石英・白色砂粒	灰	褐色/褐色		
70	101	44	49	第1層	11251	盤	1.6	12.2						ハケ	石英・白色砂粒	灰	褐色/褐色		
70	102	44	57	第1層	11272	盤?	2.2	11.6						ハケ	石英・白色砂粒	普通	灰褐色/褐色		
70	103	44	81	不明	11304	盤?					6.0			ヘラミガキ・ハケ	石英	明褐色/灰褐色	丸窓後期か		

第V章 調査の成果とまとめ

第1節 遺構

1 第2層（新期スコリア層）

溝、土坑が検出された。削平により、遺構の残存状況が良好でない上、共伴遺物も少ないと判断され、遺構の性格・時期を明確にすることは困難なものが多い。現地調査担当者の記述では中世と判断されているため、これを尊重し本報告では中世と判断しておく。

土坑はいわゆる円形土坑と呼ばれるものと考えられる。直径1m前後の平面円形を呈し、断面形は浅い逆台形を呈するものが多い。谷部を中心に分布している点は本遺跡が立地する愛鷹山麓の事例と同様である。溝は、削平により部分的に検出されたものが多い。直線的にのびるものと弧状を呈するものに大別できる。前者は等高線に対し並行するものと直交するものがあり、両者が切り合う事例も確認される。尾根部を主体に検出される傾向が認められる。一方、弧状にのびる溝は、谷部で主体に検出され、等高線に沿って弧状を呈するものが多い。同様の遺構は愛鷹山麓の邊縁谷部で検出されており、同様の性格を有するものと推測されるが具体的な機能は不明である。

2 第3層（栗色土層）

竪穴住居、方形周溝墓、溝、土坑・小穴等が検出された。大半は弥生後期後半から古墳前期初頭に比定されるものと考えられるが、後述するように若干の時期差が存在しているとみて間違いないと判断される。

竪穴住居は、11軒が確認されている。その多くが4本の主柱穴を持ち、中央やや一方に偏った位置に地床炉を設けている。貼床は主柱穴で囲まれた範囲に確認されるもの（1号住居など）、ほぼ全面に確認できるもの（2・5号住居など）があり、掘方は外周がやや深く掘りこまれたもの（1号住居など）、底面をほぼ平坦にするもの（3・4・6号住居）があるようだが、貼床、掘方形状とともに明確に区別するには至らない状況であった。また、12・13号住居は残存状況が悪いものの、切り合い関係が認められる。出土遺物は2・4号住居で残存率が高い土器が出土している以外は、ほとんどが破片資料であり、住居間の出土遺物の比較を行うことは困難である。

掘立柱建物は、3棟確認された。1間×2間に復元できるもの2棟、1間×1間に復元できるものが1棟確認される。前者は平面隅丸方形の掘方を持ち一般的な掘立柱建物の事例に合致するが、後者は柱穴規模が小さく、検出深度も浅いことから、削平を受けた竪穴住居の柱穴だけが検出された可能性が考えられる。なお、1号掘立柱建物は、5号住居を切っており、同時に併存していなかったことが明らかである。遺構の性格上、共伴遺物に乏しく、遺物から時期を決定することは困難であるが、遺構の切り合い関係や後述する遺構の主軸方位の共通性などから、竪穴住居等主要遺構との同時性が推測できる。

方形周溝墓は、3基確認されている。1号方形周溝墓は北東隅に壁塗をもつもので、中央尾根部から検出された。北側が調査区外となっているため詳細は不明であるが2・3号方形周溝墓のように主軸をそろえて密接して群構成を示すような状況はないと推測される。

2・3号方形周溝墓はいずれも周溝の一部が攪乱または調査区外となるため陸橋の状況等は不明であった。3基ともに溝から残存率が高い土器が出土しており、全ての周溝墓から底部穿孔を行った壺が出土している。1号方形周溝墓では無文で球形の胴部を有する壺（古墳前期初頭）を含むのに対し、2・3号方形周溝墓では調節下半に最大径を持つ壺と菊川式系の高壺（いずれも弥生後期後半）が出土しており、後者の方が若干古相を呈すると言える。

2・3号方形周溝墓は正方形に近い平面形を有し、溝が接する群構成を示しているのに対し、1号方形周溝墓は平面長方形を呈し、少なくとも群構成を示さない点において両者の相違点を見出すことができる。

2・3号方形周溝墓は弥生後期後半、1号方形周溝墓は古墳前期初頭の土器の編年観が考えられたことから、築造順序は2・3号→1号であると判断される。

他方、平面規模を比較すると、2・3号が長辺9.5m、短辺8.2m、1号が長辺11.4m、短辺9.8mと後者の方が規模に優位性を見ることが可能と思われる。すなわち、弥生後期後半の群構成をとる2・3号方形周溝墓の後に、規模を拡大し単独構成を示す1号方形周溝墓が築造されたことは、方形周溝墓の被葬者の集落における地位が他から隔絶する変換期であったと評価することができよう。

近年、本遺跡の南東約3.4kmに位置する全長62mの前方後方墳である辻畠古墳が調査され、その築造の年代観が過間II式の前半代に遡る可能性が指摘されている。本遺跡の1号方形周溝墓は辻畠古墳と比較的近い年代に築造されていたことになる。本遺跡を含む愛鷹山南麓の当該期集落では東海西部系を主体とする外来系土器の組成が皆無に近く、外来系土器を豊富に含む辻畠古墳とは地理的には近接しながらも、土器様相は全く異なるため両遺跡に関連性を見出すことはただちにできないものの、墓の変化が集落の質の変容を反映していることは想像にかたくない。

溝は24基が確認されている。第2層で検出されたような弧状の溝は客体的である。中央尾根部のやや下がった位置で検出された畠状遺構とした一群は、主軸をN=20~27°-Wに描え、ほぼ等間隔に掘削されていることから関連性があると判断したものである。本遺跡の南東約1.1kmに位置する植出遺跡でも同様の畠状遺構が検出されている。また本遺跡の東側の谷を挟んで立地するNo.6地点（中見代第I遺跡）では類似した遺構が堅穴住居と扉を遮えて検出されているようである。本遺構が畠等生産遺構に係るものであるかという結論はにわかに判断できないが、愛鷹山麓の当該期の遺跡で散見される同遺構の一例が新たに加えられたということになろう。

土坑・小穴等は55基が検出された。共伴遺物も少ない上、中央谷部にはほぼ等高線に沿って弧状に掘削される小穴は規則性を感じさせる以外は、規則性を見出しがたく、第2層の土坑・小穴と同様、時期及び性格は不明と言わざるを得ない。

3 遺構の時期的変遷について

今回検出された遺構は①共伴土器の編年観、②主軸方位、③切り合い関係によって数段階に分離できる可能性を持っている。ここでは遺構の主軸方位の近似性が時間的同時性を示す可能性が高いと仮定した上で、共伴土器の編年観、切り合い関係を加味して検討を行うこととする。

① 主要遺構のうち、一定量土器が出土し、土器の編年観（註1）から遺構の時期を判断できたものは以下のものがあげられる（第71図）。

- 1 1・2号住居 2・3号方形周溝墓（弥生後期後半）
 - 2 5号住居（弥生後期末～古墳前期初頭）
 - 3 4号住居 1号方形周溝墓（古墳前期初頭）
- ② 共伴土器の編年観に各遺構の主軸方位を加味すると、以下の4つに分類することができる（第72図）。弥生後期後半は共伴土器からは時期的前後差は明確にできないものの、堅穴住居・溝と方形周溝墓の2群に細別することができる。

	1号住居	2号住居	2・3号方形周溝墓
弥生後期後半			
弥生後期末～古墳前期初頭	3号住居	5号住居	
古墳前期初頭	4号住居	1号方形周溝墓	

第71図 主要遺構の共伴土器の時期
(矢印は切り合い関係を示す)

- 1 1・2号住居 東SD29・31 (N-45°~62°-Wに主軸をとるもの)
 - 2 2・3号方形周溝墓 (N-6°~8°-Wに主軸をとるもの)
 - 3 3・5号住居 2号掘立柱建物 煙状遺構 (N-22°~30°-Wに主軸をとるもの)
 - 4 4・6・10号住居 1・(3)号掘立柱建物 1~3号方形周溝墓 (N-12°-W~N-1°-Eに主軸をとるもの)
- ③ 切り合い関係により時間的関係が認められたものとして、以下のものがあげられる。この切り合い関係は①土器の編年観、②遺構の主軸方位による段階設定と矛盾していない（第71・72図）。
- 1 3号住居→1号方形周溝墓
 - 2 5号住居→1号掘立柱建物
- 以上の①～③を勘案すると、遺構の時期的変遷はおおむね以下のとおりになると推測される。

時期	主軸	竪穴住居		掘立柱建物	方形周溝墓	その他
		横円形	隅丸方形			
弥生後期後半	第I群	a	1号 2号			東SD29 東SD31
		b			2号 3号	
古墳前期初期	第II群			3号 5号	2号	煙状遺構
古墳前期初期	第III群			4号 6号 10号	1号 (3号)	1号

第72図 主要遺構の主軸方向と切り合い関係（矢印は切り合い関係を示す）

第Ia群・弥生後期後半（第73図）

1号住居、2号住居が該当する。主軸方位が近似する東SD29、東SD31も本段階に含めた。2本の溝の性格は不明であるが、2軒の竪穴住居はいずれも平面が小判形を呈するもので約12m程の間隔をもって立地しており、第II・III群の住居と似た状況を示している。掘立柱建物は未確認である。

第Ib群・弥生後期後半（第73図）

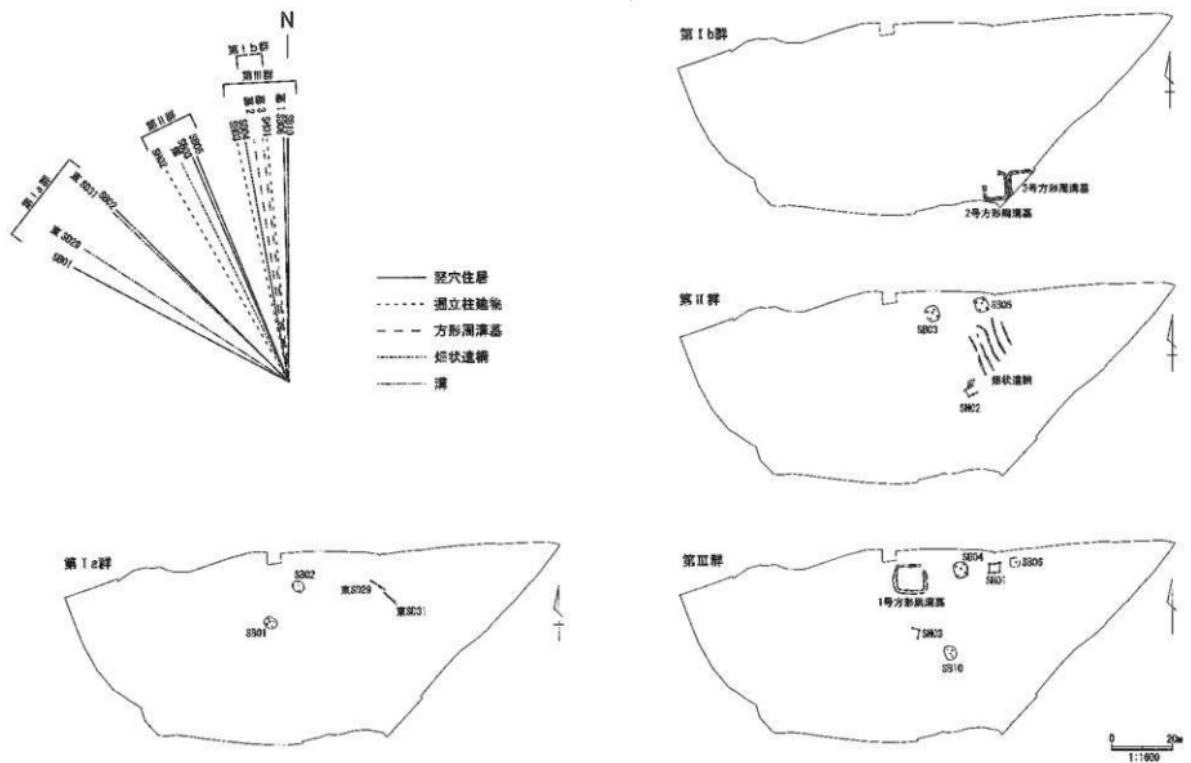
2号方形周溝墓、3号方形周溝墓が該当する。共伴土器の編年観は第Ia群と差は見出しがたいが、遺構の主軸方位が異なることから便宜的に分離した（註2）。谷部で検出されており、第Ia群とは分布を異にしている。

第II群・弥生後期末～古墳前期初頭（第73図）

3号住居、5号住居が該当する。主軸方位が近似する2号掘立柱建物、煙状遺構も本群に含めた。2軒の竪穴住居はいずれも平面が隅丸方形を呈するもので第Ia群と同様約12mほどの間隔をもって立地し、この2軒とL字形となる位置に2号掘立柱建物もほぼ同程度の距離に立地している。煙状遺構はこのL字形の建物配置の内側に形成されている。

第III群・古墳前期初頭（第73図）

4号住居、1号方形周溝墓が該当する。主軸方位が近似する6号住居、10号住居、1号掘立柱建物、3号掘立柱建物（竪穴住居か）も本段階に含めた。竪穴住居はいずれも平面が隅丸方形を呈するもので



第73図 遺構方位比較と変遷図

6号・4号・10号がそれぞれ14m、22mの間隔でL字形に並び、4号と6号の中間に1号掘立柱建物が位置している。6号住居は他よりやや小型の豈穴で主柱穴は未確認である。1号方形周溝墓6号住居～1号掘立柱建物～4号住居を結んだ延長線上に位置する。豈穴住居と共伴土器の縦年観が一致するためここに含めたが、居住域と墓域形成の觀点から分離すべきかもしれないが、便宜的に本群に含めている。なお、3号掘立柱建物（豈穴住居か）は1号方形周溝墓の南側に位置している。

以上のとおり、主要遺構は共伴土器の縦年観、切り合い関係、主軸方位によって4段階に分離して考えた。今回の調査対象地はごく一部であり、北側及び南側に集落が広がる可能性がある上、後世の削平により消滅した遺構もあったと推測される。よって、今回の遺構群の組み合わせがどの程度当時の集落景観を示しているか不明な部分があるものの、掘立柱建物1棟に対し数軒の豈穴住居が主軸を同じくし、一定の間隔をもってL字形の建物配置を示している点は今後の集落調査の成果をもってその妥当性を判断する必要があろう。また、居住域と墓域の関係で考えた場合、土器の縦年観では明確な差は見出しがたいものの、弥生後期後半の居住域（第Ia群）に対応する墓域（第Ib群）と、弥生後期末～古墳前期初頭の居住域（第II・III群）に対応する墓域（第III群の1号方形周溝墓）を見出せる可能性がある。

豈穴住居は上記、第Ia群、第II群、第III群各々で互いに干渉せずに12～14mの等間隔に分布することが指摘できそうであり、第II・III群では掘立柱建物1棟（註3）に対し豈穴住居数軒が配置される景観を考えることもできそうである。よって、豈穴住居と掘立柱建物については第Ia群→第II群→第III群の順番に変遷した可能性が考えられる。なお、第I群は前述のとおり、平面隅円形の豈穴住居、第II・III群は隅丸方形の豈穴住居であることから遺構形態の觀点からも妥当性を見出せる。第Ia群の溝と第II群の溝の切り合い関係はこれを顛覆なく説明できる。また、第II群と第III群については、第II群の5号住居と第III群の掘立柱建物の切り合い関係から前者から後者へ移行したと想定することができる（第73図）。

以上のことから、第3層の遺構群は、共伴遺物、切り合い関係と主軸方位の検討によれば第Ia/b群から第II群へ、そして第III群へ時期的に変遷していったと推測できる。ただし、これら遺構の共伴遺物は限定されており、出土遺物による詳細な前後関係の追認や遺構間の時期幅を検討することは困難である。特に第III群については豈穴住居、掘立柱建物、方形周溝墓が含まれており、前述のとおり、1号方形周溝墓出土土器は他の遺構出土土器よりもやや新しい傾向を見出せるものの、これらが時期的に分別可能かどうかは検討が困難である。

4 周辺遺跡との関連について

今回の調査対象範囲は、丘陵が傾斜変換を示す先端部及び谷部であり、検出された遺構群は、集落の一部に過ぎないと判断されるため、集落に関する詳細な検討は困難である。しかし、本遺跡周辺では弥生後期～古墳前期初頭の集落遺跡の調査例が多く蓄積されている（註4）。これら隣接する集落遺跡の状況から本遺跡のあり方を類推することは可能であると考えられる（第74図）。

本遺跡の西に谷を挟んで隣接する八兵衛洞遺跡群、東に位置する植出北遺跡では、土坑を伴う大規模な溝が尾根を分断するように東西に掘削されている。八兵衛洞遺跡群では溝を境に豈穴住居をはじめとする遺構の密度が大きく異なることから、この溝は集落を区画する溝（環濠）と考えられている（高尾 1999）。植出北遺跡の溝も同様の性格を有するものと考えられる。

この溝は、第二東名の路線にほぼ沿うような位置に確認できるが、八兵衛洞遺跡群と植出北遺跡の溝の延長上に位置する西洞遺跡、中見代I遺跡ではこの溝は未確認であり、各尾根に同様な溝が存在していたとすれば、本遺跡では調査区の北側に存在していたことになろう。

これまで東名沿津インターから同愛鷹パーキングエリア付近における愛鷹山麓の北から南に延びる

第74図 西御連峰周辺の新生代地帯～古生代地帯の露頭風景（資料提供：滋賀県教育委員会）



舌状丘陵は、弥生時代後期～古墳時代初頭の大集落域を形成している点が注目されていた。このたび第二東名建設調査が行われた八兵衛洞遺跡群と椎出北遺跡の溝の検出により、尾根単位で一定規模の集落が展開しているという認識に加え、各尾根の集落が隣接する集落と密接な関係あるいは規格性をもって展開しているという評価を加えることができると考えられる。

第2節 遺 物

1 時期と特徴の概要

弥生後期後半から古墳前期初頭の土器が大半を占めている。壺、甕を主体として高环が少量確認できる。壺は下膨れまたは球形に近い底部を有し、無文で外面をミガキ調整するものと肩部に結節縄文や櫛刺突羽状文を施文するものがある。口縁部は単純口縁、折り返し口縁、複合口縁が確認でき、当該期の土器の特徴を良好に示している。壺はいずれも台付壺で胴部上半に最大径を持つものと球形に近いものがある。口縁部にキザミを持つものは少ないといった特徴を有する。高环は確實なものは1点だけである。県西部（東遠江）の菊川式の高环の特徴を示している。壺の一部と高环については菊川式の影響を強く持っていると考えることができよう。

2 器種組成比率

今回出土した弥生後期後半から古墳前期初頭の土器の器種組成比率（土器重量計測に基づく）は第75図のとおりである。この集計は当該期と判

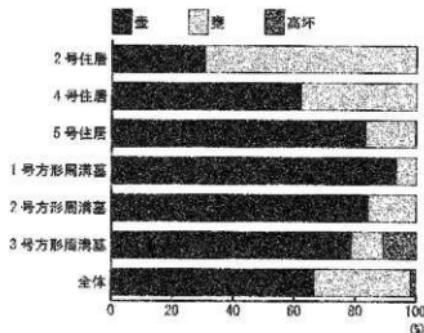
断される全資料を対象とし、形状及び破片資料については調整方法等から判断した（註5）。これによれば、全資料の比率では壺64.8%、甕33.6%、高环1.6%の比率となつた。遺構種別では当然ながら、方形周溝墓で壺：78.7%、甕10.4%、高环11.0%（3号）、壺84.3%、甕15.7%（2号）、壺93.3%、甕6.7%（1号）と壺が高比率で確認され、一方、竪穴住居では土器の残存率が比較的良好であった2・4・5号住居において、壺83.2%、甕16.6%、高环0.2%（5号住居）、壺62.0%、甕：38.0%（4号住居）、壺30.5%、甕69.5%（2号住居）で甕の比率が増していることが改めて追認できた。

3 壺（第76・77図）

（1）口縁部形態

単純口縁、折り返し口縁、複合口縁の3種に大別できる。単純口縁は、明確に外反するもの（25・40）と、わずかに内湾気味となるもの（3・22・30）が認められる。23は口唇部を欠損するが、後者に分類されるものと考えられる。内湾気味に聞く口縁部は県西部（東遠江）の菊川式に通有の特徴と考えられ、当地域土器様式への影響のひとつと考えられる。ただし、口縁部外面にハケ調整を残すもの（3・30）がある一方で、底部外面を無文とし、ほぼ全面をミガキ調整するもの（22・23）も認められることから、菊川式のそれとは明らかに型式変化したものと考えられる。

折り返し口縁は、大半が破片資料であり、詳細な検討は困難であるが、口縁部が大きく外反し、折り



第75図 出土土器の器種組成比率
(弥生後期後半～古墳前期初頭)

返し部裏面が側面からほとんど見えないもの（5・18・33・40・43）と口縁部の外反が弱く、折り返し部裏面が側面から明瞭に見えるもの（49・66）がある。前者は菊川式にも類似したものがある一方、後者は当地域特有の形態である。

複合口縁及びその系列で理解できるもの（31・32・62）はそれぞれ特徴が異なっている。31はやや長い棒状浮文から複合口縁の系列と判断したものであるが、複合部の付加は不明瞭で、開きが大きい内湾口縁を作ることにより外見的に複合口縁の効果を見せていくように理解できる。また、32は無文、62は複合部外面に結節繩文を施文後、棒状浮文を付加している。

(2) 脊部形態

脛部下半に最大径を持ついわゆる「しもぶくれ」形のもの（9・62・69・70・76）と脛部中位附近に最大径をもち球形を志向したもの（22・23・45・61・67）がある。67・69・70が脛部にハケを残す以外は脛部をミガキ調整するものが主体となると考えられる。前者は菊川式、後者は当地域の調整方法に多い傾向が認められる。

(3) 底部形態

底部外面が突出気味となるものは内面に明確な平坦面を持ち、脛部下半との接合部分に段差等が認められるもの（9・62・77）が多いのに対し、底部外面の突出が少ないものは内面に平坦面を持たず、脛部下半との接合部分も緩やかなもの（70・73）が多い傾向が認められるようである。これは底部怪とも関連がありそうで、底径が大きいものは脛部下半の粘土紐積み上げが底部中央から相対的に離れるものが多いため、粘土紐積み上げの際に段差ができやすいのに対し、底径が小さいものは脛部下半の粘土紐積み上げ開始部が底部中央に近いため、底部中央から滑らかな曲線を描くものが多いと推測されるのである。なお、方形周溝墓出土の壺底部は穿孔されたものが多いことは言うまでもない。

(4) 施文方法

脛部が無文のもの（9・22・23・55・67・76）が主体となると考えられるが、結節繩文を脛部に施文するもの（61・62）、櫛刺突文を脛部に施文するもの（70）が一部認められる。無文のものは外面をミガキ調整するものが多いが、脛部の一部のミガキ調整が散漫となるもの（76）は文様帶を意識したものであった可能性があろう。結節繩文を脛部に施文するもの（62）は、結節部に円形浮文を貼付しており、菊川式の施文方法に沿っている点は留意すべきであろう。櫛刺突羽状文を脛部に施文するもの（70）はその下位に結節繩文を加えており、口縁部内面にも結節繩文が確認できる。櫛刺突羽状文の施文部位には粘土帶の付加等による段が確認されないことから、菊川式のうち、菊川流域の特徴を持っていると考えることができそうである。

4 壺（第76・77図）

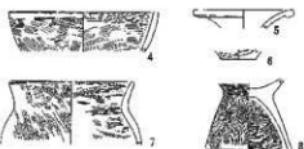
(1) 口縁部形態

口唇部にキザミを持つもの（21・34）は少なく、キザミを持たないもの（11・15～17・20・24・58他）が主体となるようである。キザミを持つものは口唇部を面取りすることを基本とするが、キザミを持たないものは、口唇部は明瞭に面を持つもの（20・24・58）と不明瞭なもの（7・11・14～17）がある。後者には口唇部を未調整に近い状態としたもの（11・14～17）が含まれており、製作手順の簡略化を示している可能性が考えられる。口唇部を未調整に近い状態としたものはいずれも2号住居で検出されており、本遺構の特徴であるのかもしれない。

(2) 脣部形態

長脣気味のもの（16・24）と球脣を志向したもの（11・15・17・34・58）が確認できるが、互いに共伴関係にある。いずれも外面は右下がりのハケにより調整されている。内面はハケ調整するもの（15・24・34）とナデ調整するもの（11・14・16・17・58）がある。

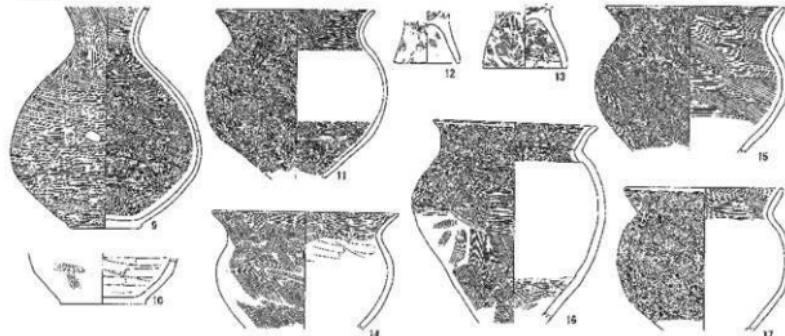
1号住居



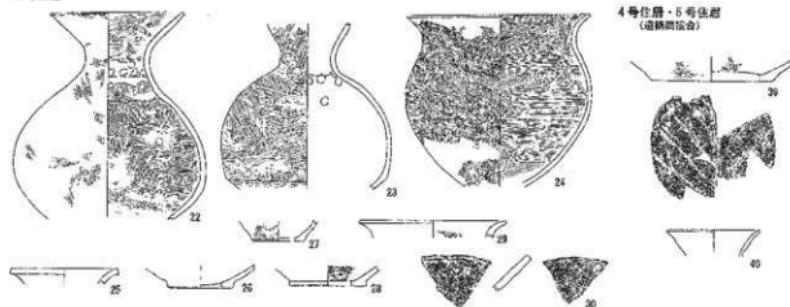
3号住居



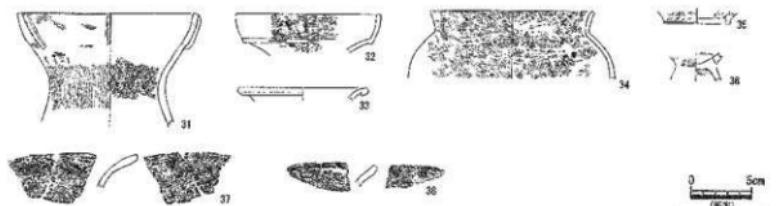
2号住居



4号住居

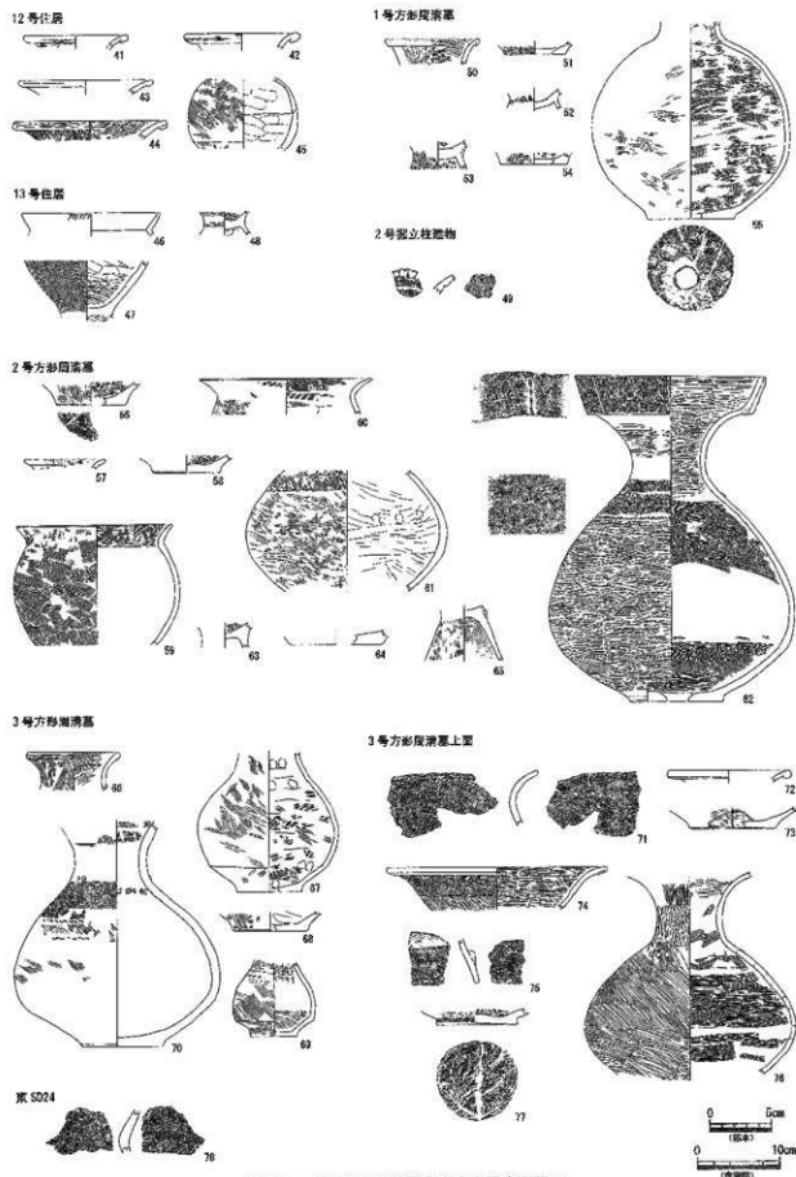
4号住居・5号住居
(追跡調査)

5号住居



0 5cm
(厘米)
0 10cm
(厘米)

第76図 第3層上面遺構内出土土器実測図1



第77図 第3層上面遺構内出土土器実測図2

(3) 台部形態

破片資料が多く、詳細な検討は困難である。台部内面をハケ調整し、内面上部に台部と底部の接合部を残すものが多い傾向にある。

(4) 特徴的な土器

弥生後期後半に比定される1・2号住居の變形土器の口唇部は明確に面取りするものが少なく、口縁部外面をヨコハケ調整するか、未調整に近い状態とするものが主体となっている。当該期の變形土器の同箇所の調整方法は口唇部を明確に面取りし、口縁部外面をタテハケ調整するものが多いことを考へるとやや異質な印象を受ける。現状では類似例を見出せないため結論はでないが、調整方法等による詳細な検討が当該期土器研究の進展に寄与する可能性があると考えられる。

5 高环（第76・77図）

74は内湾する环部に外反する折り返し口縁を付加するものである。同一個体と考えられる脚部（75）は裾部に段を設けるもので、いずれも県西部（東遠江）の菊川式の特徴を示している。

环部内面を横方向の丁寧なヘラミガキ調整とし、环部外面は口縁部にハケ調整を残し、口縁部と环部の境目の段以下を縦方向の丁寧なヘラミガキ調整を行うこと、脚部破片は、裾部外面に粘土帯を付加し段を設け、裾部帯を形成するもので、裾部帯外面を斜めハケ、内面をヨコハケ調整することから、环部、脚部ともに菊川式の高环の製作技法が墨守されていると言えよう。环部下半が半球形を志向し、口縁部は外反が弱く立ち気味となること、裾部段が幅広であることなどから、菊川式最新段階に比定することができよう。この高环はいわゆる古式土器（東海西部系のS字型B類、有稜高环等）の段階には基本的に消滅すると考えられることから、本資料が出土した3号方形周溝墓は菊川式最新段階（弥生後期末）に比定することができると考えられる。

4は高环の口縁部破片と判断したものである。本遺跡が立地する東駿河地域では当該期の高环の組成比率は極めて低く、今回の調査でも本資料と前述の菊川式系の高环だけである。

6 壺底部に残された製作時の痕跡について

今回出土した土器は必ずしも完形率が高いものばかりではないが、弥生後期後半から古墳前期初頭の土器を検討する上で参考になる資料が出土している。土器片の中には土器製作時の輪積み痕や調整痕が良好に観察できるものが認められた。ここでは、壺底部に残された製作時の痕跡とともに、これまであまり触れられることがなかった土器の製作技法について若干の検討を行う。

資料1 底部外縁の剥離（第78図）

4・5号住居で接合関係が認められた39は底部中央の円盤から底部外縁が剥離したかのような剥離状況を示している。円盤の周縁はわずかに内傾する面をなすことから、円盤の周囲に底部外縁を附加して肩部成形の素地としたと考えられる。よって、外面の底部の突出は少なく底面から緩やかな曲線で胴部へつながっている。内面は円盤と外縁との接合面部分がわずかに窪んでいることから、両者を接合する際のナデ付けが影響していると考えられる。

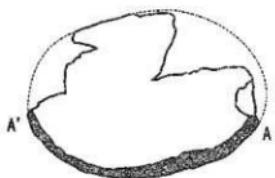
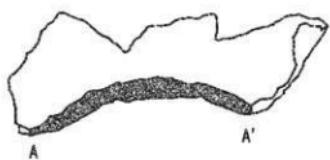
底部裏面の木葉痕は円盤、外縁に關係なく認められることから、円盤と外縁との間の内面の窪みを考慮すると木葉の上で円盤と外縁を接合して底部とした可能性が高いと推測される。

資料2 底部周縁の面取り（第79図）

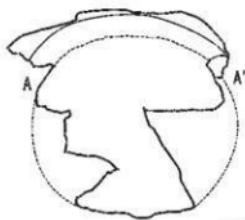
3号方形周溝墓上面で確認された77は底部周縁に斜位の面取りが認められる。これは、底部の周縁に胴部下半の成形の際に生じたと推測される粘土のはみ出しを搔き取る行為と考えられる。その傍証として、底部突出部のハケ調整面が底部の周縁への圧着により凹面状に変形していること、面取りにより搔き取られた粘土の一部が変形した凹面に付着していることを提示できよう。

また、面取りは底部裏面の木葉痕を切る上、面取り工具の先端の当たりと考えられる縁状痕が胴部下

資料 1



■ 剥離面

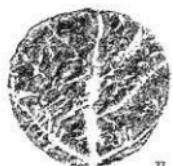
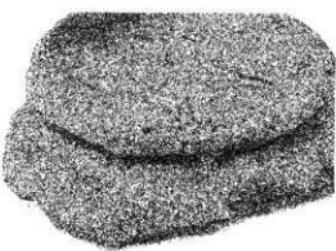
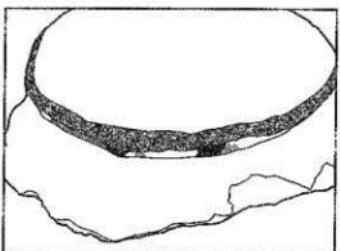
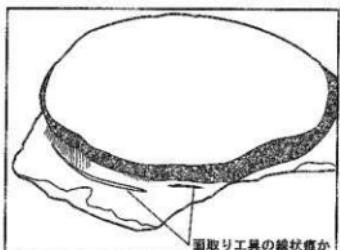


----接合箇所



第78図 壺底部資料 1 (4・5号住居間接合土器)

資料 2



77

第79図 壺底部資料 2 (3号方形周溝墓上面土図)

半に確認できるため、少なくとも胴部下半の製作が完了した時点で行ったと考えられる。

以上の観察から、底部の突出が少ない底部は円盤状の底部の周囲に粘土糰を付加する形で胴部を成形しているものが含まれること、底部が突出し、縁辺に粘土のはみ出しが認められるものは底部縁辺に調整（面取り）を加えたものである可能性が考えられた。特に後者は資料2において底部縁辺の調整の際に工具の先端の線状痕が胴部下半に残していることを考えた。ここで見た2つの資料は外見上形態が大きく異なるが、製作技法もまた異なっていた可能性を示すものであると考えられる。東濃河における当該期の土器は県西部の菊川式をはじめいくつかの系統の土器が複雑に交錯した姿を示すことが多い。本資料はいずれも当地域で一般的に認められる底部であるが、この違いが当地域の土器研究の一視点となれば幸いである。

7 まとめにかえて

今回出土した土器は残存状態が良好でないものが多く、遺構共伴資料及び遺構間での土器の比較は困難であった。ただし、壺の底部の形状や県西部の菊川式の影響を受けたと考えられる壺や高环から土器の製作技法や他地域との並行関係をうかがい知ることができる資料も含まれていた。

2・3号方形周溝墓出土土器は、県西部の菊川式の影響を強く見られることが特徴のひとつである。すなわち、器種の段階では菊川式の高环（74・75）、器形の段階では胴部下半に最大径を持ち、底部の突出が少ない壺（69・70）、施文方法では結節施文（61・62・70）、櫛刻実文（70）などである。このうち、菊川式のそれに忠実なものは、壺（70）高环（74・75）ということにならうが、特に壺では今回の調査の中で施文を有する比率は2・3号方形周溝墓において最も高く、比較資料が限られていることは考慮すべきであるが、土器の出自と被葬者の関係を考えると興味深い。

当該期土器群は器種組成が単純で型式変化も漸移的であり、土器の時期的変遷を捕えることには課題が多いが、土器に残された製作技法の一部はその解決の糸口になる可能性が考えられる。

註

- 出土土器の編年観については富士宮市教育委員会渡井英善氏にご教示いただいた。記して感謝申し上げる。
- 調査で確認された土器の時期層の中で遺構を主軸方位により分離し、居住域から墓域という一般的変遷を想定し群区分しているに過ぎない。よって第Ia群と時間的前後関係が入れ替わるまたは同時である可能性は否定しない。
- 第IV章で記述したとおり、3号掘立柱建物と報告したものは削平を受けた竪穴住居の柱穴である可能性が高いため、ここでは掘立柱建物とは見做していない。
- 第74図の作成にあたり、沼津市教育委員会池谷信之氏から資料掲載に関するご配慮をいただいた。記して感謝申し上げる。
- 形状から器種の特定に至らない破片については、外面ミガキ調整のものを壺、外面ハケ調整のものを甕と判断した。なお、調整方法が不明瞭または、接合段階での個体分類により器種が判明する個体と同一個体であることがほぼ確実と判断されるものについては調整方法によらずに器種を判別したものがある。

参考・引用文献

- 高尾好之 1999 「2 大規模土坑群を伴う環濠」『静岡の現像をさぐる』静岡県埋蔵文化財調査研究所
静岡県埋蔵文化財調査研究所 1997 「北神馬土手遺跡 他Ⅰ」(遺構編 本文)

写真図版

図版1



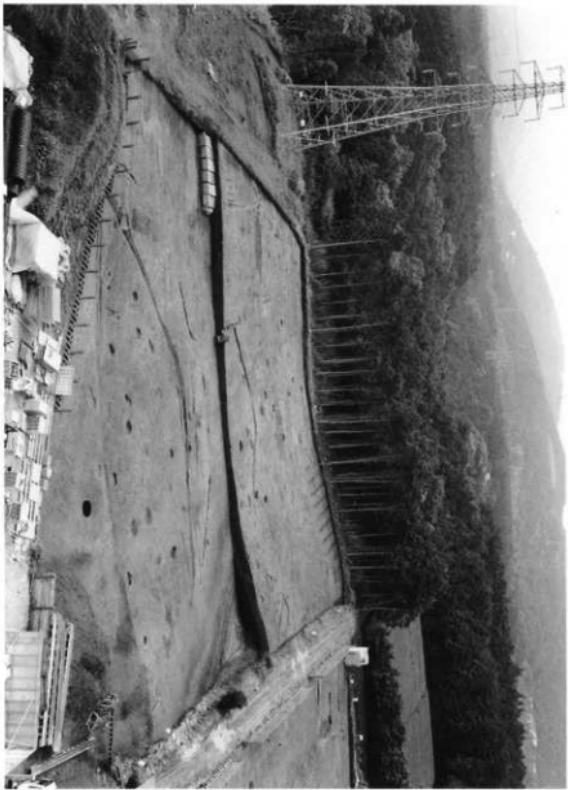
調査区全景1（南西から）



調査区全景2（東から）



第2層上面 東区全景（南西から）



第2層上面 西区全景（南から）



第2層上面 東区拡張区全景（南東から）



第2層上面
東道路区全景
(南から)

図版4



第2層上面 西道路区遺構検出状況（南東から）



第2層上面 東SP57穴掘状況（北東から）

図版5



第3層上面 全景（上空から）合成写真

図版6



第3層上面 東区全景（南から）



第3層上面 西区全景（南東から）



第3層上面 東道路区全景（南から）



第3層上面 西道路区全景（南から）

図版8



第3層上面 東区烟状造構全景（南東から）



第3層上面 東区拡張区全景（南東から）

図版9



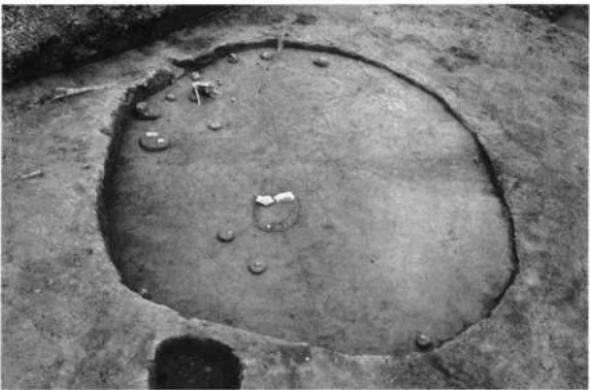
第3層上面 東道路区1号方形周溝基西溝完掘状況（東から）

図版10

1号住居
遺物出土状況1
(北西から)



1号住居
遺物出土状況2
(北西から)

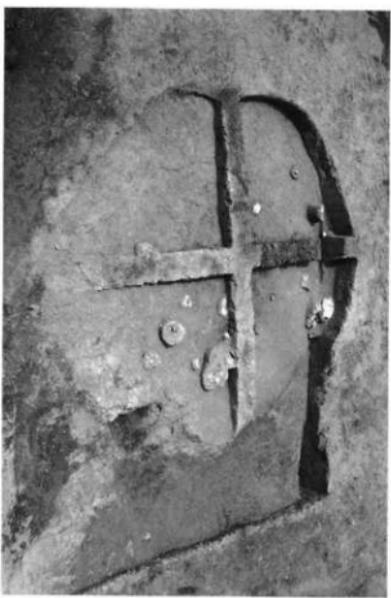


1号住居
完掘状況 (北西から)





2号住居
遺物出土状況2
(南東から)



2号住居
遺物出土状況1
(南東から)



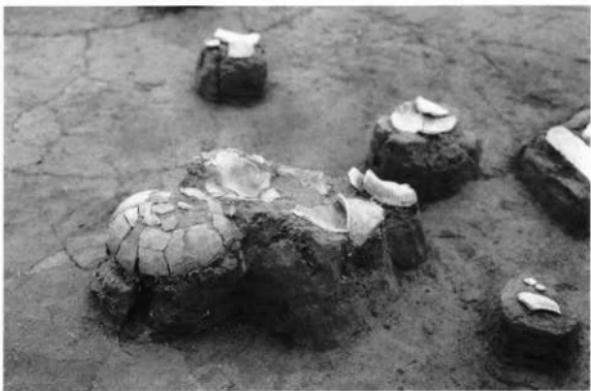
1号住居
炉半載(北東から)

図版12

2号住居
遺物出土状況拡大1
(東から)



2号住居
遺物出土状況拡大2
(北東から)



2号住居
完掘状況(南東から)



図版13

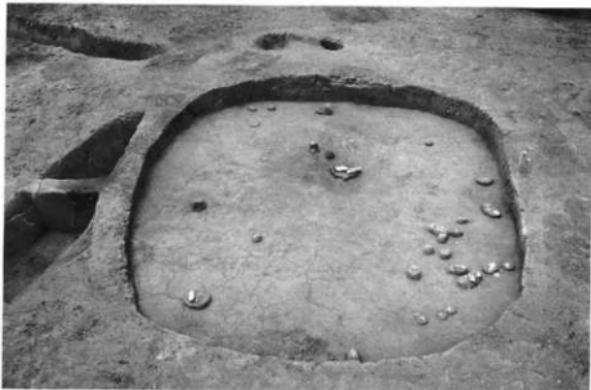
2号住居
炉半截（東から）



3号住居
遺物出土状況1（南から）



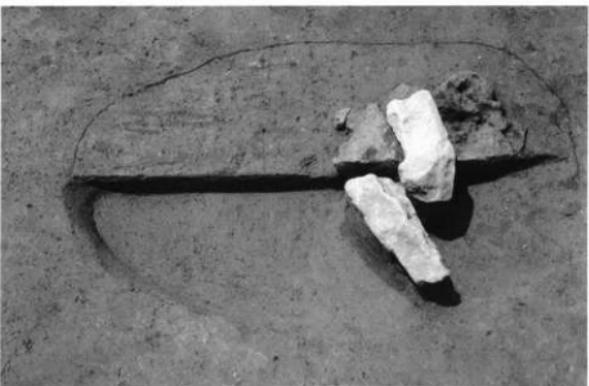
3号住居
遺物出土状況2（南から）



図版14



3号住居
完掘状況（南から）



3号住居
炉半截（東から）



4号住居
遺物出土状況1（南から）

図版15



4号住居
遺物出土状況2（南から）



4号住居
遺物出土状況拡大
(南から)



4号住居
完掘状況（南から）

図版16

4号住居
炉半載（南から）



5号住居
遺物出土状況1（南から）



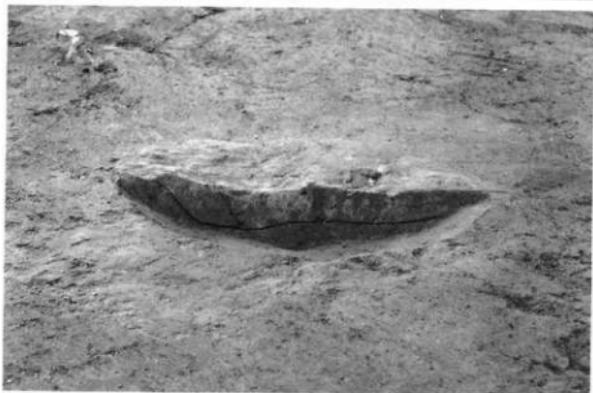
5号住居
遺物出土状況2（南から）



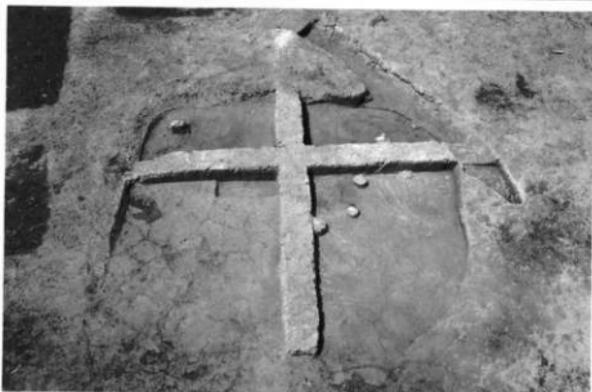
図版 17



5号住居
完掘状況（南から）

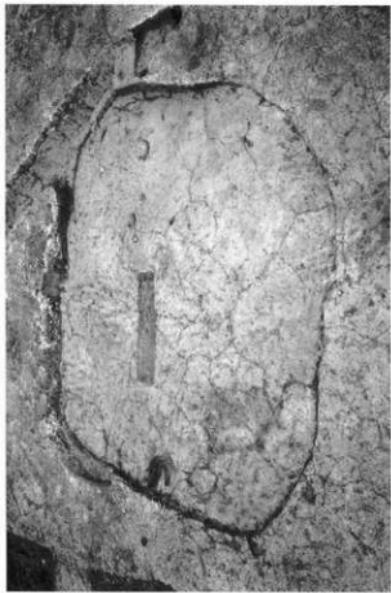


5号住居
炉半截（西から）

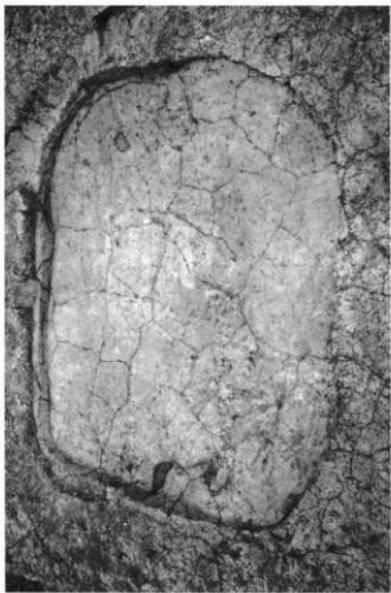


6号住居
遺物出土状況 1（南から）

图版18



6号住居
遺物出土状況2(南から)



6号住居
遺物出土状況(南から)



6号住居
炉半截(西から)

図版19



7号住居
遺物出土状況
(南東から)



7号住居
完掘状況(南東から)



10号住居
遺物出土状況1
(南から)

図版20

10号住居
遺物出土状況2
(南から)



10号住居
完掘状況(南から)



10号住居
炉半截(東から)



図版21

12号・13号住居
遺物出土状況（西から）



12号・13号住居
完掘状況（西から）



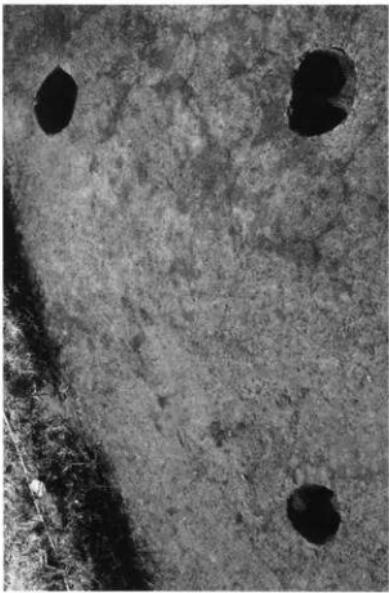
1号掘立柱建物
完掘状況（南から）



图版 22



2号掘立柱遺物
完掘状況（南東から）

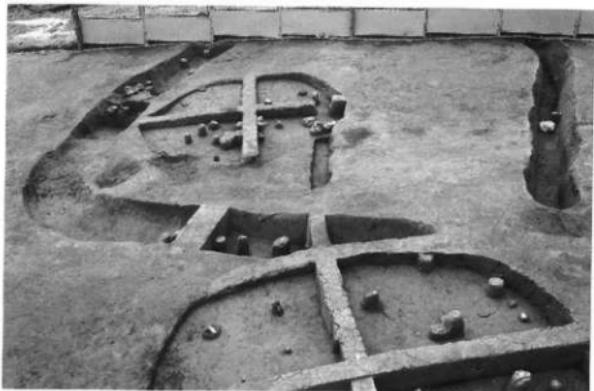


3号掘立柱遺物
完掘状況（東から）



1号方形周溝墓
遺物出土状況（南から）

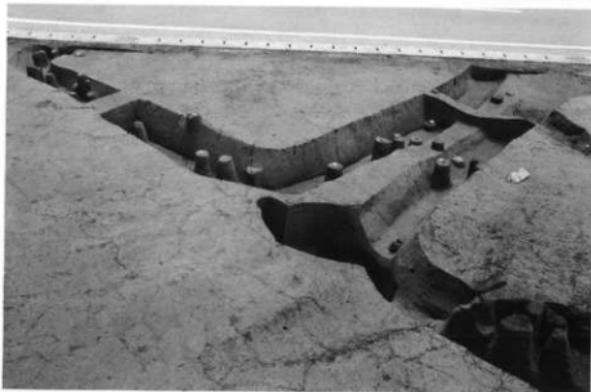
図版23



1号方形周溝墓
遠景（東から）



1号方形周溝墓
発掘状況（南から）



2号・3号方形周溝墓
遺物出土状況
(北西から)

図版24



2号・3号方形周溝墓
遺量（北から）



2号・3号方形周溝墓
完掘状況（南西から）



2号方形周溝墓
遺物出土状況1（東から）

図版25



2号方形周溝墓 西溝
遺物出土状況2
(北から)



2号方形周溝墓 西溝
遺物出土状況3
(南西から)



3号方形周溝墓
全景(南西から)

図版26

3号周溝墓上面
遺物出土状況
(北西から)



第3層上面 東SD20
完掘状況 (南から)



図版27



1 東SD49



2 西SD29



3 東SP03



3 東SP03



4 SB01



5 SB01



6 SB01



7 SB01

図版28



8 SB01



10 SB02



9 SB02



11 SB02



12 SB02



13 SB02

図版29



14 SB02



15 SB02



16 SB02



17 SB02



18 SB03



19 SB03

図版30



20 SB03



20 SB03



21 SB03



21 SB03



22 SB04



23 SB04

図版31



24 SB04



25 SB04



26 SB04



27 SB04



28 SB04



29 SB04



30 SB04

図版32



31 SB05



32 SB05



33 SB05



34 SB05



35 SB05



36 SB05



37 SB05



37 SB05

図版33



38 SB05



38 SB05



39 SB04・05



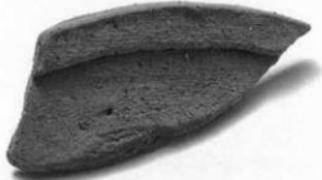
40 SB04・05



41 SB12



42 SB12



43 5SB12



44 SB12

図版34



45 SB12



46 SB13



47 2SB13



47 SB13



48 SB3



48 SB13



49 SH02



50 1号方形周溝墓

図版35



51 1号方形周溝墓



52 1号方形周溝墓



53 1号方形周溝墓



54 1号方形周溝墓



55 1号方形周溝墓

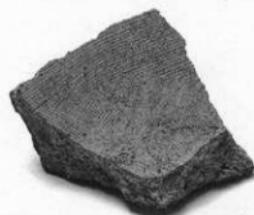


55 1号方形周溝墓

図版36



56 2号方形周溝墓



56 2号方形周溝墓



57 2号方形周溝墓



57 2号方形周溝墓



58 2号方形周溝墓



58 2号方形周溝墓



59 2号方形周溝墓



60 2号方形周溝墓



61 2号方形周溝墓



62 2号方形周溝墓



62 2号方形周溝墓



63 2号方形周溝墓



63 2号方形周溝墓



64 36 2号方形周溝墓



65 2号方形周溝墓

图版38



65 2号方形周溝墓



66 3号方形周溝墓



67 3号方形周溝墓



67 3号方形周溝墓



68 3号方形周溝墓



69 3号方形周溝墓



70 3号方形周溝墓



71 3号方形周溝墓



73 3号方形周溝墓



72 3号方形周溝墓



73 3号方形周溝墓



72 3号方形周溝墓



74 3号方形周溝墓

图版40



74 3号方形周溝墓



75 3号方形周溝墓



76 3号方形周溝墓



77 3号方形周溝墓



77 3号方形周溝墓

図版41



78 東SD24



79



80



81



82



83



84



85

図版42



86



87



88



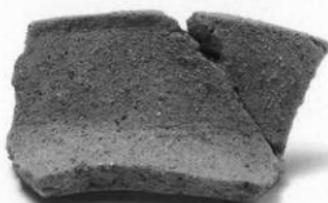
89



90



91



92



93

図版43



93



94



95



95



96



97



98



99

図版44



100



101



102



103

報 告 書 抄 錄

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第240集

西洞遺跡 I

第二東名No.8地点

弥生時代以降編

沼津市-7

第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成23年3月25日 発行

編集・発行 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
〒422-8002 静岡県静岡市駿河区谷田23-20

TEL 054-262-4261㈹

FAX 054-262-4266

印刷所 みどり美術印刷株式会社
〒410-0058 沼津市沼北町2丁目16番19号
TEL 055-921-1839㈹

